二上リ萬代の神のみことの二柱、仰ぐもおろかなり、げに世のはじめ其水上のあかの水きよめ奉る、まづ人間の初月をば不動明王の受け取り給ひて、本來空の一物これとかや、祓ひ清めたてまつるの、つぎをばいかにと尋ぬるに、本心の靈心私なく、初めて明德と名づけ奉るの、二月めには獨鈷の形のあらはれて、これをたのしと名づけ奉るの、我朝にては神りよと仰ぎ名づくる、所は隔つれど文珠菩薩のうけとりにて、三鈷の形にそなへ給ひ、晝夜守らせ給ふとかや、次をいかにと尋ぬるに、五つ月めには六根手足をさいしきて、五體殘らず連續し、此時に至りて地藏菩薩の御守り、寵愛ことに淺からず、ちやうち〳〵あわゝ、かぶり〳〵しほの目、錫杖に打乘つて、いんじんしよ〳〵いんじんしよと勇み給ひて、次をいかにと尋ぬるに、六月めになりしかば、好む所欲する所自然にてうじ、母の乳味を吸ひとる事、申さばいはば凡三石六斗なり、つぎつぎ〳〵は阿閦彌勒の御守り、當る十月は大日の御守り、四方にくわつと廣め給へば、梵天帝釋八百萬よの御神かぐらを奏し給へば、神樂の鈴がりん〳〵〳〵、りん〳〵〳〵〳〵りん〳〵〳〵〳〵、

たのし―出の字の誤なるべし
神りよ―神慮か
さいしきて―彩色より轉じて分れそなはる意

うつたり〳〵太鼓つゞみ、どん〳〵から〳〵とんからが、どつと生れた若ゑびす、顏みせ代々の笑ひ顏おもしろや

㊃ 市野屋

生島新五郎

二上リ京のみやゐに何々もらうた、蒔繪の差櫛桐のたう、あゝもんつくつ、おれに一代そふ身ぢやとても、あだし此身はどうもせ、心とき櫛いのちぢや「戀風ふかばえい〳〵な、わけある方へさそはどさそへ、行く水に川島あいをこがれいで、舟はおぼろに影見えて、うきを身に積むしば〳〵も、かひも渚の濱千鳥、ちりやちり〳〵〳〵、ちりとんださ、嵐に亂れさつと散りぬるおもしろや「龍田川邊に舟とめて、をばなかちぢ通れば日が暮れさうよの、鳥が鳴きさうよの、鳥がなことまゝよの、余町の殿御とねたる時の嬉しさは、さて鳥も鐘もいとはぬ、こりやどつこいどつこい〳〵都風流世界のな、なん〳〵中に、色といふもの凝りかたまつて ひとつの戀となればの 柴の戸ほそもやれ玉簾も、戀にあつてはたまちぬ〳〵戀はさま〴〵あるが中にさ、小野の小町はさ、わけを百夜かよへとのんほえ、其中

に百夜めのな、忍ぶ夜はな、わけを百夜かよへとのんほえ、とにかくに戀路のな、心うわ〳〵浮氣で　たまつた事ではないたんだ　たんだふれとは、なか〳〵ぬれた戀のやつこりや〳〵〳〵よい〳〵、とかく浮世はぬれの眞中

生島新五郎

㊤狐會出端

二上り石にせいあり水に音あり、鼓はたき浪袖は白妙雪をふるふりもよし、ふりかへる山更にかすかなり、又ある時は織姫の五百機たつる窓に入りて、人を助くる業をのみ、まして や我名もいふ聲ひく袖のながめなり、そなたの空は白雲、あれこそ小原や小鹽山、今は舊巢へかへる山、此神の德を告げ知らしめんと現れ出て、恥かしやわれが姿のまことをあらはし、又は國土を垂跡の方便、頃は雪ふりなれや、木々の梢もうづもれて、梅も色そへ松とても、名こそ老木の若みどり、空すみわたる神かぐら、はんや神かぐら、齡をしらする此神の、ゆくすゑ久にと我が神託の、德をあらはす御代ぞめでたき

㊤曾我五郎　山下才三

二上り我は石川や濁らねども人が濁すよの、かけふにはなにとしんまゐらしよ、勝山が髪のゆひぶり手替りにこのえ君ちとせ山、それや昔のさどれ石、いはほと成ていつまでも變らぬものは常磐木の、葉色に迷ふ人心、地をはしるけだもの空をかくる翼も、戀には誰も身をやつす、いや〳〵わらは心とひやうし、一眼早足やつとん〳〵、二眼早足やつとん〳〵、さきの力にやよれつもつれつ、やととん〳〵とん〳〵とん〳〵、うけて流して袖返し、棒はみや口戸田小坂、そちが思へばこちも思ふよ、ほんにさせいもんしやたらほん、誠につい〳〵のつい我等も思ひそろ、思ひと戀とはがつてんか、君が盃つく〳〵つつてん、つけざし三杯飲めや歌へやとかく世の中

つけざし―口をつけたる盃を人にさすこと

そめいろ―染色、戯迷虚

多門庄左衛門

㊐京之名所

二上り須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、すまや明石も外ならぬ、花よもみぢよ月雪のあけぼのは、筆で書くともつきせぬ都ぞおもしろや

「北は黄に南は青く東白西紅にそめいろの、山は郡の富士なれや、麓につゞく市原や、

朧の清水に影はやせの里人、小原曉原鞍馬や貴船、あの奥山の柴といふもの、をり〳〵をり〳〵をり〳〵、折てたばねてきりゝと結んで、しやんと戴きつれた小原木を、こい木を、さてもそなたは春の花、麻の中なる糸蓬、思ひそめたは恥かしや、思ひそめたこい小女郎なぜにこぢよろは出て待たぬぞ、小女郎こそくれ山ごしに、戴きつれた小原や浮世もいらぬ〳〵、やれさて〳〵〳〵浮世もいらぬ、縁でそろ物ちとをどろ、とのかゝのよい子をまうけてたもれのう、上下なれてよいとのを〳〵聟がくる、やれ聟がくる、聟殿の小袴何色にそめよぞ、えい〳〵花色〳〵、褐袴著してきり〳〵〳〵、尋常に奥のざしきにおんも〳〵と寢てかたろ、おうその奥の出居からよまの出居まで、さん〳〵さんさぐりまはれど、はんな嫁にはさん探りあたらで、髭面男にさん探りあたつた、はつちやこは物なんとしよぞ、りんとはねられ、たんと氣の毒しやらやゝしやら〳〵〳〵や、さつさしやらの戀路の心根や

朧の清水―大原にあり
やせ―猪、矢背

岩井左源太

㊑若松風流

十八の君―十八公の縁をとりていへり

二上りめでたの若松さまはよんの榮ゆるはもよはらんは葉も茂るよんの、枝も榮ゆる葉もよはらんは葉も茂るよんの、ふくはらの里のよねくろは小松ばらかよひ十八の〳〵君とな、君とねの日のまつ夜はよねくろ、どこで見た見ゆるとさ、さつさ見ゆるとさ、十八の〳〵君とねの日のまつよはよねくろ、どこで見た、みゆるとさ、さつさ見ゆるとさ、わけの前髪太元結のしかくまき、はでな小姓衆はどれ〳〵、あれはそれはどゝんどえ、さまのおすきとて、ちんちりめんにのほんほゝ、肩には唐梅や、唐松に唐獅子を縫はせて、裾や袂はうらふくもみが、ひら〳〵ひ、さつさふれ〳〵ゆかしなつかし

山本歌門
近松勘之助

㊈濱川風流

二上り今年渡りの伽羅ではないが、とめてねまきの染小袖、ねまきのとめて、とめてねまきの染小袖、濱川の女郎はお手が荒れそろなよえ、道理かな濱川縄の、でん〳〵でん出所なよえ、我戀は〳〵丸き芋小筒に角の蓋、あひますきまを合はせども、あはぬよの、しやてんはちまつかせ「さまがくるやら帆が見ゆる、そこ介こゝ介がつてんか、苦を敷寝に舵どつこいかぢ、どつこい枕よんの、ござれ沖津ののほほんに、ほんにさ、ほほんにほんにさ、ほほんにほんにさ、ほんに〳〵さ、ござれ沖津のどつこい、わかれの野でしげろ、たんだふれ〳〵戀のにくさよ

丹前出端　終

古今ぶし

㊀なぞのうた

瀧川六三郎
古今新左衛門

そこな船頭になぞ〳〵なに、こちや謎しらぬ、なんどのかきがねはづすが大事、かけるが大事、ういもつらいも淀長縄手、身過なりやこそ舟も引け、舟をひくとてなぜ袖ひいた、いかにおんらがいんなるもので、しんらぬ知らぬと思やろけれど、目元でも知る乗合舟の船頭休みやれ、あょえつとしよ、しわい女郎しゆや、いやなら置きやれ、おかいでなんとしよ、事はかょぬぞ、こちの舟蒔繪にかきし舟のうち、みつこや鹿島やこん比丘にん、御出家庄屋どの拔參、こほうらいがくどいた、戀慕のやみのくらがりに、鞦足をさしだした、さまぢや御座らぬ、やつこの上髭さなでた、ごめん〳〵十めんつくりてひかられた、髭がはげたらごめんなれ

みつこ—みこ（巫）の促聲
鹿島—鹿島のことふれ

㊁小栗

古今新左衛門作

本調子いかに鬼鹿毛よく聞けよ、牛は大日如來なり、馬は馬頭觀音なり、化現化生のものなれど、あまた有りける其中に、汝ことさら人まぐさをはむ故に、畜生の中の鬼ぞかし、駒もしやうあるものならば、耳ふり立てょよく聞けよ、口に佛名唱ふれば、生きながら佛になるぞ鬼鹿毛よ、如是畜生發菩提心ときく時は、汝もたしかに聽聞せよ、そのとき鬼鹿毛は、畜生とはいひながら戀の哀を聞きわけて、諸膝折りてゐたりしは、人間のものは知らぬなり

朝伊奈—朝比奈の訛

㊂朝伊奈

古今新左衛門作

本調子あさいないかにとしかりける、無念なるかな世の中の、それ天人には五衰人間には八苦とて、八つの苦のある其中に、貧ほどつらきものはなし、貧苦とだにもなりぬれば、疎き人にはいやしまれ、旦暮に衣かさねょば、夜さむさいとど堪へやらず、朝夕がとぼしければ、事問ひかはす人もなく、日鑓りじゆんぎにまじはらねば、慰む方も更になし、たま〳〵列座につらなりて、心は高上に人にすぐれて見ゆれども、重の衣がうすれけば、

朝夕—食事

肩身しよぼらでくちをしや、世をも人をも葛の葉の、うらむべきやうあらざれば、袂を顔におしあてよ、只さめ〴〵とぞ泣きゐたり

同　人　作

㊃隅田川

本調子吾は都の者なるが、人商人にいざなはれ、あづまに下る玉鉾の、さもあらけなきものよふが、歩め〳〵と打つ杖に、あよ父母の戀しやと、泣くより外の事ぞなき自是江戸設經

二上リ「いたはしやをさなごは今をかぎりの下よりも、父は吉田の少將よ、名は梅若と申す也、都の人の戀しやと、西に向ひて手をあはせ、南無あみだ〳〵〳〵〳〵

同　人　作

㊄富士之嵐

二上リふじの嵐に艪櫂をとられ〳〵、ひとりこがるゝ田子の浦、山椒めが胡椒を女房にせうとおしやる、唐辛子が仲人、やれ蓼穂が恪氣する、どうでも山葵は鼻をはじくえ

同　人　作

㊅三嬉敷

二上リうれし〳〵が三うれしござる、初手にござつてもふられぬ嬉し、宿の首尾さへ首尾

さへうれし、うらが港にやほだすもうれし、うれしえ、軒の玉水とく〳〵ござれ、繁くござれば、ござればしげく、人が人が知る

古今新左衛門作

⑦鼠の晝寢

鼠めがさんの野中に、晝寢してな、猫に子とらりよと夢を見たな、まもりよかけさへよけのまもりをな、晝寢の寢言いうたをかしさはいの、うちのなへしかまもふすぼり鑵子もとふりや、かゝみな黃金え

うちのなへし云云―「内の鍋も釜もふすぼり鑵子も道理や」の誤か

同　人　作

⑧老ぼれ枕

年は寄るまい、うらが部屋へは猫もこずもの、老ぼれ〳〵こち寄れ、ちと〳〵抱いてによずもの〳〵、抱いてちと〳〵によずもの

によずもの―寢ようずもの

同　人　作

⑨牛之綱

二上リ引いたりな牛の綱をえ、そんれは引きやることぢや、殿御のな草かり年よ、鎌もよく刈　千草もなん靡け靡けやれ

同　人　作

⑩郡内八丈

二上リ山の上には白豆青豆枝豆、白い袋は祕藏のしい竹、芋の葉の露ぶりしやりと、これのおさつに機織らしよ、郡内八丈小倉島〳〵、郡内八丈こくらじま

しい竹―椎茸か

同　人　作

⑪ありまの松

二上リ松になりたやな有馬の松に、藤にまかれてねとござる、まかれて藤に、藤にまかれてねとねとこざる、なさけ有馬の花のえん

同　人　作

⑫伊呂波

二上リ子ども〳〵よ、髪結うてとらしよ、いろはにちりぬるを、わがわがよたれそつねならむ、うゐのおくやまなけさこえて、あさきゆめみしゑひもせす京、宵にや和讃よ中にや法華經、曉起きてはゆづの念佛、紙子々々安倍川紙子え

中―夜中
ゆづの念佛―融通念佛

同　人　作

⑬天の川

二上リあまの川には水こそまされ、さてもやんれ逢ふよならぬえ、橋をやんれかきよやれ

鵠の、天竺のあまの川に白い〳〵桶が流るゝ、奉公するとも豆腐屋にやいやよ、それなぜに、七つ起きして豆みがく〳〵、七つ起きして豆みがく

古今新左衛門作

㊇山郭公

二上リ花の散る時やはつほとゝぎす山ほとゝぎす、月は三日月かたわれいびつ、まるい長月くる時雨月、雪をながむる火桶のあぶない窓の、あかしくれ竹いくよの枕、戀にねぬ夜は二夜三夜

同人作

㊈稲荷参

二上リ引けや〳〵ひけや〳〵牛のもうもう綱をえ、柴に櫻を折りそへて、させいほうせいこりやどうだ、稲荷まゐりの、参りの稲荷、振袖ゆかし、幽禪模樣でそんれいえ、おかた四十に娘は十五、ついの模樣でゆかしえ、さいかち山へ上るとて、荒い風がもつけな吹いてきた、脛の白さでえいとこなうんとこな、白さで脛の〳〵白さで日をくらす

同人作

さいかち山―色角子のある山

㊉浮世言葉

二上リ浮世言葉によそへて問うて、とかく浮世ぢや戀の道、うらが氣儘なるならほんに、とは思へども人の口、有る事ない事おつしやります事聞けば、松は小藤と寢たといふ、小藤は松と寢ぬといふ、あの嘘はいの、ねたりやこそあれな、やれひつたりと、そのよな事はな、けもない事よ、聞けばうれしや思ひ草、只うつゝなや、人にいはれぬわが涙、それとは知らで思寢の、かわくまもなき我涙　羅綾の袂をも、引かばなどか切れざらん

同人作

ひもない事―少しもない事

㊉茶飲時

二上リおきていなんせな、あすの夜もあるに、今しばしぞや、又寢の床〳〵にはぬるゝも紬、東がしらむどん頓ておばゝの茶のみ時、しゆんだらまんだら福德忍びす　べずるべずるべざい天、南無藥師のお地藏がの、みめのよい女郎さまの、そばにそつと寢たるは雪か霜か霙か村雨か雨か霰か、吉野の初瀬の散りかゝるやうで、おいとしうてねられない、うらゝがやうなるみめの惡いしやつ面が、そばにぐわさりと寢たるは、いがぐりぎりつくり天神髭けさ打ちおろしのあらむしろ、がんぎ鑢鮫肌つくやうで刺すやうで、いつく

にばつくにねがへり打つては寢られない

㊇さいの川原

古今新左衛門作

本調子　爰にあはれをとどめしは、さいの川原と聞えしは、二つや三つや四つ五つ、十さへ越さぬみどり子が、いさごをつかねて山となし、小石をひらうて塔につみ、一ぢうつんでは父のため、父の恩と聞えしは、須彌山よりも高うして、言葉に何ともいひがたし、南無あみだ佛〳〵なむあみだ、二ぢうつんでは母のため、母のめぐみの深き事、滄海よりも猶ふかし、三ぢうつんではきやうり兄弟わが身のためと回向する、南無あみだ佛〳〵南無あみだ佛、まんづ母の胎内に、十月がうちの苦痛をうけ、やう〳〵此土に生れいで、四とせ五とせ七とせ待つや、まつや待たずにみまかり出て、又いつの世に此恩をおくりかへさん、わらんべと、さん〴〵に苛責なし、いづちとも無く失せにけり、諸事のあはれと聞えける、南無あみだ佛〳〵〳〵〳〵〳〵

當流丹前古今ぶし　終

まんづ一先づ

松の落葉　卷第四　古來中興踊歌百番

目錄

一　菊づくし　二　都橋づくし
三　小倉山　四　山ぶしうた
五　浦づくし　六　ごばんづくし
七　大津おひわけ繪　八　月づくし
九　松づくし　十　さんがらが
十一　阿部川番子　十二　ちゆつちゆら
十三　づんがらもんがら　十四　君ちり
十五　さらし賣　十六　難波長吉
十七　一ばん鳥　十八　伽羅の板橋

十九　むねあげ
廿一　なぎなた
廿三　三彌大手みち
廿五　ふくの田
廿七　外六藤六
廿九　福助買ぞめ
卅一　順　禮
卅三　さい鳥さし
卅五　八重垣
卅七　髪結小五郎
卅九　いせき
四十一　楊　弓

二十　源五兵衛
廿二　小野村彦惣
廿四　おさき鈍助
廿六　大小けん
廿八　丸ふく頭巾
三十　有卦はじめ
卅二　次郎冠者
卅四　鵜の羽がさね
卅六　ぶんまけ孫左
卅八　からかさ
四十　しんしよのや
四十二　先陣宇治川

四十三　なんぼゝ
四十五　しらかし
四十七　七つ道具
四十九　山の手やつこ
五十一　すげがさ
五十三　金山間夫
五十五　馬場さき
五十七　しとゝん
五十九　ろびやうし
六十一　さんばそう
六十三　君はしんぞ
六十五　世つぎ

四十四　たけ馬
四十六　ふなさし
四十八　はんじよの市
五　十　早さき梅
五十二　權のすけ
五十四　岡山がよひ
五十六　すまやま
五十八　四季花がさ
六　十　つり舟
六十二　地ふく
六十四　してゝん奴
六十六　糸屋むすめ

六十七　珍内花笠
六十九　荒木の弓
七十一　牛まど
七十三　彌之助
七十五　どうらく
七十七　ゑじま
七十九　但馬小女郎
八十一　都の町青物賣
八十三　堺のはま
八十五　手あひすまひ
八十七　蟹　川
八十九　伊勢宮廻（いせみやめぐり）

六十八　春　駒
七　十　ぞんぞりこ
七十二　三國玉屋
七十四　てしやこ
七十六　唐　人
七十八　こよみ
八　十　もんつくつ
八十二　拙　僧
八十四　梅の木
八十六　藤内太郎冠者
八十八　しゆんぜう房
九　十　菖蒲かり

九十一　いもの子
九十三　ていこ屋
九十五　のんやほ
九十七　まんまる
九十九　ふくとん

九十二　小　川
九十四　ほいく
九十六　二　木
九十八　ごんどや
百　番　さよら

㊀菊づくし踊

二上リ加賀のお菊は酒屋の娘、顔は白菊紅菊つけて、よいこの〳〵、よいこの小ぎく
なんときく　ながし　咲いて見事な扇車のくるくるくるま菊かさね菊、猩々舞を舞の袖〳〵、見
そめてそめて戀にこがれ、こがるゝ身は唐錦、通ふ道芝菊ませがきさ、あしあしでとん
とびこえつとんととびこえ、ぞんぞんぞんぞつとした〳〵、ひとへふたへ三重四重七重
八重菊よ、御所の御紋は菊の九重

㊁都はしづくし踊

二上リ みやこ大橋わたりて行かば、思ひそめたよこいたの橋に、又も近江の瀬田のはし
かけよなさけ　のひとつばし　人の心は假橋うきはし反橋なれば、あだに其夜は戻橋、つれなや君にふられて
さ〳〵、ふられて〳〵雪にふられて鵲の橋、ちよつと替せし詞のはしを、なんの忘り
よぞ〳〵それがうれしゆて清水の、とんとろ〳〵、とどろ〳〵とどろ〳〵、とどろとん
どろ、藤の橋、つもりて戀の大和橋、くちぬ四條の橋柱

大和橋―山にかく

㊂小倉山踊

二上リ小倉山からよむ言の葉の、歌の中山みやこの富士よ、つゞく山々戀の山、だてをか
ざるや衣笠山よ、なん〳〵〳〵なんでも錦おり、なん〳〵でも錦おり、裾はちらほらも
みぢ葉ちらす、高尾楓の尾いやといはれぬ、どうも云はれぬ、袖をひかへた男山、これ
も愛宕の御利生かの、のぼればさつさ、えいさつさ〳〵、さつささぶろく十八町、あらし
山風いとはできた山、春はかならず東山へござれの、花のさかりはまん〳〵丸山

㊃山ぶし歌踊

二上リ男もとならの、あさはれしちやほん、この山伏男をもちやれの、元結ひねらず袴き
ず、やれこりや袴きず、のんやほの、あさはれしちやほん、この山伏男をもちやれの、元
結ひねらず袴きず、やれこりや袴きず

㊄浦づくし踊

二上リ和歌の浦なるいきかた男、戀に通はゞ千賀の浦もみうら白裏淺黄裏、だて

きた山―來た、北

をするがの三保の浦、なりよきふりよき富士をになうた、たん〳〵たん田子の浦〳〵、晩にや必ず〳〵堅田の浦、どうでかつかひにくる夜の、君に大津の浦は七浦なん〳〵　どっこいなん〳〵なあ七浦、なん〳〵〳〵七浦、これからさきも七浦なん〳〵どっこいなん〳〵なあ七浦、なん〳〵〳〵七浦、かはらでこゝにすまは明石の浦は高砂

とふあした―飛ぶ足駄か

㊅ごばんづくし踊

二上リ　京は十らく樂み所、町は碁盤のなりよやみよやしかくしめんべつ向ひ合すりや手に手をしみやる、よござる〳〵、よい手がみゆる、戀のな中手にとゝんととふあした、わたり八目ずんずんずと伸びるはまは何百六六三百六拾目、一期つれそふ、つれそふ中の白いちんちりめん黑羽二重でぬめらんす、繻子のおび〳〵、しめつゆるめつよいなん中て〳〵、うつや打つたり〳〵おてゝん手を打つ、うつたりな打つたり〳〵おてゝん手をうつ、うつたりな上手め〳〵、思ひのたけのよゝを重ねて、うちや納めた

㊆大津おひわける踊

二上リ　のぼり下りに日につく姿、露の命を君にくれべい、追分の達磨ゑごころ、鬼に衣はそげたもをかし、座頭は尻居に犬が吠えつく、猫がしやみひく、酒のむ奴愛宕まゐりに袖をひかれた、だてな若衆が鷹手にするゑて、ぶれやれ〳〵大鳥毛〳〵、浮世のんせいふんらんらんしんらんどんらん十三佛、かけ針くけ針たゝみ針、いゝいけのかは、菅笠よりほに算盤粒、關の清水はうき名所

いけのかは―池の側針は名産

㊇月づくし踊

二上リ　月は武藏野よいつきだしの女郎は三日月、だてな道中袖つき、たれを待宵あの顏つき、年は十五夜腰つき足つきさえた聲つき、なに夕づきよ、桂男よ、さつさいとしかござれ、さつさかはゆかござれ、いざよひ月にたはむれ遊べ、えい〳〵〳〵えい〳〵えい〳〵てる〳〵つき〳〵てる〳〵月を見たらば、なんとござるまいかの、てる〳〵月々てる〳〵月のおもかげ、月を見あかし飲みあかし

㊈松づくし踊

うち葉―浦回の誤か
見とて―見たくて

二上り鳩の松山それからさきよ、志賀のうら葉のひとつ松ぜんとよいきまつよは〳〵君を待つよは遠山松よ、山坂こえて〳〵〳〵見とてきた野の七本松よ、ほんに必ず青葉の松よ、のこるきぬ〴〵衣掛松よ、嵐松山さら〳〵、どつこいさら〳〵どつこいさら〳〵〳〵さら〳〵〳〵さつと打つては濱松の音はざよんざ

㊉さんがらが踊

二上りあらい風にもようやよやよ、あてまいさまを、やろか信濃の雪國へ、さあささんがらが、川ぢやざんざら柳のよいやさ、しろがねが〳〵よい手は〳〵こまの膝ぶしんからが〳〵信濃へやろか、やろか信濃の雪國へ、さあささんがらが

㊉一あべ川帋子踊

二上りお江戸〳〵みやげにあべかは帋子〳〵、ありやこりやよい、著てはごそ〳〵〳〵とさ、あんささあんへくわんこや〳〵、しやつき〳〵〳〵しやちんがら、こよ爰までは走り出でみれば〳〵、ありやこりや戀のなか宿、さあおろせこれさ〳〵、著てはごそ〳〵〳〵

鳴いとさ―鳴いたとさの誤なるべし
鶯へかへ―「鶯ちう〳〵」の句より繰返し歌ふべしと也
ゆのふ峠―湯尾峠

とさ、あんさよあんへこつがらてくせ、天照大神おんいでなされてめでたいな

㊉二ちゆつちゆら踊

二上り鳥かあかよつちりかあかかあ、鶯ちう〳〵ちゆつちゆらちう〳〵ちう、春になろとて法華經と鳴いとさ、ほけきやうでんぐりかへしてさつさ「鶯へかへし

㊉三づんがらもんがら踊

二上りゆのふ峠のまご杓子さ、さつとしめかけさ、えいこの〳〵柄が長うて、づんがらもんがらがらづんがらもんがらやつてくりよ、常陸の國のつのをかに、鹽賣長者といふ人が、黄金の築土をつくならば、蓮華はちすといふ娘、かれら二人の兄弟をてこの衆と定めて、思ひのまよにつくならば、難なく築土は出來たるらんよふつふなんよえ

㊉四君ちりをどり

本調子こよな小吉めは與五へが君たんだ〳〵すのこきみちり〴〵かますのふぐた君、たんだかますのふぐた君、たんだあほとこふんではおほちよこけべいてほこちよんとほし火

ぢや、ふやらの〳〵ふん〳〵ふ、ふやらの〳〵それはえ、ふやらのそれはえ

㊤晒賣踊

二上りさらししまざらし高宮ざらし、さらせば娘はくろむ、布はなるほど〳〵なるほど〳〵
なるほど〳〵なるほど娘はくろむ、白くなるほど〳〵
二上りなるほど〳〵なるほど〳〵なるほど力にまかせたかつち杵、娘はくろむゑじまおれ
を見てなぜに顔ふりやるぞ、ゑじま高宮なんとしよぞ、ゑじまは生れつき

かつち杵―かち杵

㊥難波長吉踊

二上りえい〳〵〳〵なにはの梅屋よしべ、心は入江の海の濁りよどみて、すめども終にあ
しのかたほのほに現はれて、引かれいづるや心の鬼よ、せめて百兩の金ばかりかや、い
まだをさなき長吉を殺そとたくみあるとは夢にも知らで、主の使の悲しさは、是がな此
世の名殘かや、えいこりや此世の名殘かや、長吉久しの姉にあはしよぞ、さあこちおぢや
と、いふにだまされつれおだち行きて、長吉さきの物は有るか、なんの事でござんす、金

よしべ―由兵衛
久しの―久しぶりて

がふところにあるかといふ事、いや〳〵なんにもござんせん、出さにや殺すが、一度で
出せと、さんどかはらけ程な目をむきだせば、是は旦那の爲替の小判、命たすけて助け
てたべと手をあはすれば、かしましい、殺しはせぬぞ、あゝといへども、奥の納戸へ脇
差とりに、行くをみてから身もふるはれて、むざんやよしべは長吉をとらへ、さあどう
する最期ぢや、あゝ悲しやな、こゝに姉さまござらぬかいの、あら怨めしやと怨みなけ
けどつれなや、梅は聲を立てたら殺すといへば、泣くも泣かれず、かはいやな只をし鳥
のはごにかゝりし野末の非戸の、そこにありとは夢にも知らで、親子親類かやせ〳〵、長
吉をかやせ、長吉かやせとな、夜ひとねもせでまよたえ

そこ―其所、底
ひとね―一睡

㊦一番鶏踊

二上りぼんさま〳〵、ちとたしなまんせ、内にや女房子どもも無いものかなんぞのやうに
性わるぼんさま、一ばん烏の鳴く時は、こと〳〵〳〵とたゝきあけてはやでるとの〳〵、
内にや水がつくかあまりの事いの〳〵、さつても〳〵あまりきやうこつ

きやうこつ―輕忽

㊇伽羅之板橋踊

本調手薩摩の鹿兒島の長吉どのは、伽羅の板橋をわたるとてこした、ほとんどえ、いで其比は花見月、櫻せたらおうたるなまず見つけた、長吉どの長松どの長吉長松、ちよろ〳〵めきがあげておとして、藤の花をしつかとからげて、さつさ姉のみやげに

㊈棟上踊

二上リ四本々々柱をいよへおつたて、大工のちこ助これのおたけに惚れましたさ、きりやしやつきり、きりしやつきりきく〳〵、ちこ助のこぎりこぶくらやつこりや、こりや〳〵ひきまはし、一筆かいてはやりがんな、さてのう親見たや、あの子生んだる親みたや、ちこ助のこぎりこぶくら、やつこりやこりや〳〵ひきまはし、一筆かいてはやりがんな、さてのう親みたや、あの子うんだる親みたや、ちこすけさあやるぞえい、松に小鶴が舞ひあそぶ

㊉源五兵衛踊

すやり―素槍

太もと―太元結

二上リ高い山から谷底みれば、薩摩源五兵衛は目にたつ男、のほほんにほ、しやれた鬢つき茶筌がみ、ねて又おきても茶筌がみ、ずんどくぼんた塗笠、おまんはどこへ、播磨の明石へ、蛤ふみに〳〵、はまぐり〳〵ふみに、てぐり〳〵〳〵舟にの、此舟にのせた源五兵衛、きりよとまはつてのぞんだ播磨の明石へ、蛤ふみに〳〵はまぐり〳〵〳〵ふみに、てぐり〳〵〳〵舟にの、此舟にのせた源五兵衛、一萬八千寶藏、えい〳〵やえいやえい代のさかえ

㊀長刀踊

二上リさてもそなたは寛濶、人か眞紅下緒のなが刀おつとり揃へたなぎなたすやり〳〵すやり〳〵、やり〳〵すやりちくとうさ、八方からめ手くも手鎌槍十文字、みよは〳〵一か二か三か四か、七つ道具でをさめておつとり揃へた長刀

㊁小野村彦惣踊

二上リ城州々々小野村の彦そを見たかえ、あたまちやつせん太もとで、細もとで、ふとも

ヒゲ―地下か

三彌―三谷

はさんばこ―挾箱

とほそもと〳〵ひきしめて、じけでひとりのだて男え、彦そはどこへ、山へさ、山へ上ればいばらやとめる、いばらやつとん〳〵放しやれ、やつじてさ、日がくれる、彦惣〳〵ひこその伯母御の歌うて臼ひきやるいのめょかまへ、臼の目ぢやもの、かまりよかい、彦惣〳〵〳〵〳〵、彦惣はじけでひとりのだて男

㊂三彌士手路踊

二上リえい〳〵どつこい、長い刀をさいたはおさき、肩肱怒つてやつしつし、ついのはさんばこつぎどつこいやりふりぢやたてたえ、さんや土手みちな醉うたとさ、醉うたとさ、足や千鳥足、西は田のあぜ、あぶないがてんぢや、あぶないがてんぢや、あぶなうてならぬえ、も一つかへして足や千鳥足、西は田のあぜ、あぶないがてんぢや、あぶないがてんぢや、あぶない〳〵あぶなうてならぬえ、ぬれにや目のない金山、どつこい男え

㊃お先鈍助踊

しやりやさう　ぐざる―仰せあれば成程さやうなり

二上リおささき、ありやらんりやんりや、唐崎の、してんやつこの、ほつ立てろ、まかせておけろの、よいやさ、これは豐後の、ありやこりや槍梅の、槍梅ぶんごの、おさきで石つきつかんで、すつ〳〵もぢりてふれとんやこひぢでふれ、とんやつとうやとうしやんぎり〳〵〳〵、しやんぎり太鼓の、ずんでんとんすすのどんすけか、ありや上の町下の町、中の町ははれぢやほどに、胸髭さすつてすつ〳〵ふらいの

㊄福之田踊

二上リさまが舟かやかんべざき沖に、忍じまの姫むろはふくの田〳〵、あのょかんす〳〵よのうけてのながくのすはごんのごょのずけ、おしやりやさうでござる、ふくの田〳〵、あのょかんす〳〵よのうけてのながくのすはごんのごょのずけ、おしやりやさうでござるふくの田よ、いる〳〵ふくの田

㊅大小見踊

二上リ鹿島浦からのう浦から〳〵寶船がついたとさ、顏の若やぐ年男、よい事〳〵、よい

事ふれ―鹿島の事觸

うでたい―めでたいの衍なるべし

ちんた―菊花酒

よいこと〳〵、よい壽を祝うて事ふれがまゐりた、是やこなたへ御免なろ、まづ來年の惠方は申酉の間をば、年德神とさだめて庚辰の年はじめ、卯の十六日が豆まきだ、わつとつかんでよいやさ、鹿島踊をばちょちつと、ちと〳〵ちつと踊拍子にかゝつて、これやこなたへものとふ、まづ正月は大かの、はて大とも〳〵、二月小三大四五小々だ、それ六月は大よの、さて〳〵さて〳〵どつこい、七八月は小とさだめて、九月は大の菊月、十月小はがつてんか、霜月師走は大々、きはめて〳〵しつかときはめて、大小げんと定めた

㊇下六藤六踊

二上リえいどつこいえい〳〵、えいこのえいとんな、聟がくるやらげ六と藤六とお樽もつてまゐつた、おつとりそろへた御祝儀、霰まじりの霙酒、春はうでたいと其酒ひつかけて、花たちばなやれ宇治水、えいとんな、うんえいとんな、池田伊丹のげ六と藤六が書は前垂玉襷、よるは綸子の三重まはり、ちんたの酒やしなの酒は聟殿のおすきぢや

㊈丸福頭巾踊

二上リいつもより賑ふ門の二柱、でつくりといくよ重ねて毎年の〳〵惠方からとて、ゑびすと大黑とふつくな身でこざつた、祝うて釣竿さあまゐろ、おさきへござれ、くるかあとから〳〵、あとから見れば丸福頭巾で〳〵、づきんで〳〵にこ〳〵〳〵、まるふく頭巾でにつこりと、けさの笑顔は尙でつくり、尙につこりいとしえ

㊉福助買初踊

二上リかどは一五三かざりわら、さげてものもどれ〳〵〳〵、どつこい、どれ〳〵どつこいどれ、當年の惠方より福助が買初はめでたいな、倉びらきたなおろし、皮の財布を肩にひつかけて、古金かを唐金かを、文の上書起請の下がき買ひましよ、よい〳〵伽羅の焚きがらかを、やれかを、をゝかを、心中のよいよねたちを、千年も萬年もまん〳〵年も正月買と祝うた

かを―買はう

㊊有卦初踊

二上り花は四季さく、やれさて都はにしき、野山つどきて一ぱいに、えいずつしりと、とことんとこと〳〵つんと〳〵つょんとょんと、とこ〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりと、うけ七代の年八卦、正月はじめ事始め、やれ十七八もうけはじめ、火性はつらりつとことんとこと〳〵つんと〳〵つょんつとょんと、とこ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりと、始めて開いた扇子のかなめは、しつかと〳〵末はんじょえ

ぼう―棒
ちんちやう―珍寶

㊀順禮踊

二上りよい〳〵〳〵肩にやおひずるひつかけて、あえいとこな、あなんとこな、つんつきそろへたほうの手、きりりん〳〵きり〳〵きり〳〵、わつとまはつた順禮衆、是は播磨の書寫寺よさ、だん〳〵揃へてのほつた、えい〳〵〳〵えい〳〵えい〳〵えい〳〵、諸願な成就ちんちやう〳〵、つどいてのほつた、よいやさ、めでたいな

㊁次郎冠者踊

二上り千石のよねほね、萬石のよねほね、お庭にずつしりつどいてまゐれ次郎冠者、ゆに尤もさうよの、日近に持てさあまゐろ、いそ〳〵勇んでさあきり〳〵きり〳〵まゐれ、さあまゐろまゐる〳〵、まゐる〳〵さあまゐろ、鳥は雁鴨雀ひよどり鶴のはし、さつてもいうたようういた、まゐる〳〵まゐる〳〵さあまゐる、花は紅梅しらたま水仙花、さつてもいうたようういた、けに尤もさうよの、そろへて〳〵そろへの扇は末はんじょえ

にはん―日本、二本

㊂さい鳥さし踊

二上りうづら〳〵鳴くなる深草野べの、根笹おしわけかきわけ〳〵、よく見れば人目せきれい打ちとけて、ありや山がらのおの〳〵おの〳〵おの〳〵おのがひきよくの羽もかろく〳〵つまさきしづめて〳〵つごもの〳〵つごもの〳〵えょえ餌差竿え〳〵、けさ初聲はしをらしや

㊃卯の葉重踊

二上りにほん目出たい門に松竹かざり立て、若水男年男、卯のはがさねの著衣始、やれ御

馬乗初弓はじめ、このやつつるつつ〳〵つるやつつるつ、男鶴女鶴つる〳〵つる〳〵
やつつる〳〵、松はかはらぬ此殿の御はんじよ、さておめでたいよの

㊀八重垣踊

ちよこ〳〵とをひの―解し難し

二上り小倉くわぜんちよこ〳〵と、をひのおもてからごされ、じつと引きしめ、やとん〳〵
背戸は八重垣、大戸のくろゝの、くんぐり戸、くんぐり〳〵くんぐり〳〵なんぼくどり
くんぐりくどりよいくんぐり戸、くんぐり〳〵くんぐり〳〵くどりくんぐり、くどつて
だん〳〵めでたい御祝儀

㊁文まけ孫左踊

二上り坂の下には一夜もいやあよの、ぶんまけ孫左がお手枕、水はでてゆく山吹やそつこ
てしよゆろいよんの、あいしてさ、寝覚にや鹿よ鹿のこゑよんの、あの峯通るはこつち
ん〳〵、さがつてのぼつて、のぼつてさがつて、ごいよころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ
〳〵ころ〳〵ころび落ちて逢瀬もあらば、あぶななかたやどつちかひかたは山田〳〵、沼

ふけ―深田

こざいかく―小才覚

かくのゝ市―加賀に野之市といふ所あり、それをいふか

田かふけか〳〵足が引かれぬ、逢坂へさかの女郎衆と

㊂髪結小五郎踊

二上りこい〳〵小五郎、髪ゆひさしてやつと束ねてやくつわかいとり、大津八町でむつき
くどん〳〵新酒こざけはこざいかくもな、どつこいなろかえ、闘の女郎衆はやれこりや
馬の口とる諸手綱、若衆見かけてな、どつこいなんなん〳〵なん〳〵やつこのやつと
たばねてや

㊃傘踊

二上りむこ殿はなつくべいとて、夏は何をみやけに、ずんど凹んだ塗笠めそなら〳〵、いつ
そ尖笠ほそり笠、朝日のやつる〳〵〳〵やつつるつ〳〵そりやさせ男、やれ〳〵男かゝ
のゝ市大男

㊄いせき踊

本調子われは巌にさ、打ちよする波、はつと立つ名はいせきの竹の、かごのや日しげきや

なか〱あたごぞ、逢はでやみなん、憂いぞつらいぞ

㊵新庄のや踊

二上リ紺屋もがりのや、だん〱〱だら助の細帶、さつてはたぐつて三重まはる、このよいかどのやしんじよやのさ、竹ごしによつくるよ〱よつくる〱よつくる〱くる〱と〱寄りたけれどもまづ通るそれはえ「さつてはたぐつてへ返し

㊶楊弓踊

二上リ御代はめでたや袋に弓を納め納めておいて、いざや矢をとれ一百手、君の羽風になどつこい一度はおちよ、的はたまやのな、どつこいねんね〱ねん〱〱音もさえわたる、紋は花桐おれとそなたはまつ、どつこい〱松竹ぢや

たのみ—結納

㊷先陣宇治川踊

本調子先陣宇治川ずら〱ずつとまくりこむ勢ひに駒が勇む、のほらほ〱のほらほよ〱、はんにやしとてとさ、さあしとてとさ、かつて冑のをじめの巾著金銀のは娘のにのみに受けとつた、およ大分の「駒がいさむへ返し

㊸なんほゝ踊

二上リ君は二階のはん箱ばしご、やつこのぼしたてかんじり〱〱、かんじり通うてござれ、ずんど上りつめてはおりぬ氣だ、小娘を見たか、年はなんほよゆかないが、なんほよなんほよ〱、やれ床とつてはなんほよ、なづみかよる、およ忍びの〱かくし殿を見たか、やつこのぼしたて、年はなんほよゆかないが、なんほよ〱〱、やれ床とつては、なんほよなづみかよる

㊹竹馬踊

二上リ五十三次にかくれない男、よよをこめたる竹馬を、さて〱見事に飾りたて、手綱かいくりしつしどを〱、とどんどどつこいせと、どつこいせ、朝の出がけにや小室節、でがけにや朝の〱出がけにや小室節、一ころ二ふし三藏や、いうたりつん〱つれだち、さあ〱いくべい〱、轡と鈴がりん〱がら〱りんがらが〱はいどう〱は

い〳〵はい〳〵はいどうし〳〵、あつぱれ御馬は上手と上手が、乘つたか乘つたぞ、それ〳〵そろたえ

㊷白樫踊

二上りえい〳〵三熊野の那智のお山を今朝こそみたれ、順禮衆札をちやうど打ちや納めて、岩のはざまの白樫を〳〵國のみやげになろたよ棒の手、そつこで一振やつとう〳〵、やつとう〳〵とう〳〵〳〵〳〵やつとう〳〵まゐろ、とう〳〵とう〳〵まゐろ、岩のはざまの白樫を〳〵、國のみやげになろたよ棒の手

㊸舟指踊

二上り高砂や〳〵此浦松に年をへて、木蔭の塵を一さらへ、つまげてからげて〳〵たかつまとりてまほじよはしり出て、てゝらを待ちやれ、さあよいさ、是さよい〳〵、世の中のおめでたいよの「木蔭の塵へ返し

㊹七つ道具踊

二上りおささき〳〵、さあささ〳〵は振手の衆、とろり〳〵と振らねばなんよさ、つぎつぎ〳〵は、あれ助よい〳〵、是助よい〳〵、浪助せき助臺笠はもち助、たて笠はてく助、戀のどつこいだて助、しやれた目元でひとひねり、こんどの〳〵〳〵今度の藪入にや裏からござれ、裏の藪から妻戸から、なりからふりから物ずきで、殿をめがけて振るは大鳥毛

㊺繁昌之市踊

二上りめでたいな、あゝめでたいな、われがすみかは都の辰巳稲荷山、こほれかゝれる玉あられ、是の殿御に逢ひとて見とて、あの山こえて此山こえて、えいさんさ、さあさえいさんさ〳〵、君を思へば音羽の瀧の、瀧の白糸いとし、いと〳〵いとしよの、いとしよの、いとしよの〳〵、いとしけりやこそはんじよな市で、此酒に醉うたとさ、こん〳〵こん〳〵の盃は、千秋樂〳〵萬歲樂と祝ひ納めた

㊻山之手奴踊

つりくん髭一つり髭

二上りさつまァ、のいちのやは、どつこい三ケ國の伽羅よな、どつこいな、ななん〳〵名も扨よいやな〳〵、きやら〳〵伽羅男え、竪から見ても横から見ても、はつァよい男え、おさき一番手の奴、上髭ひんとした、しやんとした、つりりん〳〵つりりん〳〵、つりりん髭のなが刀、それ八もんじうから〳〵うかれて、あとからうか〳〵、うかうから〳〵うかれてあとから、うか〳〵うかからふる、手を振るだてを振る、爰は山の手のよい〳〵奴のでどころ

㊄早咲梅踊

二上りひらき初めたる早咲梅のはんなりと、袖つま揃へてふつくりと、きいたか〳〵えいえい〳〵えい太郎冠者、御まへにねんのはや〴〵と、早咲梅の鶯か、きりきつてう〳〵きいてうきりきりきつてう、きつきよ祝うた太郎くわじや、梅の花笠はどうでもさ、かうでもさ、どうでもかうでも、えい〳〵太郎くわじや

㊅菅笠踊

二上リ東からくる花嫁うれし、おれが目當の菅笠うれし、ほんに嬉し、お伴にとつつくだて助が、よぢらす〳〵、やれこりやよぢらす、どつこいよぢらす〳〵、腰をよぢらす紅葉笠、まん丸こうて著ようて、さまが菅笠百萬貫

㊄㊂ 權之助踊

二上リ若衆さんさ、しのばゝさ、若衆忍ばゝ寺がよひ、なんでおぢやそろ〳〵ねん〳〵ぢやがおぢや、そろ〳〵ねん、さても久しの權の助、あげのまりの、さげのまりの、あげのさげの、やりはりよりをおりや、ふみならうた、おれがふまいで、それを誰かふもぞいの、お手打ちかけて、ほろと泣いたをいつ忘りよ

㊄㊃ 金山まぶ踊

二上リ佐渡の山まぶ山越えて、ぜんゑもんさんが、とゝほんかとゝおん〳〵おぢや、ぎんずる〳〵ずら〳〵ずつと竹流し、竹に花咲くぜんゑもんさんが、とゝほんがとゝおん〳〵おぢや、八百ちよの鯖で千ざを萬ざをごつほり〳〵ごつほりと、踏みやならうたに、ごつほり〳〵ごつほりこ

㊄㊄ 岡山通踊

本國子やんれ白波の打つやつどみの川柳、水にもまれてねこそ入りけれ、岸かげの花や櫻や藤や、うつえい太鼓のばちや川うつぎ、雨のはやしもさみだれも、たのむ汀の田歌の音頭、拍子をそろへてはやせども、えい勇みてうつる面白や、うゑい〳〵そうとめ笠買うてきしよにさ、笠買うてたもるならば、猶も田をばうよにさ、岡山がよひの六ちよ小早に艪を八丁立て、朝のおまへの三ほが瀬戸をこぢよろ戀しきとな、歌うて名のりてお漕ぎやるはえい、この小じやくし小娘こせんぞかこさいかかゝいかこぐる松かこ女郎かつがわつかわ〳〵のんえいよほ帆ではやらいで歌でやる、君を思はで道はりよか〳〵、どこで見たぞつとしたとよえい〳〵、君は春咲く梅の花ぢやとよえい、かをりゆかしきとりなりは、ありやゝこりやゝえい〳〵、さつさえいさつさ、萬歳ぢや〳〵千秋樂〳〵ぢや

うつる―うゑるの誤か
そうとめ―早乙女
小早―輕舟

がいに―非常に

二上り　まづはゆたかに大手馬場先、つなぎ馬がいにつめたい今朝の雪、殿のお馬は錆月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しと〳〵打てばかけあをり、お江戸そだちのひげ〳〵男、おん馬の口をしつかとさ、つりりん〳〵ひげ男、つりりん〳〵〳〵つりりん〳〵りん〳〵りん〳〵りんとはねたる髭男、つなぎとめたよ戀の關札

㊇杣山踊

二上り　おぢが杣山からもろたよ樫を、槍にすげたる十文字、立てゝ並べて、なあどつこい、なあどつこい、長押をよけて一だん〳〵〳〵やつとう〳〵二だん〳〵〳〵やとゝう〳〵一だん〳〵二だん〳〵二だん三だんだん〳〵そろへた石づきよ、する〳〵〳〵手並をそろへて、よする汀の駒がへし、はかたごぶぞり人にやかまはぬおりや好いた

㊈しとゝん踊

二上り　尼が崎からこつちの聟殿〳〵くるとさしつしろかい早めて一丁の二丁の、三丁の四丁の、五丁の、六丁小早、花のふじまへおせやれ男、えどやつさ須磨や明石の月を見しよ、しつとん〳〵しつとん〳〵しつとん、しつとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからからろの音がした、花の繪島や、やんれおせやれ男、えどやつさ須磨や明石の月を見しよ、しつとん〳〵〳〵しつとん、しとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからからろの音がした、嫁が馳走に人の見るめと磯のみるめが肴ぢや

㊉四季花笠踊

二上り　關のこまんは龜山がよひ、色をふくむや冬ごもり、まづ立つ春の祝ひには、縫ふてふ烏の花笠、夏は川瀬にあじろ笠、秋はをどりに菅笠を、そろへてそれ〳〵こまん踊りだせこまん、てん手ひやうしもそんそろた〳〵、そろた〳〵そろ〳〵そろ〳〵月の笑顔に照つたりや紅葉笠、そりや加賀笠よ〳〵、冬は雪見にかづく肱笠、花の都の御所塗笠は、なりがようてさて〳〵どつこいきよござる

㊉鱠拍子踊

二上り　えい〳〵和歌の浦こそそれしての、さての第一名所うんさうだぞえ、さつとみつ潮

加賀笠よ〳〵―原本「加賀笠よ〳〵よ」とあり、此類の書方此書に多ければ改め省く

よせきてはやの、片男波にぞ乗りくる舟の、ろは一丁の勢ひ〳〵、きほひにきほうて漕ぎよせた、しんとろとろ〳〵〳〵とろりん〳〵とろ〳〵〳〵おつとろ艪櫂にさ、船歌あれから是までいさぎよござる〳〵いもせ鹽濱

㊅㊀釣舟踊

二上リ沖にこがるゝ女舟を見たか、おつと梶を枕にろかいをさ、たつる〳〵たつる〳〵波たつる〳〵、女波よすれば男波もよする、とかくや男波はやよいこいこゝ〳〵今宵はどち枕、おつと梶を枕にろかいをさ、たつる〳〵たつる〳〵波たつる〳〵、女波よすれば男波もよする、とかくや男波はやよいこいこゝ〳〵、今宵はどちまくら

㊅㊁三番叟踊

二上リよろこびの文をへてちやうどまるつた翌殿、勇みて末廣扇御祝儀にしよぎつく足元見あふぎも一つ見、あふぎ〳〵〳〵さしあふぎ、鷺足する〳〵張肱あふぎで抜足そろへて〳〵そろへてふく〳〵ふくぢや〳〵ちやうじや〳〵ふく〳〵ふく〳〵、男は大だい福長

文をへて一文をえてか

者の花聟ぢや、えい〳〵〳〵えい子寶のこのさいはひ心にまかせてめでたいな

㊅㊂地福踊

二上リさてもめでたやな、めでたや〳〵えい世の中のよね俵、心やすくもだかへた、地ふくできすけが納めた俵を、御倉にずつしりとつめたか〳〵よねが袖、のつしりとろりとにやひます、色ます〳〵色ますこよねが目につく〳〵、そりやえい〳〵こと〳〵えいこと聞きます、ます〳〵うつちの寶ます、黄金のますでよねはかるんよの、めでたき御代はたんだにこ〳〵やかによねのお山

㊅㊃君はしんぞ踊

二上リ君はしんぞの乗り心、さよいよえい〳〵君とわれと、われと君と引き寄せてはよるよるさ、をとこは花の都入、づに乗つた、乗つてきた〳〵舟のや宿の娘は小手まねき、えい袖をかざしておもてのくどりのくろゝの穴から〳〵から〳〵から〳〵そこしんから〳〵顔が見たさに戸あけて、そこせいちやうど一ぱい君はよいさけ

㊇四 してて ん奴踊

二上リ五丁さきから振出す肩の、ゆきの長いはお國の小姓、色はまつ〳〵黒、くろいがどこやらがよい、しづかに見ゆるやつこの〳〵〳〵管槍をひろどれば、なん尺〳〵なンほ〳〵なん尺なん〳〵〳〵ほのなん尺、こどころつけてさあまゐろ、しててん奴が手のうち〳〵、しててん奴がしてょん手の内〳〵、しててん〳〵から〳〵〳〵〳〵してょん奴がすりさげ男、國にかくれない大介萬五郎、おょそれ〳〵〳〵かくれない

㊇五 世繼踊

二上リお江戸がよひに世繼が出來た、やつとうお名は加賀に菊酒、お江戸のまん鉢ずんど飲めばよござんす、吉六酌とれ、がつてんだ、金銀の盃におさへた、まつかせ〳〵、つぎめぢや〳〵よつつぎ〳〵〳〵、よつぎつぎはめでたいな、顔に色ますこれはんじやう〳〵え

㊇六 糸屋娘踊

二上り本町二丁目をとん〳〵とことん、とことん〳〵とんとことん〳〵通りたうはないが、糸屋娘は二十一はたち、やつしつし〳〵、姉にのぞみは少しもないが、妹見る目はしんとろ〳〵、とんと親を見る目は猿まなこえ、さる〳〵さる〳〵さるまなこえ「姉にのぞみ返し

㊇珍内花笠踊

二上りさても見事にそろたり〳〵、そつこで振出せお手まはり、大事のまへのゐやひごしすんよしふりよしなりもよし、みよし吉野の花よりも、えい〳〵紅葉よりも、えい〳〵えいこの〳〵〳〵、こつちの〳〵いまがする事を珍内が見つけた、でつかい事をいうたりな、いふぞ珍内ない〳〵ない〳〵ない〳〵酒盛ろぞ、珍内さけは下戸なりなさけでないぞ、そこらを是非とも〳〵そこらを〳〵〳〵是非ともおつひしけ、やごゐでまつかせ、やごゐてふりやれ、やつとん〳〵〳〵殿のおたちにおとも花やか

㊈春駒踊

いさむ春駒引きつれ千疋もつないで自慢での、しやなら〳〵しやなら〳〵れんな紅裏たれだ、さまだ、ばかやつた、づきんちやちりちり〳〵ンちん〳〵ちんなとりなりで、おつとまかせの、よい〳〵〳〵、ふりよしや〳〵、ぬらりひよ、たれもかれもめつけんしよ、こゝもとでえい

㊉荒木弓踊

君は長押のや荒木の弓よ、挽手あまたおほせのあらば、はつと答へてよん所はりよやひよや〳〵はりよや〳〵、はり〳〵はり〳〵弓張月のさまは三日月よい〳〵、どつこいよい〳〵、どつこいよいこざる、せめて今宵は有明のさ「はつと答へてよん所へ返し

㊉ぞんぞりこ踊

本調子麻の中にも三度はねたが、麻が物いはにや名も立たぬ、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞり小芋よ〳〵、ぞんぞりこの芋よ、どの子がいとし、負うたもいとし、だいたもいとし、肩くまの小女郎は猶どつこい猶いとし、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞり小芋よ

〳〵ぞんぞりこの芋よ、負うたもいとし抱いたもいとし、肩くまの小女郎は猶そつこで猶いとし、ぞんぞりこあすはとう

㊐牛まど踊

本調子牛窓のえ觀音堂のそばでえ、どつこい是はきいたぞや、けさのやときをうつ、どうつのう、はてのう時の太鼓はのほほん〳〵おでで、でんがら〳〵おでで、でんがらでん〳〵からりの、でんがらりのおでで、でんがら、音も聞えてさらりつともえいよえいよえ、どううつのう、はてのう時の太鼓はのほほん〳〵おでで、でんがら〳〵おでで、でんがらでん〳〵からりの、でんがらりのおでで、でんから、天下うち納めおめでたいよの

㊐三國玉屋踊

二上リ三國玉屋の新兵衛を見たか、三國一のやさ男、まるで〳〵繻子の鬢つき刷毛長につりびん〳〵、なぜにこ鶴は出てまたぬぞ、さつこのしよ、きけばたらふくつるてん〳〵たらふく〳〵たんたらふくつるてんふくつんゆふはかうし小まつのをのしんべどの「さつこのしよへ返し

㊐彌之介踊

えい〳〵〳〵是からさきはおさき手をふる長刀〳〵、おさき手をふるなが刀、さんやれ〳〵「えい〳〵〳〵是からさきは宮城野に咲く萩の花〳〵、宮城野にさく萩の花、さんやれ〳〵えい〳〵〳〵、彌之助〳〵、さむそにござる、火桶やりたや炭そへて、さんやれさんやれ桶やりたや炭そへて〳〵、火

㊐美濃國てしやこ踊

本調子美濃の國にて妻もちおいて、さつこの、いよこの、九重の花の都にすまひすれば、てしやこ、雨はふらねどみの〳〵、どつこい〳〵みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしやこ、てしや〳〵〳〵てしやてしやこしよ、まだ〳〵雨はなんな降らないにさ、みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしや〳〵〳〵てしやてしやこ

みのこひし—美濃を愛にかく

うとしよ

㊄どうらく踊

本調子いとし殿御は破魔弓はじめさ、あのどうらくめ、むかひこよねが羽をつくにの、手鞠つくにの、よいつく〳〵〳〵にはつてんひつわがふらくとぶつつけた、まねく袂に文や玉章、袖の内はふみや玉章、あのどうらくめ、むかひこよねはさ、やれこりや羽をつくにの、手鞠つくにの、つく〳〵〳〵にはつてんひつ和合樂とぶつつけた、まねく手元に文や玉章、袖の内は文や玉章見たか

㊅唐人踊

二上リいきにて〳〵、すいちや、ふんちや、すいちや、すいふいちやういさらこわいめさはんやさそうわ〳〵ううちたるまたひさらきこい、さらこわめさはんやさそうつ〳〵うあう〳〵

㊆ふじまま踊

二上リふじまま岬に帆を巻きかけてどつこいわかれの小手まねき、君にまはらば、さつさ押寄せ漕ぎよせならばよえ、それ〳〵姉のおまきはもんやと契る、妹おなべはよきちとしよげろ、はてそなたをどつこいをどつこい、おん〳〵思はどさつこりや碇をぶつこめ、まつかぜ押寄せ漕ぎよせ〳〵ならばよえ、はりはどつこい、あみでせまつかぜ

㊇暦　踊

二上リやたて〳〵めでたや、こちのやの寶ぢや、元服よしの色男、つどく日數をかろくかたげて、暦大經師、こよみ二十の殿御に、十九のおんおかた、十九のおん〳〵おかた、やれさてしつくりと〳〵、くり〳〵くり〳〵しつくりと〳〵、嫁入聟取復日大みやう、やら〳〵めでた

㊈但馬小女郎

二上リたじま小ぢよろありやこりやといのにのぎよのふだわいの、みれば其日のやつこりやきとうとなるわいの、ありやこりやといのにのぎよのふだわいの、みれば其日のやつ

やたて〳〵ーやさて〳〵の誤か

復日ー結婚嫁娶に厭ふ日なり大みやうー大明日は唐の大明暦に載する所の大吉日なり

こりやきとうとなるわいのなるぞ

㊀もんつくつ踊

二上リ今津海津に朝通ひさ〳〵、蒔絵の差櫛桐のとう、もんつくつ〳〵、もんつくつ〳〵
朝がよひさ、蒔絵の差櫛桐のとう、もんつくつ〳〵もんつくつ〳〵朝がよひさ

㊁都の町青物踊

二上リ都町々に賣つたる物は何々なんぞ、青菜小なもみ大根〳〵、柚や生薑や茗荷の子、唐辛やほうれんさう、白瓜から瓜あこだ瓜、西瓜のさねは赤ざね黒ざねもござんす、四五寸伸びたるあさつき、さつてもいうた、よくいうた、まつたけは見事ぢや

あさつき―葱の類にて葉の細きもの、麥葱

㊂拙僧踊

頭まるめて浮世を輕く、拙僧本意にあらねども、門々でもらひまする鉢の米の情に親をはごくむ旦那、一重にせつそ本意にあらねども、今日の釋迦の御弟子とおほしめし、みす〳〵それがしを佛菩薩の化身とて、もろ〳〵の亡者をとむらふ旦那、せつそ本意にあらねども、思ひわすれぬ娘ざかりをすいてきた、これが誠に拙僧本意でござるよの、是非ない人目はづかし色いろがよいアヒノヲ「一錢二錢や法捨をたのむと夕暮に、すぐちが談義はかによらい、けべすぢもとをやしろうてなゝすのけんかんへれそでつかんでへめころせ、おゝよとろしや

すぐち―兎唇
けべすぢもと―首筋元

㊃堺の濱踊

二上リ堺の濱にありやこりや流れ枯木がすてゝある、或人の申されしは、目や節やえんどや木曾や都にやない、定めて〳〵きんきめこまかにござる程に、唐木でござるべんよの、さんがれ

えんど―江戸

㊄梅の木踊

二上リ昔より賣りはじめそろ、梅の木村の和中散、君の病は思ひか戀か、よその藥はじよさいでござる、こちの家にはじよさいとてはござらぬ、じんじやくむねむしこはり腹、酒の二日ゑひにはよねや若衆の、やとゝんとん〳〵寢顔でのまんせの、のまんせの〳〵、

じよさい云々―和中散を定齋藥ともいふより言ひかけたる也

よろづの虫に第一の桀ぢや

㊀手合相撲踊

二上リよい〳〵〳〵お待ちやれ、やつとんとろ〳〵とろ〳〵と御前かよりに振りいだす男、してよん立がみ力自慢ゆりかけ〳〵、幸嵐にきり〳〵、やつきり〳〵きりりとまはつて、しつかと結んだ力帶、一夜なれ〳〵帶買うて取らしよ、それふれさ〳〵、帶買うてとらしよ、解けて亂れて、やんれ〳〵それ〳〵〳〵男勇んでさ、すよんでさ〳〵繻子の鬢つきや、ととんとろ〳〵〳〵〳〵やととん〳〵〳〵とろ〳〵見とれてやさ男、國でかくれない、さつても見事なでつかい男え

㊁藤内太郎冠者踊

二上リ藤内太郎冠者次郎冠者でござる、日本一の御きげんに立て舞をぞ舞うたりける、ふりをそろへてどりやどこの、そりやそこでの、さらば舞へ太郎冠者えい次郎冠者、さまと並ばよひよなの殿よ、並べて顔を〳〵、顔をならべてによにつとも笑うた、こつちのや〳〵こつちの〳〵よい殿え、おれとそなたは二重の帶よ、そなたはそちらへくるりとまはりや、おれはこちらへくるりとまはろ、手さきを揃へてとん〳〵、とん〳〵やととんとん、殿さまの二重帶しめてくよして、しつくり〳〵力帶、むすびとめたら猶よかろえ

㊂蟹川踊

二上リ蟹川を渡るとて、戀の文を落した、蟹らは知らぬ川なし、する〳〵出る月をえ、てはお手を引きようて、しんとろ〳〵とろ〳〵〳〵とろ〳〵〳〵〳〵たら〳〵おりで休んだ、おれはそなたを忘れまい〳〵

㊃しゆんぜう坊踊

二上リ大和でんまどつこい、してから〳〵都がとまりで、おんぢやり申せよさ、のうようほんにほんにお釋迦の堂供養、しゆんぜう法師のあとをつぎ、檜のお笠で鉢の子手に持ち、都の町を殊勝らしう通れば〳〵あれのむばもじ妹どもかよも姉も妹もちよき〳〵

引きようて―引合うて

しゆんぜう―俊仏鉢の子―鐵鉢むばもじ―姥文字にて姥といふこと

ちよき〳〵ござれの〳〵ちよきりこ〳〵ちよきり〳〵〳〵ちよきり〳〵ちよともぶんだ
した、むな木かまつかせ山家おくよりよこだきにと、やれ〳〵でつくりすわつた楠、

㊇伊勢みやめぐり踊

氣の藥―保養になること

二上リさてもえいしやさ、見事な天照神の、けふ吉日の宮めぐり、あとさき揃うたら、さ
あまはれ〳〵やまはまはれ風車、まはれ〳〵ばきん氣の藥、根から葉からそこしん實か
ら、浮氣がましましぢや、それさくるり〳〵くるり〳〵くる〳〵〳〵それはえ春は
どつこい伊勢參宮

㊈菖蒲刈踊

二上リ千代を〳〵かさねてえいえてこい、また毎年のあやめかり、所は名に負ふ廣澤の、池
の〳〵菖蒲をちよん〳〵きり〳〵〳〵ちよつきりと、家づとにひつ束ねかい束ねてかづ
いた、今年や世の中なかの〳〵よい〳〵よい〳〵〳〵なつかの〳〵なつかの節供の大か
ざり、惡魔外道を打拂ひ、清めたてまつるの〳〵、千年も萬年も萬々年もお家はつさせ
ぬかざりえ

㊉芋之子踊

二上リ芋の其子のそだちを見たかえ、さつては子寶めでたいな、子は四十八よの、末ひろ
がりてやら〳〵やら〳〵そんれはえ〳〵、やら〳〵やら〳〵めでたしやん〳〵、一座は
ざらりと竝べて、一度によんだお名はえ、おとよけさよたつまつゆるまつだんだらいな
ごにかいつくほう、ひつつくほう、かいつくひつつく、火打袋にしやん〳〵おめでたい
よの

㊉一小川踊

二上リ水を汲みやらばようやよやよ小川でくみやれ、小川小石川ころびよてころび〳〵
ころびかょるとよえ、君はさい鳥さし、わりや鵙の鳥、無念至極やおとされたとよえ

㊉二ていこや踊

二上リ戀をしやらば火燵でしやれ、火燵痴話箱さんさかくれござらぬ、のうほんえ、えょ

のうほんえ、ていこや〳〵ていこ〳〵、ていこやというたやつはがつてんか、おうさゝ〳〵がつてんぢや、打ちもせい、ちよんも一つせい、ちよん〳〵ちよちよんと打つたやつに、はる〳〵とでようた、ちよちよちよんのちよ

㊀ほい〳〵踊

二上リ こちのちんちくちを、ほい〳〵譽むるではないが、とつと奥山のむぎでものが有るとの、親子なかに五六本というてかりてこいとの、人がかりてないとの、それ〳〵見たか、それ見たか、こんぜうながな子をもてば、人につい〳〵つい〳〵つい〳〵とられて、事をかゝした、ほい〳〵のほい

㊁のんやほゝ踊

二上リ 戀とくれ〳〵のんやほゝ〳〵、おしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵のんやほゝ〳〵とは思うたさうゝできたのや、おんは〳〵えい〳〵〳〵、裏の背戸のやのんやほゝ、おしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵のんやほゝ〳〵とは思うたさうゝできたのや、おんは〳〵えい〳〵〳〵

㊂二木踊

にほく戀しやな、世にある時は引けど靡かぬな、きよくもなや、とは思へども〳〵、善太どの〳〵情にへだてはない物を、せめて一夜のなさけのあらば、今の嬉しきごしん文字、忘れまじつきせまじ、此世はさておきのちの世も、これさて〳〵〳〵よいやさ忘れまじ

㊃まん丸踊

二上リ まんまるござれ〳〵、十五夜の月の輪の如く、はり〳〵輪の如く、よいとんなとん〳〵、十五夜のよさり〳〵つな挽女郎にうつほれた、はり〳〵うつほれた、まん〳〵丸やの七左が手管はがつてんか、おしつけ押へてやらかはいのみ船や、でかした〳〵これさ

ごんん文字―御親切

しちくでごし―黒竹田格子

さまに尋ねあはう、これさ紺の暖簾によの字と書て、しちくでごしでかくれなや、えいそれをばゆき過ぎ、花のかのさまに尋ねあはう、これさ〳〵〳〵

㊇ふくとん踊

ゆふぎり、こざつま、いき、小太夫―遊女の名

二上り情ゆふぎりほつとりとりおことな、あゝんはずむなあふくとん〳〵、こざつまいき小太夫ふくとんふく〳〵〳〵、ふくとん〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

㊉さゝら踊

せぢよやまんぢよ―千町萬町の意なるべし

二上り やんらめでたや、やんらたのしやさつさせぢよやまんぢよの烏追がまゐりものもふくとくとのむこがきたやれこりやつまだてゝ、そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵やつこりやつまだてゝ、御代のさかりのまん中、まん〳〵まんなか中で、ひとりの御代繼

古今踊歌百番終

松の落葉　卷第五

古來中興當流はやり歌

目録

一　花見車　二　五條車
三　咲たさくら　四　吉田小女郎
五　四季よほんぶし　六　しうと女
七　鹽屋長次郎　八　茶つみ
九　替りさいもん　十　手杵
十一　さまがたより　十二　間の山念佛
十三　伊勢の櫛田　十四　おもやこそ
十五　替り榮閑神風　十六　うらのせどのや
十七　旅の日暮　十八　鬼がでる

十九　おもひ草
二十　庄屋の庄左
二十一　つく物揃
二十二　三瀬川
二十三　心中しゆん
二十四　はてくせ揃
二十五　心中江戸三界
二十六　しもの關ぶし
二十七　わすれがたき
二十八　つらい〳〵
二十九　御馬屋關助
三十　十　かだの粟島
三十一　さまは天人
三十二　つんと坊
三十三　蔦の葉
三十四　酒はさかや
三十五　おもてみやれ
三十六　いかなきやく衆
三十七　曾根崎心中
三十八　むこ川
三十九　替りかんふうらん
四十　沖の石
四十一　さうだんべい
四十二　五尺手拭

四十三　大坂茶屋名寄
四十四　法性寺入道
四十五　お葛籠馬
四十六　ひめ小松

㊀花見車

本調子花見車をひきやるはよいがく、御所のぢよろしゆの袖ひくな、やれ袖ひくなく、御所のぢよろしゆの袖ひくな

㊁五條車

本調子五條あたりを車が通る、のほんえ、たぞと夕顔に、さんさ花車、のほんえ、花車くるまのほんのほんえ

㊂咲いた櫻

本調子咲いた櫻になぜ駒つなぐ、のほんえ、駒が勇めば、のほんくほんほのんいよくしよ

㊃吉田小女郎

本調子吉田通れば二階からちいよと招く、しかも鹿子のずんど振袖が、なんきみちよいと花がちるく

㊄四季よほん節

本調子さそふ嵐にちりゆく花の、よほんくくえ、よほんくくえ、せめてしばしは香ばかり袖には殘れ、よほんくくえ、よほんくくえ

「軒の橘枕にかゝる、よほんくくえ、よほんくくえ、小夜の寢覺にことゝふ山ほとゝぎす、よほんくくえ、よほんくくえ

「ところ關屋の月さへつらや、よほんくくえ、よほんくくえ、鹿の鳴くねに、いよしも哀をそふる、よほんくくえ、よほんくくえ

「雪にならはで思ひはつもる、よほんくくえ、よほんくくえ、消ゆる思ひになどかは解けぬは君の、よほんくくえ、よほんくくえ

㊅しうとめ

二上り おれがしうとめはきぶいぞく、あの松山の葉をよめ、あの松山の葉をよめば、そなたは天なる星をよめ、しうとめをどり一をどり

㊐鹽屋長次郎

二上リしほや長次郎はこいさばにのせてのうさ、起きにやとん〳〵どんどろめけば、夜のめもよねられず、あさせうがいな

㊅茶　摘

二上リくもの御來迎はさご右衛門が拜むえ、其子無事郎ともあじことはするなえ、のちはさご右衛門がみせかはりえ

「となり藪からによき〳〵出たは、こぞの竹の子のこの〳〵ま竹、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、やれ見ておいた、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、をどろとまよよ、はねきろとまよよ、いとし殿御とこちや寢たがよい、袖をしきねの新枕

㊈替り祭文

本譜子祓ひ清め奉るの、色は根本太夫職、さては天職姿なり、まんづ江口のはじめより、君といふ字をかきそめて、世々の末にはよゝねと君かえ、借上大臣閨の戸ほそこにひきこも

天職—太夫につゞ遊女天神をいふ
借上大臣—天照大神にかく

り、とこやみの夜店となりけるを、八百萬の末社たち、おろせが宿にてこれをなげき、神樂をもつて文作袖をひるがへせば、又常闇のけも晴れて、ともしび光りかゝやきて、これより色里繁榮し、末の世までも不退轉、寂光淨土の臺とかや

文作—趣向工夫をこちすこと

「思ひきれとや、きりやまのあさぎりこめて、やつきり〳〵〳〵やへぎりや、をはらたかくらたませしは式部奥州小倉山背山都路唐崎や、くれはやしほの道とせに、うらの揚巻つりはせで、いその勝山わけのぼる、麓の野邊の萩原が、敷きとねし夜のねたましく、萩の上風ふきはらひ、あくるわびしき葛城や、高間高崎のせを川あふえ、大きしあふよどや、此おふ國の君たちに、替らで通ふ人々に、きたるまじきはあゝくるしの、災難が祟をなすとも、今よりは諸客は成就、揚屋は滿足全盛と、うやまつてぞ申しける

たませしは—玉柏の誤か
あふえ大きしあふよど—大江大岸大淀か

㊉手　杵

二上リ市べ頭に弟はふたり、もちの米がな、やれ小豆がな、山に手杵を見ておいた、しよがいな、やれ見ておいた、山に手杵をみておいた、しよがいな

㊀十さまが便り

三下リあらいたはしや、百合若さまは〳〵、知らぬ他國にすてられて、橋の欄干に腰打ちかけて〳〵、そより〳〵と吹きくる風は、さまが便りか、なつかしや〳〵

「鳩が豆くふ八兵衛どの、鳩が〳〵、お花出ておへ、竿打ちかたけ、よやりひやりに出ておやれ〳〵、ちやつと出ておやれ、よやりひやりにでておやれ

㊁十二間之山念佛

二上リうき事を思へばいとど胸の火の、消えやすき身といひながら、輪廻のきづなに繋がれて、南無阿彌陀〳〵〳〵〳〵

「夢のうちなる夢の世を、悟らぬ事のはかなさよ、なむあみだ〳〵〳〵、野邊よりあなたの伴とては、胎藏界の曼荼羅と血脈一つに珠數一連、なむあみだ〳〵〳〵〳〵

㊂十三伊勢之櫛田

二上リ伊勢の櫛田のまん中程で、深き思ひのやれ紫帽子、ほんにくどくかさりや眞實か、五智の如來のめぐみもあろと、戀の重荷を乗掛馬に、はなれがたなき我が思ひ

㊃十四おもやこそ

二上リおもやこそくれ思はでこよか、千夜萬夜は寢てこそよけれ、かけてよいのは小竿に小袖、かけてわるいはうす情〳〵

「君をまつ夜はのほんほ、ほんに〳〵さ、西も東も南もいやよ、ほんにさ、とかく待つ夜はきたがよい、のほんほ、ほんにほんにさ

㊄十五替り榮閑神おろし

本調子かざらるゝ、百色の道具を並べければ、たどしまひものの如くなり、五通の手形の五本立てならべ、元よりせいすけ三國にかくれなき神變奇異の智慧者なれば、旦那のえんにさしあがつて、まづ泣事をぞ申しける、金子三兩〳〵かし給へ、かみへのぼるも路銀なければ、てんと白癩ごとうのつまりは下界におつる、伊勢にしんだいかためたれども、雨にふられ風に吹かれ、月まち日まちに、あまつさへ大にちにあひ、淺ましや火吹

どとう―悟道か

こすゐ―狡猾、湖水
だいつ―どいつ

く力もあらばこそ、大屋の屋賃もなさどれば、怒り切つてたてよ〳〵と、あたまくだしにしかられて、男ならば正八幡大菩薩まつぞやしばし、おなしあれ、伏見のごほうはいつものごとく、とうにすまさばなにかせん、たてたは此月巾の日よ、車は少し御免なれ、眞實おんになすならば、錢は一文なけれども、天王寺で醬油つくらせ、炭賣しても大事もない、四國の米は讃岐で一石おなじく一石三斗なり、筑紫の彦三はいつものごとく大屋して、きどくにめうとは方便なり、丹後に成相きれいにもんたて、大ぜいくらすとうけたまはる、日吉は山王廿一じやが、親は白鬚左ちんばでこするな男、父をふんぬくぞんめいなり、みやうぎ町には願人坊で、はてはらきる湯殿のゆかたは見ぬまに失せたが、だいつが取つた、手元がみたい、見付けたぞ、おひくる時は一厘にけ二厘にけ、第三にあたつては奴に頭を切りわられ、惣じて身の創は一萬三千餘創なり、たとへ定業かぎりの質物なりとも、今一度うけさせたび給へと、せりかけ〳〵祈りけり、質屋も納受したりけん、五兩二つにさつとわれ、二兩二分にぞ成りにけり、三人のどろぼども、ゆんで

ぬを―ぬのをの誤かちん

めてより取付て、おんかたつたり〳〵、かほどのかたりは漢家本朝に、又と二人はあるまいとて、金かすものこそなかりけり

㊇うらのせどのや

裏の背戸のやでぎしり〳〵とぎしめく程に、なんぢやと思うて、走りでて見れば、なんでもしやり〳〵、おんぢやれめされ、さしまさぬか、夏帷子のぬをおしやり〳〵さらす、おんぢやれめされ、さしまさぬか、夏帷子のぬをおしやり〳〵さらす、

㊉七旅の日暮

二上リ

いうて歎くはおろかでござる、言はで思ふはのう身をこがすといの、旅は日暮が物憂いものよ、忘れた戀を又おもひだす

㊉八鬼が出る

本調子

おくりかへせば比叡の山風身にしみて、菜種の花もいろ〳〵

「鬼がでる跡より子鬼がいくらともなく、によき〳〵とある所につき給ふ

㊇おもひ草

本調子長い刀をほしや〳〵とさして、逢れぬ中を文にて通ふ、いつそ此身はもみくしやにして、死なば野中の身は朝露と、きえてはかなく成りゆくものを、何が殘りて罪とは成るぞ〳〵

㊈庄屋の庄左

二上リおとんとん〳〵とろさくやれなかそめてこんにもせい、中さへよくば鍋買うて所帶しよ、それがそこへいてることか、庄屋の庄三どのはつちやはづかしや

㊉つく物揃

本調子籬がもとに立ち出でて、こぬ人を〳〵まつ身のうらみ言はんため、やくや裳裾をかいとりて、土手をつく〴〵見渡せば、土手の番太は棒をつく、お寺の法師は鐘をつく、こちの剛染は唾をつく、さて又われらは數々のつくりし罪のおそろしや、後の世たのむ南無あみだぶつ〳〵、ゆいて歸るさに、ゆきやあたりまはりて胸をつく

わちがーわれちがの誤かならにーならぶの誤か

身今更にー身の今更にの誤脱かてうしー調子、銚子

ひじきものー引敷物

㊉一　瀬川

本調子西は堀川中小川、沅湘日夜ひんがしに流るゝ水の賀茂川や、わらがための三瀬川、けに〳〵はしも三本木、比は卯月といふしでの、ほんでんすごく立てならに小家の燈火きえのこる、影をたよりてふみ迷ふ、かしこ爰よと定めえぬ、いつそふたりが中の島、かくれゆく身今更に、わすれぬ顏を今一度、見つゝ見られぬ薄月夜、しばし入間の水かゞみ、川をへだてゝほの聞ゆ、ばちもしどろに引く三味線の、てうし〳〵といふ聲きけば、飲み白けたる風情して、夜もはやいたく更けぬらん、わけと鳴きゆく時鳥、誠冥途の鳥ならば、地獄のありさま語れきこ、聞くともいかでかはらめや、今宵かぎりの憂き契、ひじきものには薄羽織、はおらでしくも短さよ　三下リ「どしおり帶の長枕、おきて見さんせな、後の世もあをに今しばしぞや、又寢のとこ〳〵にもぬるゝは袖、束が白む、白むか鳥も告げわたる、はねをかはさんためしにや、つまと〳〵を引きむすび、ともに假寢の夢すがた

六つの巷―六道

㊂心中しゆん

本調子まゝにならぬは浮世ぢやものと、思ひまはせどまた捨てられぬ、いつそ露とはきはめたけれど、あとでそなたが怨みんものと、思ひはかりて語るといへば、しゆんは聞きつゝよう言はんした、わしも氣の毒語るにつけて、にくい平ざがよこしま戀慕、それさへあるにちかゝに、西國がたへやらんとは、親のまゝなる悲しさは、これが浮世のならひとや、とてもこなさん死なんす身なら、わしはかうぢやと呼きければ、吉左うなづき、さあらぬていに暇ごひして立ち別れゆく、夜は何時ぞ、八つの過ぎかや七つのかしら、六つの巷も三途の川も、死出のたびたつかいどり姿、心細くもあと見かへりて、のうよしさまか、待ちかねさんしよ、首尾をつくろひ此脇差を盗みまするにひまどりまし た、いざや最期の水さかづきを、一つ二つにはやふしごやの、回向の鐘に南無あみだ、南無あみだ佛ときえてあしたは卯月の五日、せみの小川に名をながす、思ひと戀とえ

㊃はてくせ揃

氣でせい―「男は氣でせい」といふ俗言あり

鹽ふませたち―峯公の苦勞をさすること

山も見えざる―前途の見定めなきこと

本調子するなざいしよのくせ聞けば、まづ上手町はけしからぬ、雨のゆふべは面白や、また氣をかへて島原と、ゆけば禿がはしたなく、はやり詞の口合に、あゝけたゝまし祇園町へと立ち歸り、もんじが門で誰やらが、氣でせい〳〵と石かけに、はやる口合まあさうよ、それは一升がなんぼする、はてさういやるがいやぢやいの

㊄心中江戸三界

二上リト本調子　江戸へやりつゝ鹽ふませたら、末がよかろと皆いひ合せ、既に談合極りければ、そちに逢ふのも今日明日ばかり、まめでつとみやや、わづらやんなや、いとまごひぢやと涙で語る、ふさは聞くよりこは何事ぞ、わしは勤めを明日やめうともまゝな身なれど、こなさんに逢ふがうれしゆて、うか〳〵勤めまするに、どうよくな、江戸三界へゆかんして、いつ戻らんす事ぢややら、山も見えざる假初に、つい馴れなじみ、わしをさて、どうせ女房にもちやさんすまい、いらぬものぢやと思へども、どうした事の緣ぢややら、忘るゝひまもないわいな、それをふりすてゆかうとは、やりやしませんぞ、手にかけて殺

あが身―わが身の訛か

しておいて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ、男しばらく泪をながし、馴染もないに嬉しやな、なんのあが身に別れて、おれが何をたのみに行かうぞいの、そなたふりすてゆく身でもなし、今宵爰にていざ死なんとて、つひにふさをば刺殺しつゝ、ともに其身もな野邊の露

㊀㊄下の關節

本調子思案橋とん〳〵こえてな、お宿にござんす〳〵か、そこせい〳〵、三里へだてし波のうへ、色と情を小舟にのせて、くるは誰ゆゑ、そさまゆゑ

「北山ばら〳〵ば、時雨ながら笠持てこい、降りてきた、そこせい〳〵、雨はふるとも、ぬるゝとも、只おそろしきかざし風、とかういふ間に晴れてゆく

「淺黄はざつとした、いやよな、望みがござんす〳〵る、そこせい〳〵、こがら山から四十から、から松たけのいくちよも戀に、うき茶の葉の色に

「一夜はちよつとの間これなびけな、あんまり〳〵どうよくな、そこせい〳〵、さりとはつらき御心、物のむくいは物ごとに、小野の小町の身は市原のしやれすがた、あなめあなめと吹く風に、熱のさめたる末を見よ

長門印籠―此國の名産なり
ぐわい―具合

㊀㊅わすれがたき

二上リ忘れがたきは彼人さまの、過ぎしたよりにこされし文を、たとひ三千年あはずとまよ、親と〳〵の結びし緣を、なんのとかりよう、其下紐をうらがとかいで、解く者はおんぢやるまい、あとの亥猪にこされし文は、いつ〳〵よりもかはいらしや、のう〳〵えいこのさんさ、富士の裾野になーもとすゝき、やれ枯れしはいつか我戀ほにいでて、亂れ合はうといふ事か、えいこのさんさ、岩のはざまにな、やれたまり水、ひとりすませといふ事か、君としめよてぬる手枕は、長門印籠ぢやなけれども、ぐわいがよかろとほめられた、ほめたも道理、今の世に又とあるまい御女郎

㊀㊇つらい〳〵

二上リつらい〳〵と思ひはすれど、顔が見たさにあこがれきたを、それと知らぬえ、よし

やよそにうつろふ濡衣なれど、色ふかくも思ひそめたえ

㊇御馬屋關介

二上リだてを好みやる、御馬屋の關助くるやら馬も、馬もいなょきくつわもなるに、次郎よ太郎よ、どこに〳〵、さて馬どょんどつょんとつつないだ、お寺の寺の柿の木に、づんぼろぼ〳〵とょんとつょんとつないだ

㊈かだの粟島

二上リ加太の粟島をえい〳〵えい〳〵な、えい〳〵えい〳〵えい〳〵な、なにというて又をがむえ、君とねじやかをえい〳〵えい〳〵えい〳〵な、いうて又拜むよえ、だいたらしめたらさ、猶よかろえ

㊉さまは天人

二上リさまは天人それ〳〵とんとろり乙女のすがた、雲の通路ちらと見た、とんとろり女のすがた、雲の通路ちらと見た、とんとろり少

㊉つんと坊

本調子つんとぼがさ〳〵え、ちやのおまへのそりはしを、あんまいぎやたら〳〵のほんほほあょつんとぼがさ、いやおりやつんどすいたよさ

㊉蔦の葉

三下リ落ちよ〳〵とおとしておいて、壁に蔦の葉のき心、つたの葉〳〵かべに〳〵つたの葉のきごころ

㊉さけはさかや

二上リ酒は酒屋に茶は茶屋に、ぢよろは木辻の鳴川に「ないそなょいそ五月にや戻る、おそて六月中頃に

ないそなゝいそ
―泣きそな泣き
そ
おそて―おそく
ても

㊉おもてみやれ

三下リおもてみやれの、せけんまいよものか、忍びながよづんまのよふたあょ心、よづまのよしのび〳〵ながよづまのよふた心

秋田―飽きたにかく
花―花代
ゐわし―ゐあしの訛
辛崎心中―目錄には曾根崎心中とあり

五月雨ほど戀ひしのばれて、今は秋田の落し水〳〵

㊇いかな客衆

本調子 いかな客衆よりも、髭の角さまおいとし、お歸りのあとを見れば、鬢附一貝鼻毛抜、小栗の草子をおかれた、これが花かやたどし今宵のつとめか、物日〳〵の口ふさげ、世にこくにせはしらしいは晦日ごとの夕暮、白いお手にて出だされた、なによおわしを、二百いだされた

㊆辛崎心中

二上り 此世の名殘り夜もなごり、死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づつにきえてゆく、夢の夢こそあはれなれ、あれ數ふればあかつきの、七つの時が六つ鳴りて、殘る一つは今生の鐘のひどきの聞き納め、寂滅爲樂とひどくなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見あぐれば、北斗はさえて影うつる、星の妹背の天の川、わたせる橋を鵲の橋と契りていつまでも、我とそなたは女夫星、かならず添ふとすがりよ

り、ふたりが中に降るなみだ、川の水嵩もまさるべし、道ゆく人の聲たかく、京や大坂の心中の、ことの葉草のとりぐ〳〵を、きくに心もくれはどり、あやなやきのふまでも、よそに言ひしが明日よりは、我も噂のかずに入り、世にうたはれん、歌はゞ歌へうたふも舞ふも法の聲、實に思へどもなげけども、身も世も思ふまゝならず、いつを今日とて今日までも、心ののびし夜半もなく、思ひの色につらかりしに、どうした事の緣ぢややら、忘るゝひまもないはいの、放ちはやらじと泣き居たり、歌も多きにあの歌を、歌ふはたぞや聞くは我、過ぎにし人もわれ〳〵も、一つ思ひとすがりつき、月の影さへとゞまらで、心もなつの夜のならひ、命をおはゆる鳥のこゑ、明けなばつらやからさきの、濱で死なんと手を引て、志賀のさゞ波さよ烏、あすは我身をゑじきぞや、まことに今年はこなさんも、廿五歳の厄の年、わしも十九の厄なれば、思ひあうたる厄だたり、緣の深さのしるしかや、神や佛にかけおきし、現世の願を今こゝで、未來へ回向し後の世も、猶し一つはちすごと、つまぐる珠數の百八に、涙の玉のかずそひて、盡きせぬあはれ盡き

る道、心も空も影くらく、波うちよする辛崎の、松の木蔭につき給ふ

㊇むこ川

二上り　むこ川に住居する茶吉殿わいの、年が十五なら、心は月のまんなかよさ

㊈かんふうらん替り

二上り　大酒亂、冷酒飲んでみや、長酒のみ、じらけも一つ飲んでみや、たんたらふく二日ゑひ、後悔くすりに金鹽

「やんしううすむいろまりやんけんたにこたまさんちゑまさんな、はらりと酒の燗、おなじこと梅の花、とうらいきうご五うりうすう

「かせ山うす雲江口白菊坂田花崎唐崎ぢや、若松小紫でん〳〵り几帳錦木琴浦玉の井だてみよし

㊉沖の石

とちゆ―地酒の誤か

とうちい―都來、十をいふ

本調子沖の石とはおろかの沙汰よ、乾くまもなきわが涙、まもなきな、まもなき乾く、乾くまもなき我涙

㊃さうだんべい

二上リそなた待つ夜の往來を、細く長かれとろ〳〵と、さうだんべい、至極と聞きわけた
「内裏ぢよろしゆは水の月、手にも取られず見たばかり、さうだんべい、至極ときゃわけた

㊃五尺手拭

本調子五尺いよこの手ぬぐひ、五尺手ぬぐひ中そめて
「おれにいよこのくりよより、おれにくりよより宿におけ
「宿がいよこのよければ、宿がよければ名も立たぬ
「佐渡といよこの越後は、佐渡と越後はすぢむかひ
「橋をいよこのかきよやれ橋を、かきよやれ船橋を、橋のいよこの下には、橋の下には

至橋―至極道理

鵜の鳥が
小鮒いよこのくはへて小鮒、くはへてぶりしやりと

㊃大坂茶屋名よせ

二上リえい〳〵えい〳〵えい〳〵繋がぬ船は波にゆられて身は捨小舟、よるべ定めぬ港やの、二階座敷でひくしやみせんの、音はてんつる〳〵、天滿屋たゞ屋水の流れに吉野屋みれば、いつも格子に花橘屋、ゆかり求めてお名をば菊屋、それをたづねて北島屋、文のかずよむかみたや紙屋、尼崎屋で身はぬれ衣、色がくろけりや大黒屋ぢやと、人が名たつりや少しはわくや、さきにゑびすやあしや但島屋で、こがれ扇屋あの姫路屋で、たがひちん〳〵ちがひの、お手うちちがひのお手枕、じつかはす枕に契をこめて、かはすまいとて起請まで書いて、のぼりつめたる坂本屋、たれが思ひもあの太子屋の、花の振袖年や若松屋、つらい勤めは身にしみゞ〳〵と、はやり小歌のその一ふしも聞てなりともの月日を松屋、額のこさんはな綿屋のつとめ、戀がござれば勤めのさはり、内のかゝたや

わくや―業がわくとの意にかく
かはすまい―かはるまいの誤か

な目をむきだして、叱り升屋というてたもれ、えいこのこいや、思ひしづみし身は河内屋の、浮名かきけす住吉屋、波の枕に鹿島屋たてよ、京屋伏見屋讃岐屋までも、くるりくるりとうられてめぐる、便りござらばあの三笠屋で、一つまゐれとな手にすゐたさ

住吉屋―墨にかく

㊀法性寺の入道

二上リ法性寺の入道さきの關白だしよ大臣、うななぜうせをつた、やれたよきだされるな

「祇園町のまん中が、海なら川ならよござんしよ、魚をつる篠竹の、やれさまを釣りまつしよ

「猿丸太夫奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の、うななぜ鳴きをつた、たよきだされるな

關の小刀銘はなけねど、綾もたちます錦もたちます、金襴緞子は申すに及ばす、瓜もわります西瓜もわります、うななぜわりをつた、やれたよきだされるな

㊁おつぐら馬

二上リさても見事ななおつぐら馬よ、下にやせんしきからじまの蒲團、ふとんばりしてな

せんしき―遠敷き

小性衆をのせて、そなた上りか、おりや今くだる、文をやるにもことづてしよにも、爰は箱根のな山中なれば、筆にやこと缺く、硯墨はもたぬ、もしも水口なおとまりならば、札の辻から四五間めの茶屋で、馬も息災其身も無事に、やがてのぼろと言うてたもれ、えいこのさんさ

㊂姫小松

二上リやらくめでたやくく、天下泰平國土あんのん、治まる御代は天長地久千歳樂萬歳樂、民もゆたかに住吉さまの、岸の姫松しつてん天に、大悲の風ふかば、地には黄金の花がさこ、ありやよいよしのめでたいな

あんのん―安穩

はやり歌終

松の落葉　卷第六　中興當流所作

目錄

一　契情夜明烏
二　大阪上り道行
三　傾城因幡松
四　淀川所作
五　契情多賀大祓
六　契情誓湖
七　富士禪定
八　多賀御傳來記
九　奈良名所盡
十　吉田小女郎
十一　公時酒之醉
十二　西國八景
十三　鎌足道行
十四　菊の花いくさ
十五　名護屋山三
十六　傾城淺間嶽
十七　關東小六青葉
十八　小六自然居士

十九　男道成寺
二十　行平道行
廿一　行平地獄物語
廿二　松茸狩風流
廿三　稻荷四ッ門
廿四　稻荷塚狐會
廿五　契情花筏
廿六　彌陀たのむ
廿七　傾城佛のはら
廿八　女仙人
廿九　女仙人怨靈
三十　廿四孝狐會
卅一　傾城善の綱
卅二　文覺上人
卅三　とがしの城
卅四　山居の僧
卅五　名馬揃
卅六　柴かり風流
卅七　あふみ八景
卅八　狂亂
卅九　三ッの車
四十　時雨の松
四十一　思ひの繪姿
四十二　文ことば

四十三　定家怨靈

四十四　地つき踊

㈠契情夜明烏

袖崎流　澤村長十郎　歌

二上リ今は昔とのむけぶり草、何を便りに身は浮草の、浮いて流れの情なや、啞もかざりも一座ながれの面憎や、ようも〳〵書いたぞ起請文、たゞく煙管に咎もなや、しや〳〵り飲み〳〵流す涙の袂をひかへ、誓文くされ、神ぞこれにはあの言譯が、はてまづ聞けば恥しらずいきちくしやう、ふたりが中の起請を見よ、まづ一つそのはうさまと二世三世、死なばもろとも後世までも夫婦の契約致すこと、また一つ外の男に假枕、かはす詞のそのしなゞ〳〵を、つゞまずあかし申すべし、こゝに誠の一つあり、かさねて啞にも勤めにも起請血判のおし申すまじき事と、書いておいたはこりやどうぢや、人には啞をばつくとまゝ、せめて神には恥ぢよかし

㈡大坂上りの道行

中村千彌

本調子だてなとりなりつい思ひたつ旅姿、人目を包む笠ふかゞ〳〵とおもはゆく、五條の橋のしもばしら、思ひいだせば故郷浪華もなつかしやと、いとゞ心はよわ〳〵と、ゆけば

程なくこれやこの、宮川筋をのぼりつゝ、はやたつ風呂のゆかたがけ、さすがをなごの京めいて、ちよこ〳〵いそぐゆたかさよ、東にむかへば清水寺、大悲の誓ありがたや、枯木に雪の花もさく、たれ松原の橋すぎて、加茂のながれの水せい〳〵、ゐせきに遊ぶ友千鳥、はつと立つてはひらり〳〵〳〵、ひら〳〵〳〵飛びつれ〳〵とびつくとびゆく有様、たとへて云はんかたもなし、つゞく川風かみあらひ、さす手引く手にしなはこばなしこひばなし、比良の雪風も肌さむござる、裾も小褄もちよとからげて、しやんとからげ、さん〳〵さゞなみ男波にもまれ、女波にもまれ、あそぶしらかみさん〳〵ちらし聲をかしくもいさぎよや、西は法輪愛宕山、みこし高山峨々たるは三國一のひえおろし、わが念願をはらさせ給へと、一心に祈誓かけ、歩み〳〵て今ははや、ふたうる茶屋にぞつき給ふ

しちかみ―しちなみの誤か

ふたうる茶屋―不動の茶屋の誤か

㊂傾城因幡の松

二上りだまされて思ふことをば寝言いふ、わがつらい男にくひつきはぎりする、其心の罪

（龍川大三郎　坂田半太郎　藤村十郎）

つくる油火とろ〳〵影法師、こゝにつつくり面影みする、唾のかず〳〵つく男、ねてはびつくりする夢を見せてなりとも、あゝあのしやうわる〳〵性のわるいは粋から起る、口にまかせて目で殺す、女心のはかなさよ、空誓文にのせられて、唾にも惚れたといふことは、餘りうれしゆてにくからし、かみをすきたて百しやうわけ、戀をしこなす男つき、そんなたならでは外にはないとさ、いうた詞のよい〳〵うれしさに、逢うて悔しやはづかしや

そんなた―そなた

㊃淀川所作

（山下亀之丞　岩澤源十郎　井村左太郎）

春の夜の夢おどろかすくたかけの、そのきぬ〴〵の物思ひ、又あふ事もいつかはと、深き心にかこち草、根引にせんといひかはす、身は捨草のすてられて、ながれし此身は淀川の、何をたよりに浮草の、波にゆらるゝうたかたの、あはぬは君がなさけなや、ねたましや、それは若草身をうらみ草、なんのそなたにあいだてはなし、飽きもあかれもせぬ中なれど、うけ出す金の蔓に離れてつたなき我身、せめてあはれと思へかし、送りかハ

あはぬ―泡にかく

しさみしや寢屋の、今は枕に香ばかり殘るうき思ひ、猶うらめしき鐘のこゑ、した行く水の思ひ川、底の心を白糸の、亂れて物を思へとや、鳥がうたへばもいのとおしやるさのえ、月夜がらすはさ、いつも鳴くよ、しやうがえ、もいのとおしやるさのえ、月夜烏はさ、いつもなくよ、しやうがえ、しばしとまりてくれよかし

岩井玉之江　中村四郎五郎　津川半太夫

㊄契情多賀の大祓

三下リ又とだに頼まぬ中のわかれ　みちを、今はの空の山かづら、ことばでからむ葛の葉の、怨みかこちて甲斐ぞなき、水に繪をかく男氣を、頼む力ぞたよりなき、狂ひかけだす心の駒よ、とめてくれかし情のあらば、情たづなや緣の綱、たぐり寄せばや引きよせて、だいて寢た夜は花をやろ、ねた夜は花を、だいて寢た夜は花をやろ、解けぬ思ひのあだ男、のう柏木ばかりはいとしうて、うちには水がつくかいの、死ねなら死ねと、假名がきに讀めるやうには言ひもせで、あだに取られし命ぞと、たぶさにすがりむしりつき、くひつきつめり涙ぐみ、疊たゝいて泣くばかり

つもるうちーつもるうちみの誤か

㊅契情誓の湖

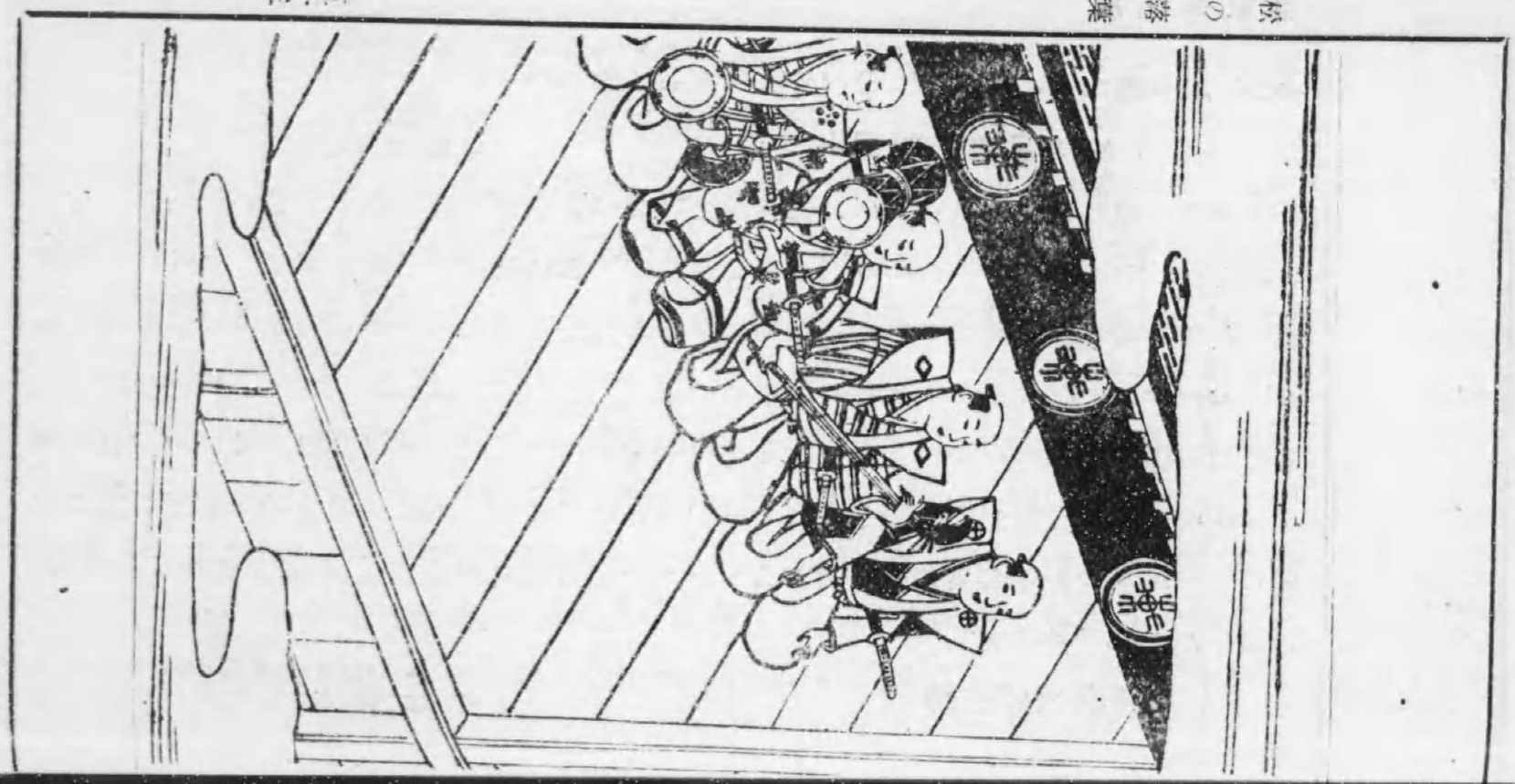
三下リ花はちりても春は咲く、死してかへらぬ死出の山、迷ふ戀路の、むごやつらやどうよくや、ようは殺した、その苦しさを今ぞ語らん泪川、いとし男のその言の葉を、かはいゝ〳〵といつはりごとを、誠と思ひ、おりや一筋につらい勤めも、それはそのゝそりや苦にならで、廓離れて罪なき花を、いつかゝと氣のせくことも、皆仇花とちりゆくこの身、今くる花に目がくれて、ようは樂む心のにくさ、とかく死んだがさりとは因果、死んで花實のさかぬとは、花實の死んで、死んで花實のさかぬとは、我身のうへに白雪のこる、つもるうらは戀の山

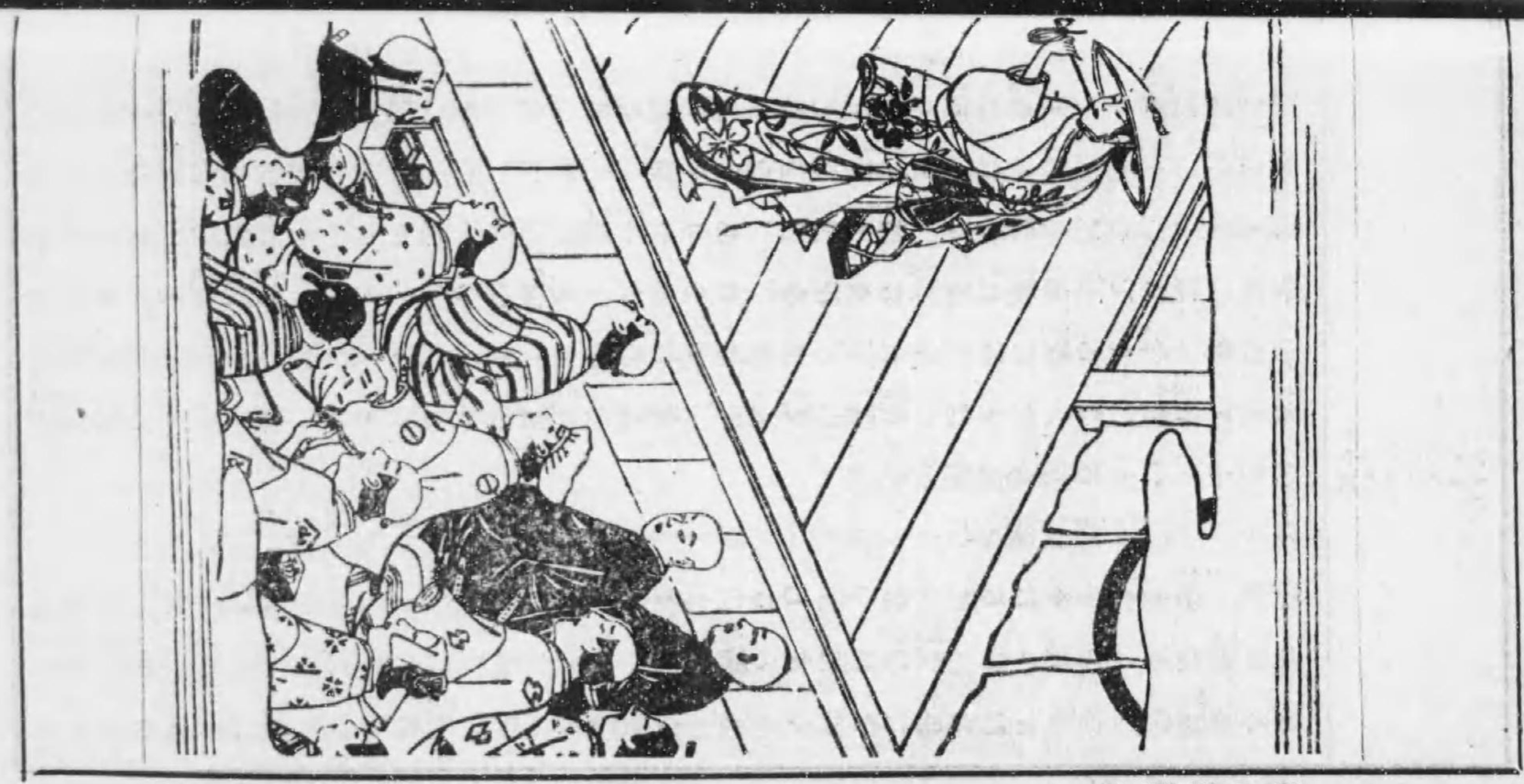
大和山甚左衛門　山下龜之丞

㊆富士禪定

二上リ一筆と書きそむるは、なつかしさのまゝ、道より問はせまゐらせ候べく候、わかれより程はあらず候へど、思ひねにする獨寢は、心もすみて目もさえて、たばこ戀草伽となる寢屋のうち、かはる色なき御くらし、やがてあをぞや語ろぞや、筆にまかせぬ物お

高島尾上　金子十郎左衛門





もひ、たゞ逢ひまして〳〵、のこる言の葉かへすがき

松本重卷
大和山甚左衛門

㈧ 多賀御傳來孫嫡子

二上リうつゝ男の姿にまがふ、さらば面影はなれもやらで、わが身一つのうき思ひ、おなじ思ひにしづみし中も、いとゞ忘れぬねやの内、いざ床とらん春の夜に、こちよれ枕長枕、かたりあかさん朧月、煙草引きよせ飲む睦言に、おれもそなたも知らぬ昔がよいわえ、とても知るなら根から底から知れかしな、いつの物日に馴れ〳〵そめてきそはじめ、わけある戀の種まきそめて、中よしかみよし心よし、ふたりまろ寢にころりとしたもましぢやえ、明方の鐘はつく數の響に、あたら夢を忘るえ、あけもんのしらせはお歸りと起され、あたら床をわかるえ、おそい〳〵のお歸りと起され、あたら床をわかるえ、をしやねたまし春の風

竹中吉三郎
山村勘三郎

㈨ 奈良名所盡

本調子三笠山名に高く、もろこしにても仲聞が、ふりさけ見ればとよみし名所のそのむかし、今も雲井にすむ月の、久方のあまくだります宮の神杉木の間すかしにながめ有、とはせたまへや教へ申さん、うれしや扨は尋ね申さん、あれ〳〵は名に負ふ奈良坂や、此手を合せて伏し拜む、東大寺には大佛の釋迦はやり彌陀は導く一筋に、後生前生のみ寺とかや、おうそれそこの高根はつゞら山、のりかけ馬のかち路の道をゆけば、左へ戻れば右へよほいほ、すぐに通へば一里十八町、まはらば三里よほいほ、それをば行きすぎ花の初瀬の山つづき、興福寺と申せしは、藤氏の御願所にて、大織冠な御身をやつし、面向不背の玉を取らんとおほしめし、いやしき海士の磯まくら、妹背ことばの末かけて、女も命すて小舟、こげやえいさら、八十島鷗のたつよの、たたせ給ふは志度寺の觀音、なむや薩埵の力を合せてたびたまへとて、大悲の利劍の額にあて、龍宮の中へ飛び入れば、空は一つに雲の波けぶりの波をかきわけかづきあげ、又どう〳〵落ちくる男波のひまを、つつとくゞるや唐紅の綱は腰縄命のきづなしつかとひかへよ、御船のうちにも心得、えい〳〵えいとも綱の、のぶるを便りに走り入り、かの寶珠を盜み取て、にげんと

後生前生―後生善所か

すれば悪龍追かけ、兼てたくみし事なれば、持ちたるつるぎを取り直し、乳の下をかき切り玉をおしこめ、つるぎをすててぞ臥したりけり、龍宮の習ひに死人の忌めば、あたりに近づく悪龍なし、約束の縄をうごかせば、人々よろこび引きあげ、玉は面向不背の唐あの御ほぞんの眉間にこめしぞ拜ませ給へや旅の姫、二月堂には觀世音、牛王は彌陀佛はん木の御板、井筒のいのりに鈴 錫 杖はから〳〵〳〵ちんから〳〵〳〵、唐獅子のふむらん拍子やしんたん〳〵たん〳〵たのむや、たん〳〵たりき他力功力のたき文珠、わかさみかさにわかさやと、しやすいの印をぞ結ぶなり、結ぶや誓の常陸帶、鹿島の御神當社にうつるや、高きお山は本社のいらか、籠にとどろき猿澤、しやかつた八大龍王龍燈さゝげ、池の青波けたて〳〵雲にのり、大地をかつぱと踏むひやうしの御神、惣じて奈良は七堂伽藍八百八禰宜九重十重都の礎、社のかずが一萬八千、通り者めが褒めておいたる名所舊跡、たがひにとうつ問はれつつ、春日の宮居に著き給ふ

面向不背の唐―誤脱あるべし

しやかつた―沙羯羅の訛

㊉吉田小女郎

嵐三右衛門
市川芳香
瀬川雅門

端歌 あら淺ましやつれなやな、われからなせる思ひのたね、みの末世、一代教主の如來も生死のおきてはのがれ給はず

本調子 池水に底の心は通へども、岩にせかれて落ちあはぬ、あきてはかなき浮世ぞと、思ひすてゝも棄てられぬ

三下り 昔の人の戀せしは、命も絶えよと戀をする、さて中ごろの戀の道、草木もなびけと戀をする 二上り「我は思へどそなたはつらや、磯の流れ子のかた思ひ、さはりせうがのやれ片思ひ、磯のながれ子の片思ひ、さはりせうがの 端歌「とは思へども、いとど戀しき折々は、人目も恥もつゝまれず、せめてねやもる月だにも、別れをいそぐ遠寺の鐘や梢のあらしは物すごやの

流れ子―流れ木の誤か

二上り「戀の山ぬるも寢られず、目もあはぬ、身の狂亂は誰ゆゑぞ、問ふにつらさのます鏡、いつまでかくは長らへて、憂きは數そふ習ひにて、身は捨草のいたづらに、あら怨めしやく、心もなげに立ちのぼるく、くゆるけぶりはほのぐと、あとには戀の淵

さむさ―さむき
かすちよ―棄てよう

瀬川、せど川のさはの〳〵さむさ嵐にひよつとうかれて、川原おもてに浮名をさらす、思はじ〳〵とんとすちよ、そも戀は何のむくいぞ〳〵

竹島　幸左衛門

㊀公時酒の醉

二上り　峯の松風通ひきて、琴のしらべと疑はる、一の人大臣はしよだいない人で、え踊らぬ我に踊れとおしやる、踊でふりを見せまゐらしよ〳〵、くわんこや〳〵くわんこ〳〵くわんこや、てれつくに〳〵からりちんに、ちんからり、しやつき、しや〳〵しやつき〳〵しやつきしや、ここをあけさい、明けずばもどろ〳〵、忍ぶ其夜の通路に、必ずござせとさ、さまの佛みやまの奥を通りて見れば、いたいけしたる花あり、荻萩すゝき刈萱紫苑りんだう、數の花折りせたらおうてせおうて、藁で髪をゆうて、腰に鎌さいて、ついつくばうて、かいつくばうて、つい〳〵とりなりは柴刈るをの子のなりふりは、みめのわるいしやつつらで、そばにころり〳〵り〳〵〳〵〳〵ころ〳〵りともねたるは毬栗頬髭天神鬚、けさ打ちおろしのあら筵、がんきやすりこめはだついつくやうで、さすやうで、いつくにばつくに寢られぬ、誓文のつつ立て申すべい、弓矢八幡腰骨こみちに打て、かばねはかきにさらすとも、きのうらにによ、あぶないこんだとさ、かはりはてたよ、しよだいなや

竹島　幸左衛門

㊁西國八景

本調子　別れてなくね高砂や、室津に通ふ市人は、山市の晴嵐今こゝに、うつしぬるかと面白や、それより沖のあま小舟八十島かけてこぎいづる、こなたは尾上鐘の音に、霜にさえつゝ聞ゆるは、遠寺の晩鐘あはれなる、一村雨の降りくれば苫もる雫に身をそばめ、こがれたどよふ其風情、これや誠に瀟湘の夜の雨よとおもほゆれ、忍じまがさきは雲はれて、猶洞庭の秋の月、心を慰むたよりとなり、夜もほの〴〵とあけゝれば、いとど舟長力を得、梶とり直し帆あげて、波に漂ひこがれゆく、淡路の島の朝霧に、むれゐてあそぶ雁金の、われは故郷の戀しさに、常世のさむさいかなれば、ふる里すてゝきたるやと、問はばや平沙の落鴈に、そふがいにしへ思はるれ、沖のつん釣舟なる艪拍子の、音はから

したけきー「レ」の字不用なるべし

ころり、つるゑりつるろ、男鶴女鶴よるのつん〳〵鶴めが、つま思うて鳴くねにいざやくらべん、くらべこし、暮れかゝりては浦々の、沖の釣舟我さきにと、入江々々に歸りしは遠浦の歸帆是なるべし、遙に見えしは一の谷、まことにいにしへ源平のいくさ、亂れし跡も有明の月に白むは劍のひかり、水にうつるは冑の星、うちあひさしちがふる軍勢の其有樣、ひくは潮に滿つるは又、八重の潮路のはる〴〵と、西海四海波の上、たつたみかけ〳〵ほつかけ〳〵たゝかひしは、はな〴〵しくこそ聞えける、あらおもしろのながめやと、勇みに勇んで行くほどに、明石の浦にぞつきにけり

竹島幸左衛門

㊀鎌足道行

本調子

此手柏のふたおもて、いつか竝べん長枕に、かれてゆくや只ひとり、勅諚おもき御意を得て、四國の浦へといそがるゝ、心のうちこそたのもしき、はや山城に井手の里、月の横川の峯つゞき、ゆんではひらのめては愛宕の山おろし、峯のけぶりの一むすび、袖打ちはらふいにしへを、思ひいだせば故郷の空もなつかしや、したけき心もよわ〳〵〳〵よわと、しどろもどろの志賀の里、須磨の若木の櫻花、嵐につれてちるは〳〵、散りくるの、ちりくる〳〵、をしき櫻はちりはつる、思ひ明石の浦過ぎて、室の泊に身をよせて、海漫々と見わたせば、こなたは四國の淡路がた、波にもまれてゆく鷗、浮いつ沈んづ、しづんづ浮いつ、ばつとたつてはひらり〳〵、ひら〳〵〳〵とおるゝ有樣は、たとへていはんかたもなし、便り求めてゆく程に、七重八島の壇の浦、眞砂をはつと拂ふ風のまは、笠かぶりかたむけて身をかこち、人まつ澤に腰をかけ、旅の休息なされける、異國は知らず我朝に、ためしまれなる所存やと、ほめぬ者こそなかりけり

竹島幸左衛門

㊁花軍

三下リ

優曇華の花のひらくを待ちかねて、ちらすな花のあるじをば、こがれ〳〵てつれて都へ、やれのぼらんと、おとにきりこころ〳〵音に聞えしをはらの里は、菊の名所とたよりを求め、杖にすがりて數へてみれば、白菊の紅粉菊の小手鞠寒菊きくきり〳〵きり〳〵まはる水車くるり、澄まず濁らずよほほんにさ、くん〳〵くん〳〵〳〵まはる車菊、まは

りまはれば芹生の里、沈や麝香はもたねども、匂うてくるはたきもの、おはらぎ〳〵買はい〳〵、黒木めされの、柴めさいの、ちやうりよふりよひうやらに、ひやらろひやらろに、るろるりちやらるろう、心うかれてさつても〳〵おもしろや〳〵、りやうじんたがひに心を合せ、菊のせいをみかたになせば、菊の莟をさつと開かせ、をんどりあがりとびあがり、手重の菊の勇みをなし、あつぱれてん〳〵てがらやと、褒めぬ者こそなかりけり

りやうじん―雨陣か

㊤名護屋山三

中村七三郎　花井東三郎　子役

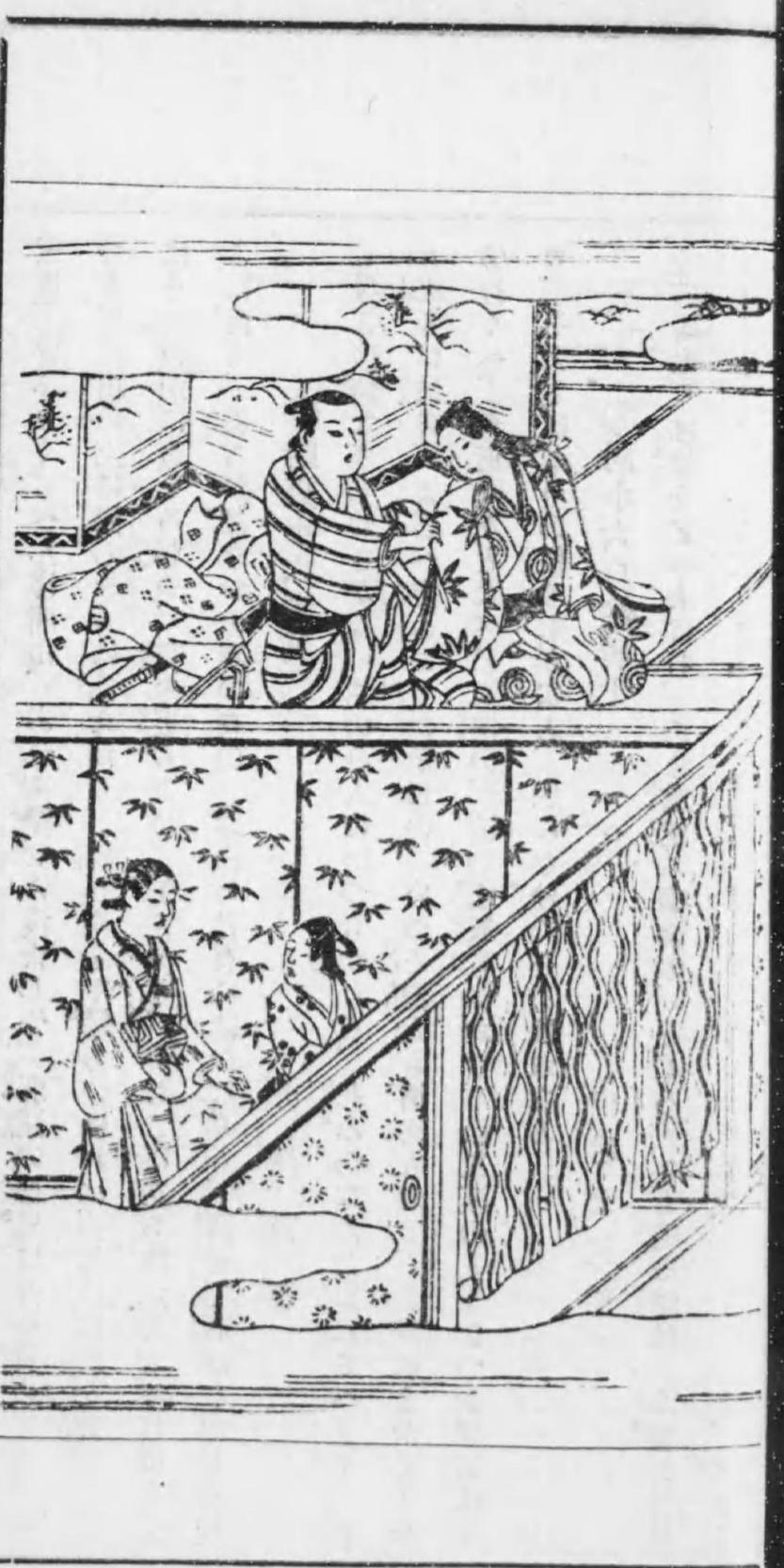
端歌　泣く泪雨とふらなん三瀬川、水まさりなば歸りきて、此有樣を見給へのう、夫婦は目もくれ心きえ、こはそも夢かと立ちよれば、妄執の雲のへだたりて、今まで見えしは姿もなし、是は夢かやうつゝかと、夫婦たがひに手をとりて、わつと泣いては抱きつき、呆れはててぞゐたりける

二上リ　「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無あみだ〳〵、袖の港の波風も、聲さへて南無あみだ、聲のうちよりまほろしに迷ひ出、さも苦しげによろ〳〵と歩みより、あらなさけなや母上さま、のんどが乾きて苦しきに、水をたむけてたび給へ、苦しやとたえ入るやうにぞ泣きゐたり、夫婦は夢の心ちして、げに道理なり、いとほしとうつは物に水を入れ、よらんとすれば忽ちに猛火さかんに燃えあがる、母はあまりの悲しさに、抱きとらんと立ちよれば、不思議や俄に風ふき來り、眼くらんで降りくる雨の音は、そも篠を束ねてさら〳〵〳〵と、雨か涙か陸路にどうど伏しまろび、木神にひどく聲ばかり、あら悲しや堪へがたや、助けてたべのう父母と、叫ぶこゑの聞ゆれば、夫婦はいとど悲しくて、八聲の鳥の音をたて、人間の水は南星は北にたんだくも、あまの海づらよき雲の立ちそふ聲もかすかに聞え、夢かのううつゝか、夢かまほろしの世ぞ哀なる

中村七三郎　岩井左源太

㊥傾城淺間嶽

二上リ　怨みも戀ものこりねと、もしや心の變りやせんと、思ふ疑ひはらさんための誓紙をば、なぜにけぶりとなし給ふ、うらめしや胸のほむらは夜に三度、こちのおもひは日に



三度、けぶりくらべん淺間山、あれ御覽ぜよ淺ましや、邪淫の惡鬼は身を責めて、のうつるぎの山の上に戀しき人は見えたり、嬉しやとて攀ぢのぼれば、思ひは胸を碎く、こはそもいかにおそろしや、花の姿もよわ〳〵〳〵と、かしこに立ちゆかんとすれば、ここに消え、あるか無きかの春の夜の、おぼろ月夜にはかなくも、消えて形はなかりけり

芳澤菖蒲

㊐關東小六青葉

三下リこは情なきしわざかな、さのみ人にはつらかりそ、悲みのなんだ眼にさへぎり、西も東も白波の、よるべ定めぬうたかたの、いつそ泡とも消えもせで、こがれこがるゝ身の行くへ、青葉々々とよべども濱の、濱の松風音ばかり、松風濱の〳〵まつかぜ音ばかり、そよとばかりの便りもがなと、怨みなげくぞあはれなる

中村七三郎

㊇同小六自然居士

二上リよせては岸をどうとは打、あま雲迷ふ鳴神の、とどろ〳〵と鳴る時は、小笹の竹のさゝらをすり、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらり〳〵ざつと、吹きくる風は戀風か、あだし野の草葉における露の身なれど、身なれど、是も、これも假なる世の勤め、とかく世の中につらいものはなに〳〵、忍ぶ妻戸に、妻戸に忍ぶ、忍ぶ妻戸に鐘のこゑよんの

禪僧の戀するはまづ文をやりて見て、やりかけ〳〵やりて見て、きたろにやだいてもねしよねもし、こずばあはせの片褄片袖を打敷いて、此怨みねにもねしよね、波のたちるも何故ぞ、假なる宿に心とめずば浮世もあらじ、別路もあらし吹く花よ紅葉よ月雪のふる事もあらよしなや、假の浮世に

中村七三郎
山本歌門

㊈男道成寺蚊屋之段

二上リ君こふる泪をうくる盃に、思ひ切る瀬と切らぬ瀬の、中に流るゝ妹背川、思ひこがるゝ短夜は、とても寢られぬうき枕、蚊屋のひとへの薄月もるゝ〳〵、洩れてさびしき夜すがら、共になかるゝほとゝぎす、包みかねてはくい〳〵と、くひなの鳥の物おもふ、今宵ばかりはうす情、さのみつらくはのたまひそ、いつの月日に見そめてさても、思ひ切

しんく―眞紅

られぬ身ぞつらや、心からなる我涙、とは思へどもうらめしや、血筋はしんくの網をはり、戀を結ぶの神心、わが身の戀はいかでかは、にくしと思ひ給ふらん、あら怨めしや其人の、思ひ亂るゝ新枕、誰かとくべき常陸帶、思ふもつらしねたましと、蚊帳のうちへ入りぬれば、こは悲しやとはしり出、わな〳〵ふるうておはします、のう情を知らぬ姫君や、たとひ何くへ逃げ給ふとも、此戀あだになすべきか、思ひ知らせん腹立ちやと、蚊帳の外をくる〳〵〳〵くるり〳〵くるり〳〵と、苦しげにつく息は猛火と成て此身をこがす、あゝ曲もなき御姿と、蚊帳につゝみしつかといだき、虛空にむかつてつく息は、鬼ともなれ蛇ともなれ、我ながら我姿、人目はづかし淺ましと、思へど切られぬ輪廻のきづな、あはれにも又おそろしや

住吉の云々―詞花「君が代の久しかるべき例にや神もうるはん住吉の松」

㊐行平道行

中村七三郎

本國子げにいく秋をふべき御代なれ、住吉のかねてうゑおく松の千とせはつきまじ、時しも秋の夕まぐれ、里の砧に月さえて、千々の草葉になく蟲の、聲もすゞしき鈴蟲や、君をこうろぎ轡蟲、忍ぶ夜さむは松蟲も、荻が上葉にねもしなん、猶ゆくさきは姫小松、浪華の蘆に初鴈の、おのが友よぶ聲そへて、詠めつきせぬ道すがら、身にしむ風に空はれて、いくち初茸うらわかき、すゝきにつなぐ賤わらは、磯のみるめもはづかしと、思ひつゞけて行くほどに、松の木蔭に物とはん

非想非々想天―三界の最高世界にて、有頂天に同じ

㊐行平地獄物語

中村七三郎

本國子語るに罪も消えぬべし、語るにつけて恐しや、苛責のせめも音たかく、ふりあぐる鐵杖は、天地もひゞくばかりなり、罪をあらはす淨玻璃の鏡に惡をうつせば、八萬奈落あきらかに、天をうつせば非想非々想天まで隈なく見えたり、扨又大地をかゞみれば、まづは地獄道罪をあらはす罪人の苛責、打つや鐵杖の數々ことゞく見えたり、こはそもいかにと立ちされば、紅蓮大紅蓮の氷にとぢられて、あたりを見れば猛火大地にみちく〳〵たり、無間地獄の苦みは、ねつく〳〵たる炎の中へ、まつさかさまに落つる事みつばのそや、下より猛火ふき上る、とがはうへより落つる所をさつく〳〵と吹きあげて、際な

く苦患をうくるなり、阿毘大地獄の苦みは、鐵石をたつ事一由旬、つるぎをひつしと植ゑならべ、罪人を追ひまはし岩石せなに結ひつけられて、峯よりどうどつきおとさるれば、骨は微塵にくだかれて、風に木の葉のごとくなり、助け給へや人々よ、懺悔に罪も消えうせて、顧ひのまゝにやすゝと、ぐせいの舟の川岸に、到りいたらせたび給へとて、泪ぐみてぞ語りける

㊀㊂松茸狩

中村七三郎

本調子

稲舟のおすに押されぬ梶まくら、ねもせで長き夜のつらさ、語りなぐさむ片糸の、折敷御座のかたゝに、ねられねばこそ夢もみず、さそはれ出て道のべの、千々の草葉に鳴く蟲も、思ひみだれて糸すゝき、せめてそれかと我とふものは、荻の上葉にみだれ〳〵て風そよぐ、餘所にもおくや袖の露、どれ〳〵月のうつろふ影見えて、殘る松さへ嵐につれて、いとど心はのうさんさ物わびし、道しるべせよしのぶ草、しげき思ひは秋霧の、おだ名たつともいとはじな、宵よりねやに引きこもり、待てど暮らせど其人の、そよとばかりの音信も、はや九つの鐘がなる、扨も思はぬさはりあり、今宵のあふせはやれさて叶はぬな、よし〳〵かこつもやほらしや、いつそ夢こそましならめ、枕一つを樂みて、戀し床しきねやのうち

㊀㊃稲荷塚四ッ門

中村七三郎

二上リ

翠帳紅閨に枕ならぶる床の内、馴れしねまきの夜すがらも、四つもんの跡夢もなし、さるにてもわがつまの、秋よりさきに必ずと、あだし言葉の人心、そなたの空よとながむれど、それぞと問ひし人もなし、夏もはやすぎまどの、秋風ひやゝかに吹きおちて、よしや思へばこれとても、逢ふは別れなるべし、世をも人をも怨むまじ、たゞ身のほどを思ひつゞけて、我ひとりまろねの床こそさびしけれ

㊀㊄稲荷塚狐會

中村七三郎

二上リ

亂菊や小菊白菊小手鞠や寒菊、君をまつ夜はくる〳〵と車菊、よしやなげけど慕へども、秋の朝空霧とぢて、露なき草にこがくれの、杖をたのみに休らへば、身にし

ささあいー幼兒

む風に裾も袂もふは〳〵〳〵と、吹きあげて我とは見えぬ水かゞみ、うつす姿は月影の、曇りみ晴れみ行く雲の、空さだめなき山々の、木々の梢に鳴く鳥は、山がらこがら〳〵四十から、ひわや鶯鳥めうない雀、鳴子ひく音におどろかされて、數の小鳥がむら立ちさわぐ、にくやにくや小鳥が我をおどすはつらにくや、えいこのえいこのえいこのえいこの〳〵えいこのえ、簑とたのむよいや又笠と、笠とたのむは小池のはすの葉、かくは草かりたすく男はよいやさ、えいこの〳〵〳〵〳〵〳〵えいこのえ、木の葉の雫はら〳〵はら、風にもまれて秋の小蝶のたはぶれて、峯の小松にしなだれかゝる蔦かづら、よれつもつれつ、離れがたなき我が思ひ

傾城花筏

一上り本調子

葉山岡右衛門
蔦山四郎兵衛

語るにつけて悲しきは、此をさあいが身のうへなり、父は播磨のなにがしとて、人に知られしものゝふに、母は室津の上臈のはて、かりに難波に住居して、此子をまうけ給ひしに、過ぎつる秋の末つかた、我に此子をあづけおく、いたはしやをさあいは、父

よ母よと戀ひこがれ、晝はひめもす夜はまた、夜明の鳥ともろともに、まどろみもせず泣きあかす、目もくれ心きえ〳〵と、身も世もあらぬ不便さに、母のきてうに渡さんと、さてこそ室津へまゐる也

芳澤あやめ　今村粂之介

㊇㊅ 彌陀たのむ

三下リ　彌陀たのむ人は雨夜の月なれや、雲はれねどと西へ行く、なまみだ〳〵、いとしわが子もせめてさて、彌陀の御國へゆくなどと、便りのあらばいかばかり、嬉しかるべき我が心、そなたいとしけりや、のうやれわが子もいとし、それなぜに、いつそ子もなけりや、なけりやこそ思ひもないよさ、よしやよしなや、迷うたりのうさて、なまみだ〳〵〳〵〳〵、鐘のひゞきに夜はなん時ぞ、八つでもあろかいや、のうあれ〳〵夜があけるやら、はや晨朝の回向の鐘のあら有がたや、いざや我子の菩提のために、なまみだ〳〵宵にや和讃夜中にや法華經、南無地藏大菩薩〳〵、心が亂れての、しどろんもどろん〳〵、そなたへは行かぬか、こなたへは行かぬかと、そばなる人に問へど〳〵〳〵答へぬふる塚の、夢かうつゝかまほろしか、我子戀しや

岩井左源太　上村吉三郎

㊇㊆ 傾城佛の原

二上リ　いつの間にかは秋風の、吹くや越路の山こえて、彼の三國のわけある里へ惡性通ひのつらにくや、ひさげの水は湯となれど、まだ覺めやらぬ我思ひ、つらしねたまし、あら腹立やと、すがりついては泣くばかり、おれとそなたはなん〳〵〳〵七つ八つ十で殿御を見そめてほれて、人こそ知らね振分髪の、そなたならでは誰にか見せん、此黑髪を今はあだなる亂髪、みだれ心かあゝ〳〵〳〵〳〵あひた見たさに來たぞ、やれつらや〳〵と思ひはすれど、まだ棄てられぬ、憎さ餘りていとしさまさる、扨も命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、死んで又きて、その〳〵〳〵そのさきの世で思ひ知らしよぞ、思ひしれ、袖の港の戀の淵、わたりくらべん涙川、戀の一念盃の、かげくらきよに嗔恚の毒蛇、くる〳〵〳〵〳〵〳〵くるり〳〵〳〵廓通ひもふつゝりと思ひきれ〳〵ねたましや、あら腹だちやと立たるは、あはれにも又おそろしや

㊃八 女仙人

多門庄左衛門
山出來島小三郎
本歌門

二上リそちが思へばこちも思ふよ、いづれ思ひは變りはせねど、いつもながらの御げんも絶えて、今は中々逢ふ事ならぬ、なぜな、いつはりがちなる心と知らで、つらきながらも籬に立てば、つての文さへやれさて叶はぬ浮世ぢやえ、よし〳〵かこつもやぼらしや、いつそ死んだがましならめ、扨は叶はぬ浮世やと、思ひつめたる其氣色、身につまされていとしさまさる、たとひ萬里を隔つとまよよ、かはる心が〳〵なけれども、あひとて見たうて語りたうて來たおれに、なぜにそなたは顏ふりやる、さても〳〵そなたはけに戀のかたきよと、怨めしさうに打ちながめ、すがりついては泣くばかり、一樹の蔭の一やどり〻、又は一河の流れの身、枕ならべし睦言も、假の浮世のならひぞや、あはれはかなきみづからは、たま〳〵受けがたき人身の受けたれど、ためしすくなき川竹の、流れの身となる悲しさよ、さきの世の報いまで思ひやられて悲しやな、少しあはれとおぼしめし、機嫌なほしてのうこれ〳〵ちと笑ひ顏が見とござる、戀も口說もひとさかり、假のうき世の夢なれや、經文まじりになまふだなも〳〵なまふだ、語るさもなきねやのうち、はやきぬ〻〳〵に引き別れ、首尾さへあらば重ねてと、さらば〳〵〳〵〳〵やと、裾や袂にとりつけば、戀しき人の面影は、見えつかくれつまぼろしか、消えてあとなき夕間暮

○謠曲鐵輪の文に本づく

しもつとーしもとの亂

㊃九 女仙人怨靈

山下又四郎

三下リそれ三界は夢なれや、みつの車にのりの道、火宅の門をや出でぬらん、月は東の山よりいでて、西の山の端にかくれつゝ、世上の無常はかくのごとし、何の上にも報いあり、浮む事なきみづからは、邪淫の惡鬼と身は成て、えい〳〵さつても〳〵未來えい〳〵くる〳〵〳〵といやつきそひて、我に憂かりし其人の、生きて此世にましまさば、水くらき澤邊の螢のかげよりも、我が思ひも胸の火は火燄となつて此身をやく、無念や腹立やと、しもつと振りあげおひめぐり、髮をくる〳〵〳〵〳〵〳〵と手にからまいて、打つやうつ宇津の山邊の夢の世に、めぐりくる〳〵因果は今ぞ思ひしらずや思ひしれと、と

びあがりてはまろびふし、雲にうちのり波を蹴たて〳〵飛行するこそすさまじけれ本調子
恐しやみちくらに三十番神まし〳〵て、罔兩鬼神はけがらはし、出でよ〳〵と責めたま
ふ、つらにくやねたましや、思ふ人をばいたづらにとらで、あまさへ神々のせめをかう
むる惡鬼の通力、力もたよ〳〵よろ〳〵〳〵と足弱車のめぐり〳〵て又とるべしと、呼
ばはる聲もかすかに聞え〳〵松風ばかりや殘るらん

みちくちーみてぐちの誤

くどりどーくどれどの誤か

㊂廿四孝狐會

山下又四郎

三下リ見そめまいもの、うか〳〵〳〵とうかれ心かうば玉の、よるならで晝はこがるゝわが
思ひ、ねてもさめても忘れもやらで音をぞなく〳〵、君を思へばなんな〳〵しのすゝき
や、尾花の中をくどり〳〵くどつた、なんぼくどりにくい、くどり〳〵〳〵どやるまい
ぞ〳〵、どつこいそつこいやるまいぞ、さまを見かけてはしりこきり〳〵〳〵ここきり
きり〳〵や、月の夜もゆく闇もゆく、雨か霰か露か木の葉か、はらり〳〵〳〵しどろも
どろとあの山越えて此山こえて、けさのきぬ〴〵あらはれさうな〳〵、いのよもどろに我
ふる塚へかへらん、いさみ〳〵歸らん、おれが思ひはつゝむに餘る〳〵、もぢのふくさ
に紅梅小袖、つゝめど〳〵なにと包めど色にでて、人目はづかしやるせなや

大和屋甚兵衛
芳澤あやめ

㊃傾城善の綱

二上リ筒井筒〳〵の水は濁らねど、かはせし人はおほろ月、入るかたもなき我が思ひ、只
かはらじと一筋に、ねてもさめてもいとしさの、餘りてもれて憎うなる、墨と硯はこい
中なれど、人が水さしや薄くなる、しんきえしんき〳〵、水さしや人が〳〵水さしや薄
くなる、しんきえ、其一念のつきそひて、影にたゝずみあゝ日なたに、おほいくる〳〵く
る〳〵〳〵〳〵と苦しき胸のほむらの火、湧きくる水にのう消えもせず、かすかにへだ
つ淺ましや、少しはそれと思ひしれ、足元はよろ〳〵よろ〳〵〳〵と、弱りはてたる釣
瓶のしづく、落ちて形はなかりけり

㊄文覺上人

竹島幸左衛門

本調子そのとき文覺膝おし立て、はづかしながらそれがしは、源氏譜代の侍なり、先年義

朝野間の浦にて生害あり、其首やがて六波羅の川原にこそはかけられしを、愚僧ひそかに盗みとり、菩提の道に修行者の首にかけたる頭陀袋、あけぬくれぬとせし程に、はや三歳の光陰は矢よりも早きものゝふの守りの神ともなし給へと、しやれたるかうべを取りいだし、助殿にたてまつれば、扨は疑ひあらがねの、つちにかばねは朽つれども、名は末代にありあけの、月の都に攻めのぼり、たえて久しき白旗を、み山おろしに吹きなびかせ、おごる平家を平げんと、頼朝今は勇まれしが、いや待てしばし難儀あり、院宣りやうしなくしては、諸軍の催促あるべからずと、助殿あぐみはて給ひ、我に頼むと有りし時、それこそ易き事どもと、即時に津の國經の島牢の御所にかけつけて、みつよし卿を頼みつゝ、院宣りやうしを請ひうけて、又たちかへる浦波の〳〵磯をつたひ山をこえ、蛭が小島になりしかば、院宣の取りいだし、兵衛殿にいたどかせ、それより義兵をあげ給ひ、源氏の御代となす事も、ひとへに愚僧が恩ならずや、せめて廿日は待ち給へ、鎌倉にはせくだり、此一そうをせんまでは、必ず〳〵頼むによな、北條殿といひすてゝ、

ぜんぼう―懺法

衣の裾のたかからげ、やぶれ笠腰につけ、ちよこ〳〵はしりて出られしが、又立ちかへり、文覺は北條殿に打ちむかひ、これにも承引なきならば、我生きながら魔障と成て、高野こがは金峯山白山立山富士のだけ、此山々の天狗ども、さつ〳〵と招きよせ、車軸の雨に劍をまぜ、ひさうを非々想天までたゝきあげ、海にうかまば六代七代八大龍王、山神水神江河のうろくづ、八方よりも祟をなさせ、例の天狗の空礫、一時が間に打ちひしぎ、みかたのせいうん日輪月輪じやうふを吹きやらはげ〳〵暫時に本望とげん事、なんの子細のあるべきと、をんどりあがりはねあがり、勇みに勇んで申せしは、たのもしとも中々申すばかりはなかりける

㊂とがし城

竹島幸左衛門
同　幸重郎

本調子さる間武藏坊熊井太郎只一すぢに思ひ切り、さしも大勢まちかけし富樫が城へ入たるは、人に變りておほえたり、山伏の法なればれいしぜんほうを讀むべきに、武藏何とか思ひけん、高念佛を唱へつゝ、大門よりつつと入る、富樫が城の體を見るに、おもて

術と―術をの術か

の櫓十三ケ所、脇の櫓九所、二重三重櫓を上げ、北のおもてを見てあれば、鞍おき馬の數しらず、それぞといはど引き出さんと、用心きびしくみえにけり、扨又うしろの要害は、おもては山高うして一片の雲のごとし、谷深うして飛ぶ鳥だにもかけりがたし、山峯一丈さがつて、空壕ほつてうむ〳〵つどらをりなる難所なる、東の方のをさきには、川を要害とし、青黛がすみ滑かに足そばだつに便なし、此關所をこえん事、韓信が術とまなび、富婁那の辯にてたばかるとも、さて中々思ひもよるまじき、されども武藏が智慧のほど百千萬に碎きなば、やはか通らでおくべきか、それにも運命つき弓の、たくみし智略もあらはれて、さしもの大勢前後さうより取り卷かば、かけろふ稲妻水の月、むでにはいかで取らるべき、かしこにおつふせひつ組んでうつ取るべし、或はうづまき千騎が中かけ破りさし通し、十方無盡のすて刀、さつとひどいては互に言葉をかけかはし、是ぞ軍の花ざかり、吉野龍田の花もみぢ、嵐につるゝ青侍、にぐる奴原おつさますて切り、むかうてかゝるは唐竹わり、らんぴらんぐわい虎ばしり、まくのそうだてさうのこて、と

らんぴらんぐわい―虎ばしり

かどう―家業か

んほうがへしに水車、磯打つ波のまくり切り、つらぬきねぢ首人つぶて、死人の山をつかん事、只とる山のほとゝぎすと、勇みに勇みし有樣は、めいぼく太子はくた王、我朝にては將門純友入鹿の荒れしもかくやらんと、恐れぬものこそなかりけり

㊃山居之僧

荒木與次兵衛

謡歌あまりに山を遠く來て雲又我里を埋む、皆これ人間妄執の雲霧のひきは返さじ梓弓、やすからぬ身の假の世を、思ひすつるに身こそやすけれ、我はなまじひに弓馬の家に生れきて、かごうを捨てゝうもんに入る月を東に里を見て、けはしき山路なければ、岩根にとりつき〳〵〳〵苦路をふんで薪をこり、水音すごく底ふかく、谷にさがり水むすび、その雪山の昔を問へば、唯一心のおきどころ、背かばまさに三惡道はのがるまじ、多き地獄の其中に無間地獄の苦みは、ねんねつたる炎の中に、まつさかさまに落つる事は、三つはのそや下より猛火吹きあぐる、たとへば數千丈の谷よりもまくりたて〳〵、吹きまはす嵐にひとしく、とがはうへより落つれば、さあ〳〵さつ〳〵と吹きあげて、ひま

なく苦患をうくる故、無間地獄と名づけたり、あら恐しや〳〵、阿毘大地獄の苦みは鐵石をたつ事一由旬四方にして劍をひつしと並べ、科ある者を追ひのぼし、苛責する罪人科を歎くといへども、叶はぬは地獄の習ひにて、岩石せなに結ひつけられ、劍の峯よりつきおとされ、骨は微塵にくだかれて、なげき悲む淺ましや、苦樂の境は說くも說かれず言ふも言はれず、風ふけば吹け我が庵の佛の照らすたえぬともしび

竹島幸十郎

名馬揃

本調子あつぱれ御馬ざうらふや、よき馬のきつそうや、をつさまむかうよこはたばり、しあひ骨ぶしよめのふし、おょ作りつけたる如くなり、尾は千反の布をはへて、百丈の瀧の落つるに異ならず、右の眼左の眼、振分髪にちらり〳〵ちら〳〵ちらと「鞭はなに〳〵紫竹寒竹唐竹若竹、本から末から根から葉から、竹のきり〳〵なきり〳〵きんきりよの、やれ溜り水、清まず濁らず出ず入らす、人の心もそれによそへて、何も柳にさらり〳〵ともやらせて、かるいがよござんす、思ひはづふりづふ〳〵〳〵とも、しづんだ

きつそう—吉相
しあひ—因付
きりよの云々—きりよは切節也屢長頃の小唄、「竹のきりよの溜り水清まず濁らず出ず入らず」を用ふ

さ何がさ

柴刈風流

上村今吉彌
袖島市彌

本調子山がつの薪を折て、かず〳〵の思ふまゝにはいはれぬや、ことさら風を厭ふなる柴に櫻を折りそへて、柴かる女のいやしき身にも〳〵、沈や麝香はもたねども、匂うて來るはたき物、ちやうりやうふりやう、ひやらにひやらろ、ひやらろにるろう、るりちやるろ、戀といへるくせもの〳〵かんな、身はやつれそろ、にくや〳〵つらや怨めしや、月には雲に花には嵐、嵐つれなやよぎて吹け、忍ぶ夜のあらし、さても〳〵いや〳〵山田におりしそうとめの、しかも近江のなりよい笠を、しやんときないて拍子を揃へ三下り「田うゑるは面白いが、ぐる〳〵まはりがうかないさあうかない、十七八は寢ごいもの、梅の木のさがりの枝を枕におよりたか、およりまうせさあいよ〳〵〳〵え、此へ〳〵しよんぼり〳〵と植ゑた袖、よその袂は田うゑにぬるゝ、たれゆゑぬるゝわが袂、打ちながめ、あゝ賤の女の重荷の柴も苦にやならぬ、歩むほどなき道すがら、とある所に著き

いはれぬ—結はれぬ、言はれぬ
そうとめ—早乙女
きないて—著なして

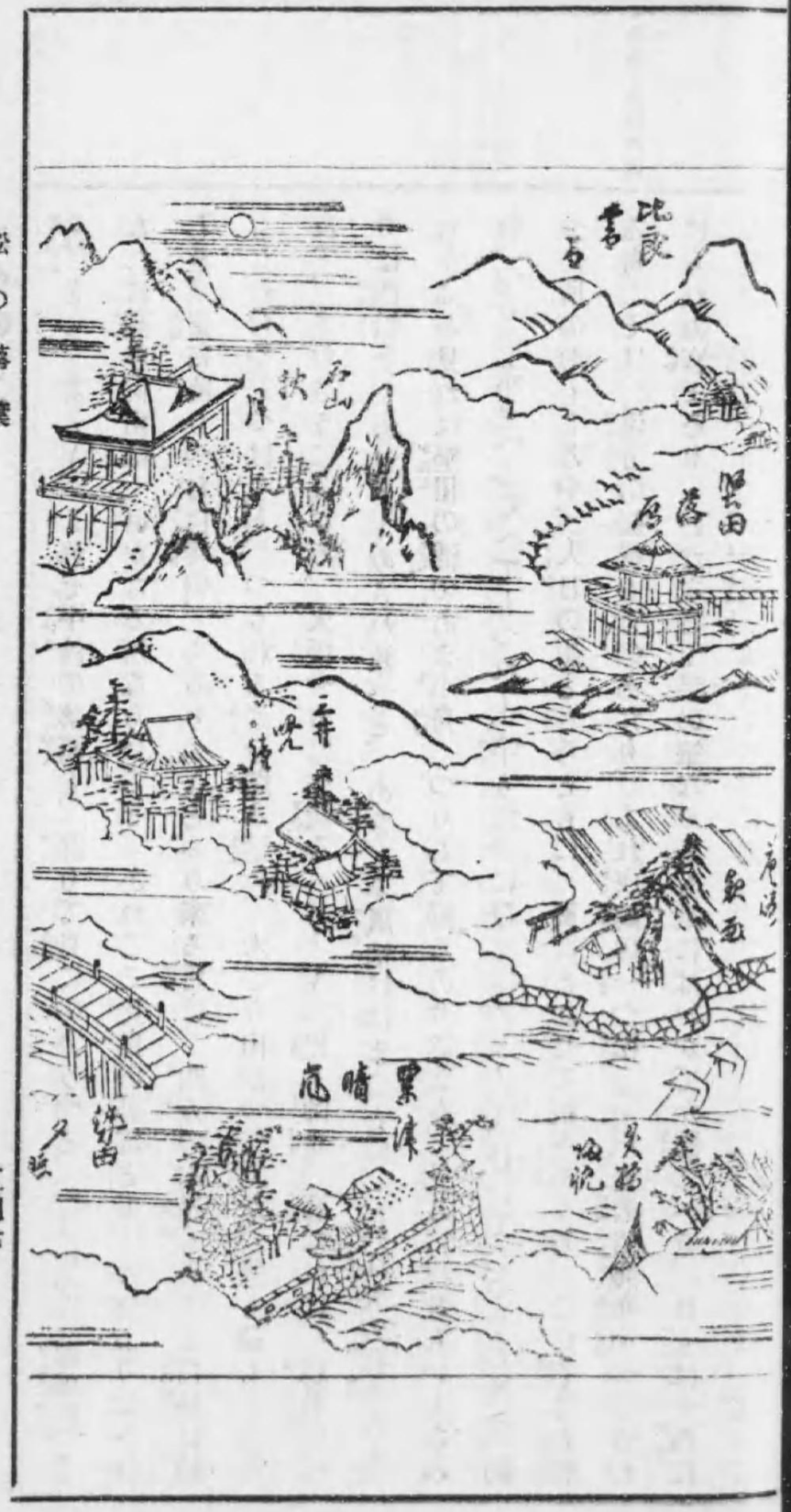
せきせよ―夕照か

にけり

㊐七 近江八景

水木辰之助

本調子 舟をだしやらば夜深にだしやれ、えい〳〵帆影見ゆればなつかしや、戀にはのんえい、それわか枝もいよえい、えいや〳〵と入るや矢走のわたし舟、波はへいたを叩きあげ、たよく白波あら男波、しづかに漕げやそろ〳〵押せよ、いそいで漕げやさつ〳〵と押せよ、浮きぬ沈みぬ行く舟の、汀をみれば瀬田のはし、漁村のせきせよまのあたり、ゆきよも絶えぬ旅人の、上れば下るあひの土山雨がふる、うたふ小歌のから尻に、乘り打ちさせぬ關所也、足もとまらず行く舟の、次第々々にそのさきは、いかなる所と尋ぬれば、あれは堅田の落雁ぞや、いざや名所を語るべし、おりてしばし濱あそび、あがらせ給へ人々よ、入江々々の蘆の葉に、そより〳〵と吹き來る風は、夏のしるべか涼しさよ三下リ「磯におり居る雁金の、おのが友よびあそぶにぞ、ねらひより追うてまはれば、はつと立つや、ひら〳〵〳〵とむれゐる雲に竿に成て通る、あとなが先へ先ながあとなら、



笄とらしよ〳〵、これぞ平沙の落鴈と、語りて舟にのりうつる、のういかに船頭殿、こなたに高き御山は、いかなる所なりけるぞ、あれこそ比良の暮雪とて、これよりは冬けしき、峯に降りつむ白雪の、ちらり〳〵とふり來る雪に、四方のな梢ものうよ白妙に枝もたわむやしつはりと、つもれる道を踏み迷ふ、木こり山がつ柴刈が、笠も薪もうづもれて、さむさうにござる、火桶やりたや炭そへて〳〵、比も師走の暮なれば、穂長ゆづりは門松を、めせ〳〵めされ候へと、あきなふ風情にまことに、これ江天の暮雪なり、むかふを見れば堅田の浦のあま小舟、つりして歸るありさまを、見るに我身もいとなみの、つりの糸さへしなへてもつれて、竿もたずにひくは〳〵〳〵、ひいてしやくる所を、釣つた所のおもしろや、入日の影ともろともに、風にまかせて帆をあぐる、この召された舟こそは、遠方の歸帆もまのあたり、あれ唐崎の一つ松（本調子「老若貴賤布引のひきわけられぬ宮まゐり、いかなる上手の筆なりとも是にはいかでか勝るべき、日もはや西に入相の、提灯とぼす小夜嵐、ふきくる雲に雨おこり、村雨しきりに降りくれば、濡れに

遠方―遠浦の誤か

ぬれたるとりなりも、しつぽりしつたりわにの岬に舟とめて、苫もる雫もろともに、涙であかす舟のうち、これや誠に瀟湘の夜の雨ともいひつべし、やう〳〵はれる雲ぎれに、苫おしのけて見あぐれば、あれ石山の秋の月、湖水にうつりあきらけき、須磨も明石もよそならず、これや誠に洞庭の秋の月、こゝにうつしてみづうみの、更くるも知らず眺めいる、ふけゆく鐘の音きけば、飽かぬ別れの鳥は物かは、鳥もなき鐘も聞ゆる三井寺の、時をたがへずつく數は、はやあけ六つの明けわたる、東近江や西近江、大津の町もとく起きて、おのがさま〳〵手わざする、是ぞ山市の晴嵐と、夢のやうなるそのうちに、四季折々のたはむれを、今目のまへに見する事、これ龍神のめぐみなり

飽かぬ別れ云々―新古今小侍從の歌、上句「待宵にふけゆく鐘の聲きけば」

㊋狂亂

本調子きちがひに物問はう〳〵、薄化粧にやなぎがほ、髪はおどろに亂したれども、花紫のゆかり有、ふぜい床しき物狂ひ、いかなる人にてましますぞ、問うて何しよ、おとやつてなにしよ、われは親より子ゆゑに迷ふ、まだ父しらぬ撫子の、花は根にかへる〳〵

萩野澤之丞
四國兵五郎

きいのぢ―紀伊の路に來をかく

かりがね、それは越路我は又あづまから出て、こがれ〳〵こがるゝ子ゆゑに狂ふがをかしいか、なんのをかしかろ、をかしゆはないが、我も御身にあひたうて見たうて、そつく〳〵と尋ねし國はどこ〳〵、せんようだうに山陽道、音戸の瀬戸に播磨灘、舟路はるかにきいのぢや、玉津島吹上かいつくばうて、ひつつくばうて、尋ね〳〵あるいた、我らも狂ひめぐつた、いとし我子の目につくばねの、峯としらねど筑紫のはて〳〵はてまで、をどりいではしり出で、くにぐ〳〵さとぐ〳〵伊勢の津尾張の津、近江に大津草津今津海津鹽津、とつ〳〵〳〵攝津の國には大物の、尼が崎からあまになれとて文よこいた、あなたこなたと狂ひめぐりて、人目もしらで尋ぬる我を、なんだろつよの、ひこたろつよの、そのよな事きゝや、きん〳〵氣がわるい、りんとはねられ、しやんとゆてたもれ、あか月の烏はん鳴かいで、たるきのはなをしつかりてう、えいやつとふまいた、なごりなさけなの世の中や

大和屋甚兵衛　浅尾重次郎　信濃屋甚兵衛　吉十郎

㊀三つの車

のり―乘、法

二上り三つの車にのりの道、火宅の門をやいでぬらん、夢かうつゝかおぼろ夜の、月毛の駒に片手綱、ひきとどむれば春の雪、とけて亂れし我思ひ、あまりて憎い此人を、たれに添はせんねたましや、袖にながるゝ血の涙、色と情のふた思ひ、深き心は常々に、語りあかせし戀草の、もえ出でそめし面影に、すがりつけば八重櫻、風にみだれし亂髪、ゆひがひなくも殺されて、身はあだし野の霜露と、消えにし事のうらめしと、泣くより外の事ぞなき、咲いた櫻になぜ駒つなぐよの、えいさ駒がいさめば花がちる、いさめば駒がよの、えいさ駒がいさめば花がちる、あゝ淺ましや、堪へがたや、煩惱邪淫の身のくるしみは、鐵石たつ事一由旬、あだと情の心の鬼、のぼれと責むる劍の山、くるり〳〵くる〳〵〳〵と追ひ立てらるれば、岩根にとりつき〳〵のぼりて見れば、下より猛火ふき上る、こは情なや悲しやな、助け給へと夕ぐれの、月は霞にかきくもり、聲ばかりして失せにけり

大和屋甚兵衛　芳澤あやめ

㊁時雨の松

二上リおなじ浮世にかけて頼まん常陸帶、とりかはしたる二世の帶、三重にまはるも戀、身はかゆろふの有るか無きかに捨てられて、泪のしぐれ松がえに、見えつ隱れつ戀の關、まよひ〳〵あるくもたれゆゑぞ、逢はんと思ふわが男、人に逢はれてはづかしや、戀に痩せたる二重の帶三重まはる、ふたへの帶が二重の帶が三重まはる、さりとはかはす誓紙の血汐の文字、猛火と成て思ひのきづな切ても切れず、離れもやらぬ我思ひ、しめつゆるめつ、ゆるめつしめつ、ふたり寢の夢ばかりなる手枕に、ふして形はなかりけり

㊃思ひの繪姿

賀茂川下流　高山彦三郎

三下リ世の中の人の心は、うつろひ易き物としれ、君と我とが長枕、夜毎にかはす睦言の、人こそ知らね神かけて、あしき心はあゝしんき、無いにてんと怨めしや、あゝまゝならぬ君　二上リ「さまはな久しやいつ逢うたまゝぞ、おれもな忘れた逢うたよさを忘れた、おれも〳〵な忘れた、逢うたよさを、思ひいづればなつかしや、まだはだ馴れし移香の、ふたり寢顔のつや〳〵〳〵と、なでしこ今は答へかね、君の御えりしかと取り、これのう怨めしや、われに死ねとの御事か、死ねなら〳〵いつそ死ねなら死にましよか、あなたへ靡けばこなたの怨み、思ひと戀とくるまの〳〵、兩の輪になる、くる〳〵〳〵ねもせで迷うた、やんれありつる姿は繪にかける、我はうたゝ寢うつゝたしよの

うつゝたしよの
―うつゝなしよ
の衍なるべし

㊃ふみこと葉

高島尾上

二上リ一ふでと書きそむるはなつかしさのまゝ、とはせまるらせ候べく候、わかれより程あらず候へど、思ひねにするひとり寢は、心も澄みて目もさえて、たばこ戀草伽となるねやの内、かはる色なく御くらし、やがてあをぞや語ろぞや、筆にまかせぬ物思ひ、只あひまして〳〵、のこる言の葉かへすがき

㊃定家怨靈

高島尾上　竹中藤三

三下リ淺ましや涙は生死の海の波、死にくるしみをうけ重ね、くらやみより暗きに赴く恩愛の、うすき契の袂には、涙をつゝむ春雨に、つほめる花の水ばなれ、離れもやらぬ愛念の、添寢の床に夢もなく、ふたりが中の泪川、つながぬ舟はとまれども、誰かとどまる

人もないぞよ、夢の世に假寢の母が手枕よ、乳房をしぼりひとりかこちし有樣は、見るに袂も濡れぬべし、又起きあがりて走りめぐりてつまに取りつき、のう悲しや、もはや別れの、あれ堪へがたや、刄の罪に修羅の太鼓さらばといへば、しばしとどむる袖ふりはなせば、目にこそ見えぬ踏む足元は、猛火のけむり、こは悲しやと、又ゆくさきも炎のけぶりにむせんで恐しや、われは邪淫の流れのうき身、汲みながす酒は三途の大河となり、起請神罰冥罰あたつて此身をくだく、とむらひ給へお僧さま

㊃地搗踊　山下座

二上リやれおひかけはやさぬか、さア〳〵さおひかけ中の綱、しめてみよ、よいやさ、やれ我が戀は〳〵細谷川の丸木ばし、ふみかへされては、ぬるんるゝ袖かや、おひかけ中の綱、しめてよ、そろうたやれ中の綱はえ、えや〳〵えや〳〵、このさんさのえ

「鳥に恨みは逢ふ夜の時よ、うたへ今宵のひとり寢に、さんよえ〳〵

「あのや小山に戀風が吹くとの、身をも投げかけゆすらば落ちよかの、さてもつれなのあの君や、ふるやこづまはかはいよえ、えいや〳〵えいやえ、このやこのさんさのえ

「なには入江のよね舟を見たか、えいとんなえいえいえ、えいとんな、あゝ播磨の米が千石、淡路の米が千石萬石、舟方が納めた、月の夜ばしりにや、しもの〳〵下の關の睦言も忘れた、あゝえいとんな、えいえいえい、えいとんな、ひらいてさ、追風でさ、おも梶とりかぢ難波入江のはんじよえ

有馬のふぢ狐會右水木辰之介所作、松の葉に見えたり、此集にのするにおよばず

寶永庚寅七年
九月吉祥日

ゐつゝや庄兵衛　板
書林
万木治兵衛　行

若
み
ど
り

若みどり序

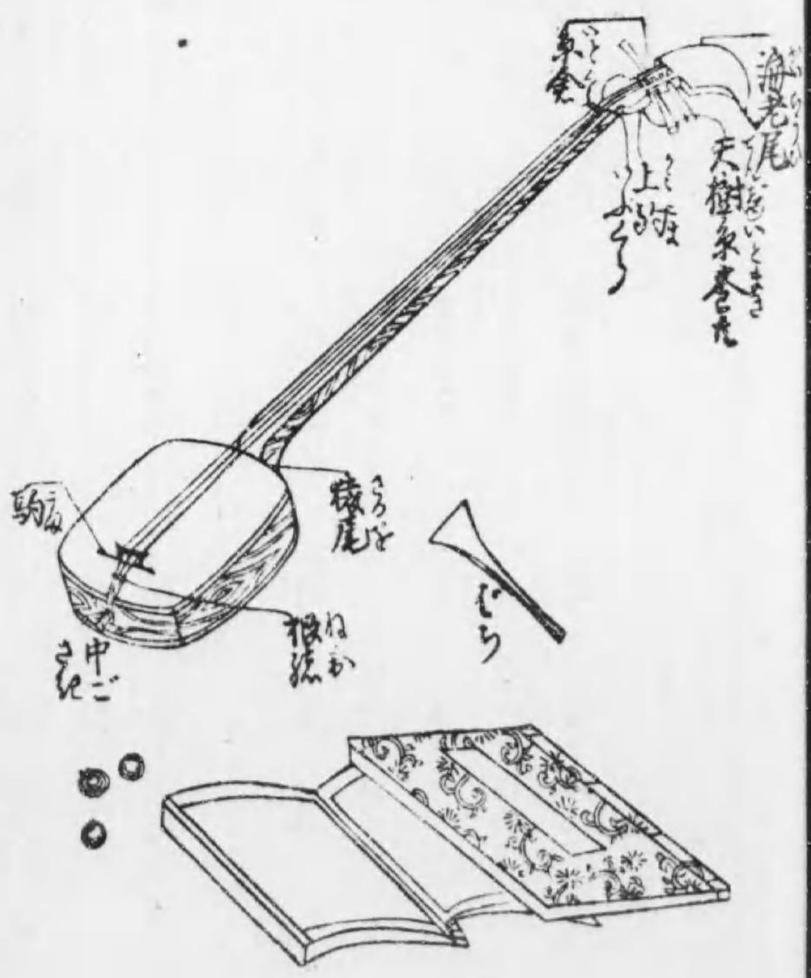
去ぬる比秀松軒の主、此糸筋の術を得られし餘り、道のすきものを招き、本手端手長歌等の證歌を集めて五絨とし、松の葉と題して世に慰み草のたねをまかれしより、此林に遊ぶ人人ことの葉の露の玉を拾ふ翫び草となれり、されどもかの國が所縁残りし歌舞妓臺にかなでぬる種々のうたひものを始め、拍子取をかしきたぐひは、わざともらしぬるを、扇德といふ男、調子合せてかき集め、落葉集と名づけて、櫻にいのちながうす、しかれば此兩部にこそ、品は盡きぬらんとおもふ人もあるべかゝめれ、さはあれど濱の眞砂の數々もれたる名曲端手新曲、かつ又、きのふのむかし、けふの今やう、時めきわたる長歌などいや生ひしげり、根にひかれ、糸による名歌、花の曙月の夕々に積りぬ、靜雲閣のあるじその闕けたるを補ひ廢れたるを興さしめんとて、野川檢校の作に、みづからのをもまじへて又いつ卷となし、若緣と名づく、柾のかづらながく引きつたへて、餘音嫋々と絶えざらましとなり、功なれりといつつべし、余不思議にかの松の葉、落葉より、此若緣の三大部の席に

つらなりあひぬれば、筆を添ふる事になれりけり

寶永三の戌の卯の花月の中の日

愚北條持入道大狂園醉序

三味線之畧



若みどり　第一卷

長歌目錄

一　ことぶき　二　新もしほぐさ　三　さゞれいし
四　ころもづくし　五　はつはる　六　一字のだい
七　清水まうで　八　ありしよ　九　あさぎ
十　うきくさ　十一　山かづら　十二　かきね
十三　うす煙　十四　おもひ川　十五　はなの香
十六　ひなづる　十七　月づくし　十八　もりづくし
十九　はなもり　二十　松浦(まつうら)ぎぬた　廿一　花くどき
廿二　かうづくし　廿三　初あらし　廿四　川づくし
廿五　せきづくし　廿六　はるくさ　廿七　ねやの月

廿八　きぶね　廿九　みちしば　三十　つくもがみ
卅一　三瀬川　卅二　袖のつゆ　卅三　わかれぢ
卅四　梅あした　卅五　まつがえ　卅六　よ　町
卅七　そでのか　卅八　戀のきやうか　卅九　そめ川
四十　わかのうら　四十一　かせんがひ　四十二　島づくし
四十三　ちらし　四十四　つゝじづくし　四十五　みだれ草
四十六　ながき夜　四十七　ねざめ

長歌

㊀ことぶき

はつ春のそらものどかにいづる日の、したつみくにのかど〳〵に、よそほひしるく立ちならぶ松と竹との色いつまでも、わかの浦わのかたをなみ、あしべをわたるひなづるの、ちとせのえにしを結ぶなる、にひさかづきの曲水、君がめぐみのうるほひ深く、けさわけいりし蓬萊の、みねの霞を汲みそめて、つきせぬ御代のかみかぜや、伊勢えびほだはらたちばなの、かをりゆたかに民もなほ、ほながに榮えすみよしの、波もしづかになる枝の、かやゝかちぐりかず〳〵の、いつの世よりかことぶきそめて、春ごとにたえずめでたき屠蘇のさけ、梅の花がき八重がさね、きつれてござれいつもながらの清水まうで、祇園八坂の花の色、これやよしのゝ花よりも紅葉よりも、こひしき人は見たいもの、とがをばわれにおふせて、花のころはござれの、伊勢さんぐ〳〵、息災延命長久とさか

えさかふる千代の春

㊁新もしほぐさ

はる草のやがても萌ゆる春日野に、あさるきぎすも若草の、色香にうつりこひごろも、その袖の香のみち〳〵て、君がそのなのにぎはしき、さくらづくしや梅づくし、つゝじづくしにかうづくし、吹く春風も心して、めでたき花のえんにいま、逢ふてふ松のわかみどり、いく春ごとに祝ひきて、ことぶきうたふ春駒の、よはひ久しきさゞれいし、苔むす野べの末までも、けにあをやかに夏草の、しげみにもるゝこひ草や、うき名ながるゝ川竹の、さゝのをざさ一夜なりとも、うれしき君がたまくらを、待つよひふくるかねのこゑ、みだれ亂るゝくだかけや、はやしのゝめの別れぢに、まだ袖ぬらすあゝの川、あき草におくつゆの玉、つらぬきとめぬたなばたの、わかれの涙いくとしか、つもり〳〵てこひづくし、あだし枕のたはむれも、けふはかはりてそれとなく、狩野にのこる冬草の、さびしきまゝに手を折りて、逢ひみしことをかぞへ歌、かきあつめたるもしほ草、よてふうきねにさよごろも、もしもたよりの夢もやと、まくら樂むねやのうち

呼ばふを―「を」の字無用か

㊂さゞれいし

さゞれ石いはほとなりて、ふた葉の松もおひそひて、千代のはじめは千代のはじめはおもしろや、君が世の久しき國やよつの海、岸うつ波もしづかにて、ちとせを呼ばふをひなづるが、すぐなる枝に巣をくひて、めぐみも深き玉川の、ながれの末のわれらさへ、心うきゝょの龜あまた、よろづ世までもいく千代を、けにをさまれるしるしとて、君にひかるゝ松がえに、立ちよるかげはいつもたゞ、老いてもくちぬ常磐木の、たれかいひけん水莖の、ひさしき御代より祝ひそめ、たかき屋にのぼりて見ればけぶり立つ、民のかまどもにぎはひて、ならべるかどのめでたさよ

㊃ころもづくし

君が代はあまの羽衣まれにきて、なづともつきぬ花衣、その色ごろもこひ衣、かいまみしかの春日野の、若紫のすりごろも、ゆかりの末をこひつゝ、思ひいるさのやまもみ

川風なほさむし―古今「都いでてけふみかの原泉川風さむし衣かせ山」
みよしのゝ―新古今「み吉野の山の秋風さよふけて故郷さむく衣うつなり」

ぢ、かをる風もかろしや夏ごろも、麻のさごろもうちはへて、袖もすゞしくゆく水の、かの八橋のかきつばた、その句のかみにおきむすぶ、むかし男のからごろも、きつゝなれにし七夕の、いほはたごろもかさねても、秋の川風なほさむし、ころもかせ山こよひはこゝに、たびねのころもうすくとも、一夜あかしてみよしのゝ、山もさむみて衣うつ、つまどの雨もしん〳〵と、なほしも冬の夜さむき、ころもやうすきかたそぎの、行きあひのまにおく霜を、うちはらひても拂ひても、おもきがうへの小夜衣、かさねてたえぬ契かな

㊄はつはる

春たつといふばかりにやみよしのゝ、山もかすみも里々の、けしきもいづれたどならん。けさの朝日に聲にほふ、初鶯のやどるてふ、梅の花笠たれにかも、きせてかへさん雨もなく、まして逢ふ夜のつまどうちおどろかすべき風もなく、花のさかりは千よ萬よ、まん〳〵よもよろづ代までも、たえずかはらず君が代の、花の色こそめでたけれ

しちむ―調ぶ

㊅一字のだい

そも〳〵定家の一字の題に、春はまづかすみ、鶯梅柳、蕨櫻に桃や梨、きゞす雲雀にかはづなく、すみれ山吹つゝじ藤、夏にもなればあふひ草、ほとゝぎすさみだれくひなの鳥にたちばな螢や、せみにあふぎはちすいづみや、秋はまたをぎ萩つゆのすゝき、蘭しか雁蟲にきりの月、鶉やかしきに菊や蔦もみぢに、冬は又しぐれのしものうすごほり、霰みぞれに雪鴨鷹ふすましいとぞ書かれたる

㊆清水まうで

やゝ住みなれしづが屋を、涙とともに立ちいづる、心のうちこそあはれなれ、まづ書寫でらをふしをがみ、ゆくに姫路をはや過ぎて、こひしき人にあふたの森よえ、あふたの森に鳴きあかす、烏鷺とはあれとかや、波のなるをの松風に、きんのねをやしらむらん、兵庫にはやくつき島や、舟のとまりの湊川、秋の千草のはなぐまや、生田昆陽野になく蟲の、こゑもさびしく打つきぬた、巻きかへしてはくりかへし、この布引のたき見

ゑんすゐ―淵水
か

れば、けしきまことにおもしろや、山よりおつる白波は、糸をみだせる如くにて、岸にたどよふゑんすゐは、藍をそむかとうたがはれ、なにはの梅も春ならで、にほひも更に、更に匂ひもあらずして、南には住吉天王寺、戀しき人にあふさかや、はしもとに宿をもとめ塚、こひゆゑ命を失ひし、二人の人のはかどころ、男山すむ月の岩清水にやや、どるらん、末は山崎たから寺、秋の山のもみぢの色、稲葉をわたる風の音、物すさまじきふぜいなり、鳥羽の戀塚はやすぎて、浮世はうしの小車の、めぐり〳〵て今こよに、清水寺にぞつき給ふ

⑧ありしよ

春すぎて夏きにけらししろたへの、ころもにまがふ卯の花や、はつ時鳥こゑにほやかにおとづれて、のこるや袖にありし夜の、ゆかりをしめてつょみおく、よるの螢のひかりをよそに、たど洩らさじと人めを深くしのぶ戀、もの思ふかととふ人さへも、涙の川の岸におふるうき戀草の、花になるともあふこひならば、岩根ふみかさなる山にまよふとも、

何かいとはん君がため、野にいでて刈るあやめ草、あやめもわかで待つ戀の、山路にかかるうき雲や、ふる村雨のおとにのみ、こひすてふ名はたつた川、水せきとめてこひの淵、かはらじとこそ結びしに、せきもる夜半の夢とほく、へだつる人の心より、かはるならひの夜こそつらけれ

⑨あさぎ

蚊帳にもれてのこる月、うはの空だきすがりたる、袖と〳〵はかさょぎに、かよはす中の亂れがみ、とる手あやなにしめかへし、しめかけ〳〵岩こすなみだ、あこがれいづる玉かと消えて、うき名たつとも命にかへて、なんのをしかろぞ、露にぬれたる一枝花よもみぢよ、色にいでてもうらみじ、問はぬつらさぞやるかたもなき、しのび車の通路なれて、人めよくらんこひぢの關は、治まれるをもつらしとよみし、賤があさぎぬ淺からざりし思ひの數のつもりし淵に、身をすてょこそよる瀬もあれと、うつり香そひて立ちわかれゆくいまのくるしさ、われかのけしき、またの日までを祈りてまたん、待つとしき

かば歸りくるかに

㊉うきくさ

此ゆふべふりくる雨は星合の、そらめせしまに恨みてのみや、牛のくるま河瀬をめぐる末はいろびとむれつゝ遊ぶ、風のかよひも西ひがし、岸のうき草たれ待つなくに、つきぬ言葉のうき世うたてのまひあしもなる神の、とどろ〳〵と雲井に近き峯の松さへたもとにうつる、月の宮川戀風そよと、しぐれつどきの軒端のともし、色の名寄を問ふまでもなく、知るも知らぬもながめにあかず、千鳥すがれて明けわたるそら、たれこめかごをかゝげてぞ見る雪も、五條の坂なか〳〵に、ふりみふらずみ白妙の、瀧も三筋のながれはたえず、死なざやむまい三年坂を、ゆくも歸るもあふ夜とわかれ、うちもねなん關の戸もりの、やさし八坂のなりよしむすめ、ふりよし小ぢよろ、花にはそめで眞葛のながめ柳かへでにおほろとくだる、たけのしたうらふすかとすれば、あくる一聲山ほととぎす、雨のなごりの卯の花に、いる月はもちろん繩手の螢、思ひ亂れて通はどよしや、からのやまとの橋をくもぢにかけて思ひを

㊉やまかづら

まゝにならぬはたが身にも、ありとのそれをたよりに憂き身をおくるべ、この年月をつゆか涙か、くるわの雨の袖はかわかず、身は沖の石、人をまつをのうらみぞまさる、ありし言の葉みないつはりの、いつか誠の色しあらば、しんぞ嬉しさなにしかまさる、あだし此身と人こそ思へ、人に心はかはらぬものを、よしやよしなき言の葉の、末をそれとたのむ心につらさぞまさる、今はなか〳〵おもはじものと、思ひかへせどまた戀しさに、亂れみだるゝ枕のなみだ、月にそむけて行くほとゝぎす、いとどこがるゝ人はともなれば、せめて夢にとかとりの衣の、よするまもなく聲々つぐる、鐘にきえゆく空ともなりて、野べの千草の青きがうへに、おもひおきたる涙のつゆと、あこがれいづる魂かと見ゆる、水のしらべの亂れの糸におなじ心かむすぼれやすき、とかくたまのを絶えなばたえよ、峯もあらはのやまかづら

おくるべ！おくるえの誤か

ゆくかふてふ―ゆきかふ蝶の誤か又はゆく香蝶か
きりよく―氣力

㊀十一 かきね

人しろはな吹きあへぬ入日の山、かへす日影のいとざくら、空にしられぬ菜の花の雲、波のうね〳〵ゆくかふてふの、袖をそれかと招くもくるし、思ひ亂れて垣根の柳、きりよくなうしてたゆたふ姿、藤のうら葉にやまほとゝぎす、まつ日はいなのたづきも知らず、ゆくへもとめん花たちばなの、後の心にむかしをしのぶ、いなの笹原わすらりよものか、露に涙につもり〳〵て、思ひの泉わきてながれのうき名取川、しづみはてなであらはれわたる、瀬々の岩波くだけ〳〵て物思ふ心、たぞやくひなの胸とどろかし、あともとどめぬ稲妻の、影かよふたもとにはら〳〵〳〵と、星のこほれに身をしる雨の、月につれなくくらぶの山の、松のひゞきに砧のこだま、窓に落ちくるかりがねの、俤さそへ戀しき人の、よそにかよひの道のべの雪、あとなつかしや住みすていほの、庭のおち葉に千草をとりて、ともに人めもかれゆくや、嵐こがらし枕さだめん

㊀十二 うすげぶり

おもひ馴れにし夕暮に、あようつゝなや戀衣、われかのけしきに立ちうかれ、涙もよほすはじめおもへ、不思議に人にあひ馴れそめて、只いつまでと契りしに、移ればかはる人心、うはのそらなる風さへも、まつに音づるならひあり、もはやとだえの中とはなりて、つらさに餘るそのゆかしさを、せめて見んとてかたしく袖の、うちぬる夢もはやさめて、うらみ數々窓うつ雨に、まだたきのこるうすげぶり、ふけゆく鐘も身にしみ〴〵と、月もさゆるや秋のそらァヒノテ今は身にしる愛別離苦の、うさを思へばなか〳〵に、庭のむらはぎうら枯れて、露もちりゆく初嵐、さりとはさびしをりからや、はかなき蟲のなく聲に、みだれ心のいとせめて

㊀十三 おもひ川

世の中はうつろふ色に身をせめて、うらみも絶えぬ思ひ川、流るゝ水も湯となるや、猶こり須磨のうら波に、たつや心の水けぶり、くるしみ深きゆくすゑと、思ふ心をすてぐさの、いほりのまがきのゆふべの空に、またしいまはの身なれども、過ぎし昔はその人

と、二世と結びし常陸帶、かけし言葉もいつはりの、あだになり行くうすなさけ、われ世にしらぬ身と成りて、今ぞさめぬる夢うつゝ、まよひの雲もうちはれて、こと問ふ風もたえ〴〵に、ふきて涼しきよはの空、ひとりふせやの月かげに、みわたす野邊の草花は、げにいろ〳〵に咲きみだれ、たえぬ詠はおもしろや

㊄はなの香

わけある里―色里
きやう―伽羅の誤か

初春の花の都のけしきかな、蟬の小川のかけきよき、たえず流るゝ水の泡、うたかた人にこと問はん、わけある里の風俗は、きょつょ行けばしな〴〵や、きやうのかをりのかをるはしんぞ、むかしも今もおなじ世に、名もなつかしきうぐひすの、初音やさしきをりからに、よしの三芳のはなさくに、うかるゝ心どこ〳〵ぞ、まづ武藏野の夕間暮、月をながめておす舟の、波のよる〳〵たれまつち山、よゝのみさをのこがるらん、また歸りきてしゆじやかみち、若紫やこむらさき、花むらさきのあけほのに、うつろひやすき人心、みかささしあふ一しぐれ、晴れゆく空や道芝に、入日のなごりくれなゐの、野かぜも吹きてあふ夜の床に、みだれさかづきかず〳〵に、又むつごとのうすなまり、ちとせ八千代のえにしをこめて、松はすみの江、かすみは外山、立田高尾のもみぢによすが、色といふ字に引かれては、きゆる命は勿論ぢや、忍ぶ夜ごとのそのかよひぢに、うらみろうさい別れざけ、まぶの男は一しほゆかし、ながと手まくら吸ひつけ煙草、袖はたまがは身はうき舟の、かょる思ひをいく世の中に、まよふ心は花そめ川の、色にいでじとつょむにあまる、物や思ふと人のとふまで

○原本別冊になりたれど巻数をこゝにしるさず

すめる御代―住む、澄む

散ればこそ―伊勢物語「ちればこそいとゞ櫻はめでたけれ浮世に何か久しかるべき」

若みどり第二巻

㊤ひなづる

ひなづるがその枝々に巣をくひて、君もゆたかにわれもゆたかに、すめる御代とて久方の、ひかりのどけき春の日に、しづ心なく花のちるらん、げに散ればこそ〳〵、いとゞ櫻はめでたけれ、ちらずはまたの春霞、たれかしのばん鶯の、谷よりいづる聲さして、野の末山の奥までも、おなじめぐみにあひたけの、よはひちとせまつもなん、君にひかれて萬世やへん

㊥月づくし

月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つに物おもふ、袖の涙に照りもせず、曇りもやらぬおぼろ夜の、月には色のそれとも見えぬ、梅のひともと手折りて君に、まゐらせそろと書くふみ月の、うれしかへしを待つよひの、月の夜すがらさかづきを、ひとりたはむれ手にもち月の、野べにかをるはらん〳〵、刈萱りんだうけ荻萩鶏頭をみなめし、男山べにすむ月の、光めでたや月の都になんよさァ、かくれないよさァ、須磨明石さらしな不破の關屋の月かげに、ひと夜かりねの夢うちさます、そのあかつきの鐘のねは、千里もひゞくえ

りんだうけ―龍膽花

いろものて―いろもれての誤か

人やとがめぬ―人やとがめんの誤

ふせやもふる―ふせやにもふるの誤か

㊦もりづくし

ゆく水ににしきつれだつ山川の、風にはら〳〵たまこぼす、朝な夕なのつゆの森、あまり〳〵てわが袖に、たえぬ雫のもりふかく、忍ぶもりのかひもなく、物やおもふと人のとふまで、あだに袂のいろものて、人やとがめぬはづかしの、森のしたべにおく露も、みなくれなゐの玉とのみ、見えてこずゑにいとしるく、ともしつれたるもみぢ葉の、あたら酔ひをば吹きさます、こがらしの森秋さびて、いとゞさびしき園原や、ふせやおふるはゝその森、ゆくかりがねの羽風より、こぼすは露か雨のもり、はれて思ひもゆふぐれも、いと面白くすむそらに、いり日やいづる月かげの、光めでたき秋の夜や

㊉はなもり

色にめでつゝかをりをしのび、さかり惜みてゆふ花垣の、ひまをもとめて枝折る人を、とがめとがむる身は花守の、露の袂をうちはらふにも、いとまあらしの又さそひきて、むげに散らせる花の枝、かをりなりともせめては庭に、のこせ春風、又春にあふは久しき世のためし、思ひわびても怨みても、どうてあらしの心はあらし、いらぬなげきと思へども、いかなる花のえんぢややら、わするゝひまも中々に、あるにかひなきすて船の、こがれこがれて春ふかく、しのぶ心をそれぞとも、問はで櫻も色も香も、ともに散りしく花の庭

㊉一まつらぎぬた

八重の潮路にまつら舟、風のたよりも秋ふけ〳〵て、うちもねられぬ砧の音に、ちたび碎くるエイ千たびくだくる袖の露、嵐山みねのもみぢ葉はら〳〵ほろ、波のよる〳〵まつら舟、風のたよりも秋ふけ〳〵て、うちもねられぬ砧のおとに、ちたび碎くるエイちたび碎くる袖のつゆ、嵐山みねのもみぢ葉はら〳〵ほろ、芭蕉の葉の露ふりすつる、思ひきろやのエイ思ひきろやの戀のみち

㊉二はなくどき

年のうちより咲く梅の、花のかをりもふりも、いとしほらしき野べの風さへそよ〳〵そよと、心して吹く櫻のもとに、うしとかきおくその言の葉の、あゝなつかしき若紫のはな、かきつばたあやめにかゝる夕顔の、露の袂におちて尾花が末に影やどす月、桔梗かるかや萩をみなめし、色を爭ふ山々の、もみぢ皆ちりはてゝ、かれ〴〵のこる冬の草木のものわびしげに、庭の水仙雪や霜にうもれ、いとゞあはれのます夕暮に、鐘も音なくえだ〳〵の鳥のねをなくなえ

㊉三かうづくし

日影のどかに源氏くわげつの香くらべ、春は名にあふ花のえん、梅鶯のくらべ馬、ひとりこがるゝ柴舟みすり、にくやへだつる朝霞、かをりわすれぬありしまたねの床のうち、初音ゆかしきほとゝぎす、しのゝめ薄雲ありあけに、ちよとつきいでは姥捨や、更

科あけぼの富士龍田、そりやかをりくる、そりやこそかをりらん橘に蘭奢待、秋は白露もみぢ白く、ちり〳〵やつちり〳〵、ちらりとふりては、さつてもふりつむ雪のあしたの面白や、冬の霜夜をしなゞかはる、伽羅のけぶりも命の君に、いくよとめてもとめあかぬ

ともし―とめしの誤かとめき―留木、伽羅のこと

㊀はつあらし

さらば〳〵と聲もたえゆくのだの原、おくりかへせばいとど身にしむ初嵐、菜種の花もうらがれ、憂いもつらいもこの身になして、名殘つきせぬこれもしの、せめてこち寄れうつりの衣に、ともしとめきのかをりは又の逢瀨までにと、袖うちかけて茶屋の朝酒けしきもにくや、店にそむけてかく玉章の、筆のかず〳〵卷きかへし、柱がくれにゐがくれもせで、馴れししやみせんつれうたひ、逢ふは嬉しや別れはつらし、あはぬ日數をかぞへ〳〵、いつはせめて夢にとすつとん〳〵、末の松山波はこさじと契りても、首尾はまかせぬ心ばかりかすつとん〳〵、とんともたれてひとしほに、忍ぶ涙を漏らさじものと、思へどぬるゝしろ小袖、ありしなさけをそのまゝに、又のえにしを待つばかりに

馴れてそめて―馴れそめての衍かなそのの―上そのの衍かひたひぼ―したひぼの訛

㊁川づくし

戀とおもひを笹舟に、のせて戀慕に迷ふその追風や、しのび車の音なし川よ、文字白河や關守つらく、こよひならずはあすか川、鳥川生田川にもきて大井河、君もろともに世にすみだ川、うき名取川いとひはせねど、あだな立田の河波たゝば、中やたえなんいやよよし吉野の川、この身はとても燃ゆるおもひのその富士川や、けぶり絶えせぬごけんはとかくいつも菊川、うらなきわけをひとへに思ふ衣川、さて見よかしのえ

㊂せきづくし

かごとばかりにあひ馴れてそめて、今はなか〳〵鶯の關、つゝむつらさのいはでの關よ、戀に朽ちなんなこその關よ、いく夜ねざめぬ須磨のせき、なその見るめもせきの名かへて、いつ逢坂のせきともならば、とけて心のひたひぼの關、明くるあしたのわかれの床よ、せめてかたみのころもでの關、かはす袂になごりも盡きぬ、いかで涙をおさへ

の關よ、つもる思ひのやるかたなさよ、書きすさみたる文字の關、いよしもの關

㊀はるくさ

雪きえてしな〳〵いづる春草の、あを〳〵としてつゆも雫もひとしほに、猶うき立つや袖の色、わきてゆかしき鶯の、こゑもゆたかに囀りて、あをやぎの若葉にそよぐ風の音、いとしろやかに治まりなびく人心、たどわれとなく打ちとけて、たどたはむれ遊ぶうちこそは、げにまことかなたれも皆知るも知らぬももろとも、其名をしたふ櫻花、八重やひとへに咲きみだれ、かすみにつゝむ山々の、けしきはいとどしほらしや、あらぬながめは千代までも、かはらぬものは松が枝に、みどりはいつも面影の、のこりて久しきひとふしを、限りないこそおもしろや

いとしろやかー
いとしゞやかの誤か

㊁寢屋の月

待つ夜ながらの月をながめてうらみわび、思へばぬるゝ袖のつゆ、かわくまもなき夜をひとりこがるゝ床のうち、それさへあるに蟲の音の、かれ〴〵なればあはれさまさる、霜夜ふけゆく鐘のこゑ、つま戸をたゝく野嵐は、もしやそれかと立ちいでて、見れど戀しきその人に、あらで身にしむ風の音、庭の秋菊にほひきて、いとどゆかしさまさりくる、人をしのぶるものうさを、あはれとだにも問はぬはつらや、もはやこぬ夜とまつ夜のしぐれ、濡れにぞぬれしわが袂、告げてわたるや群鳥、はやしのゝめも明けゆけば、又の逢瀬をたのしみて、涙ながらの寢屋のうち

蜘蛛のいに云々
―下句「ふた道かくる人はたのまじ」

㊂きぶねまうで

蜘蛛のいに荒れたる駒はつなくとも、ふたみちかくるあだ人を、いかに頼まんあだし野の、あだしこの身はまゝならで、月日ほどへて昔のわけを、思ふもぬるゝ我袖の、涙にたへぬあだ波の、よる〳〵ごとに立ちいでて、ふりあげ見れば大原や、おむろに近き小鹽山、たどすの森の木の間わけ、通ひくるまのたそがれ見れば、くるまの〳〵、たそがれみれば、包むつらさと袂にあまる、わけをゆふぜん左のかひな、もゝにすけさま命とほりしそのむつごとも、いつしかかはる淵瀬をなげいた、あまのすて舟われひとり、こ

がれ〳〵てゆくもの、かげさへ淸き鴨川に、やつれはてたよわが顏かたち、かくは見棄てそよしなやな、三尺袖を年がよりたら何振ろに、せうがえな、ふれやふれふるづまいとし、われふるづまをえ、あとにみぞろが池波に、ひよ〳〵と鳴くはひよどり、小池にすむはをしどり、はんま千鳥かちりりんな〳〵ちりりん〳〵、ちつとしてさてゐりくりゐんぢよの、岩間々々をつたふ、にしは田のあぜ、あぶない、がてんぢや、あぶないあぶない、あぶのてならぬえ、細道あぜ道をくどり〳〵、くどつて松の嵐にさつ〳〵と、たぎりて落つる鞍馬川、戀の淵瀨とたどれども、猶も思ひはうしのとき、つきだす鐘ともろともに、貴舟の社につき給ふ

梅の香の―「梅のかをりの」の誤か

㊱みちしば

いくよ久しくかはらぬ松の枝葉さかえて、色もことなる若緣、戸ささぬ御代はつきもせぬ、げに春なれや朝凪に、霞こめたる山もとの、梅の香のえならぬも、よそにやこゝに吹きこせば、いとど心もあこがれて、ゆかしき里はあれ〳〵と、ゆくとへだてはなか川の、わたりもたえて櫻かざしてこの下かげの、露にぬれつゝぬれてけふも又、かへるの道のたそがれ見れば、さてもやさしや螢の蟲は、しのぶ繩手に火をとぼす、しやうがえ、うさやつらさにこの身をなして、心づくしのかよひぢなれど、秋のこのまを洩れくる月に、ながめやさしき白菊の、ふけて砧の音きけば、よそにも人を戀ひぬらん、われはそれにはひきかへて、人目の關のしげければ、かく忍べどもかひぞなき、なれどさだめぬ、うき世こそ、賴むかげぞひとすぢに、よしや命をかぎりにて、通ひかよへば今ははや、まことの色にうちとけて、君もろともに千代はへぬべき

わすれて―わすちれでの誤なるべし

㊲つくもがみ

まだ夜はふかし床のうち、深き思ひのかず〳〵を、かさねてきつゝかたらんと、心うかるゝをりふしに、はや門あきと告げくれば、今はの心づくもがみ、尼寺のかねの音に、かぞへてぞ行く橫雲の、ねむさを包むぢよらうの、又ぞとばかりゆひのこす、面影さらにわすれて、わがたましひも殘るらん、月も出口へゆく空に、提灯しらけ供人の、よひの

酒宴にあをざめて、あくびまじりで歸るらん

㊂みつせ川

まゝにならぬは浮世の中と、思ひすてゝも猶すてられぬ、金がうき身のかたきとなりて、これぞ命のはてならん、消えもはてなば殘りて人のあとで恨みん事もやありと、思ひのたけを語れば君も、同じ心のうさつらさ、にくや蹴けと横吹く嵐、それさへあるに西國船の、さそふながれにまかせんと、仰せも重きたらちねの、恩を思へばいもせ川、ふかきそ樣とみづからが、あひの中川みづまして、遠きわたりとなら柴の、露と消えなん心ぞならば、もろとも三途の川の瀬を、手に手をとりて越さんといへば、男よろこび言の葉の、いつはりなくば後ほどと、まづその時のいとまごひ、立ちわかれゆく夜は何時ぞ、八つ七つもはや過ぎて、六つのちまたも近くなる、夜明烏やふじこやの、囘向の鐘ともろともに、死出の旅だちかいどり姿、おなじ所にいであひて、これぞこの世の見をさめと、たがひに顔を見あはせて、いざや最期のさかづきと、男にさせばいたゞいて、今

そ樣ーそなたさま

よりのちは誰とかは、とりかはすべきこの盃と、二つにわりてふたりが中に、殘る卯月の五日の朝の、露の玉のを絶えてもあとに、殘る浮名は皆人の、袖の涙のたえならん

たえならんーたねならんの誤か

人に命はー人の命はの衍か

㊃そでのつゆ

定めなきゆふべ〳〵のそなたの空に、けぶりも立つやあだし野の、あはれはかなき世のことわりと、思ひ知られていくたびか、心までくるわが涙、人に命はあすをも知らぬ、けふも通はんあの里へ、定めなきとは思ひはしれど、袖にしぐれのひととほり、ぬれて木蔭にたちよりて、しんきばらしの煙草とともに、やすむそなたはひかた道、えもん橋こえて行けば、出口の茶屋の店、音もしどろに引くさみせんに、汲むやしだいにあの酒のゑひ、ねむりこけたる客もあり、いびきまじりにたが寢言、あくびがちなる長唄も、なかばはよそに歌はする、ほかの噂とり〴〵に、無理の口說のそら泣きは、かぶろの時より習ふらん、身あがり多きぢようらうの、一方ならぬ物おもひ、かさなる年のきりまして、涙にしづむ格子もあり、店のよねしゆははしたなく、文のかず〳〵書きちらし、人

を咎むるかへこと葉、げにそれ〴〵にながめつゝ、過ぎゆきこせば揚屋町、とある宿屋にたち入れば、かず〳〵にもてはやし、飲めや歌へのさかもりに、はやしのゝめになりぬべし

㊀わかれぢ

見送るゝ中々つらきわかれ路に、月まちてとは何故に、とどめて今の物思ひ、やるかたもなき小車の、しどのはしがきかきつめて、百夜もちよとありてのみ、うきまろ寢する心地して、ひとよはのその程を、明かしかねたるわが寢屋の、ひまさへ殊につれなくて、何をたよりに有明の、月毛の駒にかた手綱、引きとどめてもとどめても、盡きせぬ君が手枕の、かはるならひの世ならずは、やがてあをぞや語ろぞや、只とにかくに月と日と、緣と命をたのみにて、又くるゝ夜のあるものと、心たのしむ朝ぼらけ

㊁むめあした

梅のあしたの匂ひを、櫻の匂ひを、くれてゆく春ともろとも送りこし、夏は橘あやめ草、秋は桔梗かるかやをみなめし、冬は時雨にまなくも、紅葉ちりしく嵐山、あらしおもしろの冬空や、雲のあなたの春風に、おちくる花のおのづから、梢に知らぬ色なして、散るは吹雪かわが袖に、しばし宿るゝ、常ならぬこれもえにしと思川、心の氷うちとけて、枕にさはる風もなく、夢もゆたかに夜はも白かに

あらしおもしろの―あちおもしろの衍か

白かに―しゞかにの誤か

㊂まつがえ

國もゆたかに靡く世の中を、治まれるためしには、松に小松の生ひそひて、枝に枝葉に葉のさかえ、ゆたかなる君がめぐみの時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、げに仰ぎても猶あまりある、我國の春こそいとゞめでたけれ

㊃よ　町

世々のながめは春秋に、いづれおろかはなけれども、光源氏のおもひ人、よまちにうつす心こそ、わきていはれぬけしきなれ、春はまづ咲く梅が枝に、初音ゆかしき鶯の、おのが塒に宿木は、つきせぬ花のえんとかや、こぞのかたみの雪間より、若菜さわらび萌

なをなつかしみ—野をなつかしみの誤なるべし

えいづる、なをなつかしみ一夜草、胡蝶や夢をむすぶらん、花散里のなごりとて、藤のうら葉にさきそむる、若紫のすり衣、しのぶに餘る袖のいろ、世を空蟬のなきくらし、螢より猶身をこがす、葵ぐさの名のみにて、あはぬ日おほくしんぞ戀ひわたる、夢の浮橋とだえしてな、明けやすき夜もすがら、ひとりぬるまぞ久しき、いとどさびしき床のうち、うらむる小唄に涙の袖しほる、つらいは〳〵のうつらいは我心、戀しき人を幻に、思ひあかして身をつくし、かけし命はかげろふか、朝顔の露よりも猶はかなしや、野あきせしあかつきに、蓬生になく蟲のこゑ、まつ蟲すゞ蟲きり〴〵す、いとど寢られぬ秋の夜に、うつや拍子の唐衣、袖の涙はしぐれども、そらさだめなき薄雲、高根のみ雪ふり積り、都の富士のながめには、あづまやかひぞなかるらん

野あき—野わきの衍なるべし

都の富士—叡山

(世七)そでの香

梅がえに鳴く鶯の、聲もろともに皆人の、心の花もいろ〳〵に、うき立つ春の糸櫻、霞のうちに香をとめて、たが袖ふれし昔ぞと、忍ぶに飽かぬけしきかな、あやめにそこぐ

木辻—奈良の遊廓

みづの浦—みつ

夏の風、いとど涼しきたそがれに、山ほとゝぎす音づれて、猶し昔のなつかしく、今更にぬるゝ袂もうらめしや、ふけて寢屋もる月かげに、鐘の音さへかすかにて、ひとりぬる夜の枕もうくや床のうち、いつのまにかはうつろひて、涙つゆちる秋の野の、草の葉ごとにしら〳〵と、のこる荻藪霜折れて、山もあらはに松ばかり、身は數ならぬ美濃のお山のゆふしぐれ、思ひとしふるかひもなや、けさの明方ひとしほつらや、いつもわかるゝ君なれど、さりとてはさりとては

(世八)こひのきやうか

よしやわざくれ只世の中は、一夜ならではなかりけり、きのふは過ぎし昔なり、あすは知られぬよそにして、定めないものましかの、なるほど〳〵布はなるほど白くなるほど、娘は黑む、笠買うてたもれや、あゝこれの近江菅笠を、やあゝこれのたつ田の川の清き流れに盃を、うかめてともに飲めや〳〵、酒は酒屋に茶は茶屋に、ぢよろは木辻のなる川に、とかく浮世は戀とたからと、さつてははんじよと〳〵、みづの浦難波あた

の浦の誤字なるべし、みつ（御津）は難波の古名なり

うさ言―うは言の衍か

りの夕暮おもしろ、おもしろや人の思ひのつもりては、戀のしづくと流れいづる横堀川の水、いろに溺れ〳〵て名を流し、身はうつせみのうつゝなく、もぬけのからとやつれても、更にえ捨てぬ戀のみち、思ひ暮らしてうか〳〵と、うたゝねむりのうつゝなく、うさ言の葉にうくばかり、われ死なば難波にすてよ横堀の、川の水ともなりやせん、もしとつゞけて覺めたる夢の、われにはづかし

㊇そ　め　川

ゐでの玉川水せきとめて、岸の蛙の聲よどむなる、淀の川瀨の水車、めぐりくるまの川波まくら、ありしゆかりにあひそめ川の、深きえにしもかはればかはる飛鳥川の淵瀨、よしや吉野の川うつ波に、身をつくしても何にかはせん、歌ひたはむれ遊ぶがよいわいの、たれか殘らんよの中川に、かけて渡せる橋のうへより、文とりおとし、水にふたりの名取川、よしや君ゆゑ立つ名の何かをしかろの、裾ひたし通ひゆくその川波に、つきさし下す舟の佐保川、さむけき夜半を厭はであかすわが衣川、名さへゆかしき加茂川の、ながれ汲みて心にいつまでも、たえすなたえなえ

㊆わかのうら

常磐なる若松の色うるはしく、つゞく榮えはゆたかにて、幾代へぬらん住吉の、神のめゞみぞありがたき、みつの浦波しづかにも、天照らす日ののどかにて、都の富士の名高さよ、もろこし船のとほながめ、げに面白の風景や、須磨や明石や和歌の浦、千里も見ゆる月かげに、友どちよりて汲みかはす、命ものぶる菊酒に、つきせぬ代こそめでたき

㊈かせんがひ

あとなつかしき世の中に、色を好める源氏貝、あるひは百貝歌仙貝、わかくさゆふのすだれがひ、戀わすれ貝すみよしの、濱の蛤しどみとる、汐干の春の花貝は、たが袖のにほひぞと、問はゞや梅の花貝も、闇はあやなし色貝を、好む心のみやこがひ、家づと貝を手ごとにや、折りてかざらん櫻貝、空にしられずふる雪も、つみな隱しそいたや貝、軒端にすだつ雀貝、恐れなしそ烏貝も、いのとおしやる聲きけば、いとゞ思ひのます

したゞみ—舌鼓、細螺

淡路島—泡にかけていふ。

を貝、色にいでたよ紫の、ゆかりと聞けば撫子の、したゞみていふ言の葉の、あとは空しきうつせ貝、身をかへて行くこのもとに、なみまがしはのふたおもて、うらうつ貝もあらばこそ、荒磯貝によるふながひ、呼ぶ聲たかきあまがひも、しばし待てとはまてがひの、こぬはあはびの片思ひ、なまなか棄てん身なし貝、とは思へどもわれ貝の、われても末はみぞがひに、落ちあはんとの約束を、かたし貝とはよもなさじ、ちくさの貝の錦貝、色どる秋のうらばとて、小貝こさどいいがひ取る、月もふけゆく法螺貝の、峯に入るこそなごりなれ

㊃しまづくし

ほのゞ〳〵とまづ明けそむる初空に、かゝる霞ののどやかに、三重七重八重九重までも同じころものしま模様、きてうしほ汲む田子のしま、春日につれてひとしほに、猶色ふかき松島や、雄島の浦にうちよする、波にもまれて浮島の、岩根につもる淡路島、通ふ千鳥の聲までも、春めく水にこぐ舟の、中に敷寢の苫が島、たびのやどりの夜もすがら、あ

沖の島—置くにかく

あふしま—大島

るじと頼む花のつゆ、袖にこぼれて沖の島、ばら〳〵鳥の聲そへて、きりにむまなくあさぼらけ、宇治の川島まきの島、小島が崎に吹きかをる、風しなやかにうち靡き、つひにはめぐりあひの島、あふしまごとの別れ路に、いく袖ぬらす水島に、うつるも曇る春の夜の、おぼろ月夜にしく〳〵ものぞなき

㊂ちらし

げにのどかなる春の日に、霞のうちにしのばしき、にほひ含みて梅の花、八重も千よも今がさかりよ、折りたやの枝なを、みごとによう咲いた、やれそでの名によせて、引けさ折れさ、散らぬまにちらぬまに

㊄つゝじづくし

さなきだに春風ゆかしみ吉野の、里にながるゝ櫻川、花とは見えし谷々の、雪こそにほへくれなゐしぼりやへ紫やこむらさき、ゆかりの水の吉野川、おぼろの月のひま〳〵に、せめて一本折り入りつゝじ、花のなさけのその奥を、たづね尋ねて奈良坂や、兒手

柏のふた面、とにかく物を思へとや、いはでの山の岩つゝじ、嵐の山の峯のたかまつ、しぐれにさへも染まで幾年すごすらん、げに春毎に咲きそろふ、大きりしまや小きりしま牡丹つゝじの色とほき、さつま千よの花がたみ、夏山かけてかをりくる、其花車あいらしき、いとくれなゐにとびいりまんよ、まがきつゝじの花のつゆ、手にやむすびて我袖に、暮れゆく春をしばしとどめん

㊷みだれぐさ

春ごとにまづ萌えいづる若草の、色もことなる深見草、すぐくれ草のふき靡き、月もろともに雲見草、葉も散りくるやかはた草、たれに見よとてかたみ草、のこせし人にたむけ草、こふる思ひもふかえの、身は浮草の根をたえて、さそふ流れに岸根の草の、みだれ亂るもことわり草や、ゆふべくのそのひかり草、風あり草のしな弱く、濱名の橋のとほながめ、早くも野べのはつみ草、みやびやかなる面影を、忘れもやらで戀ひわたる、心も深きかけ川の、あふせもがなと祈りしに、いく千代見草かひもなく、あだに朽ちぬるあだな草、今は中々思ひ草、しきなみ草のおとづれたえて、問はぬいほりのにはき草の、つゆの姿をさまゞくと、おのが菓色にこそめ草、身はすて草とよし朽つるとも、わが戀草にさく花の、えんにあはでも果つべきかはと、亂れ草なる心の糸を、むすび直すや戀衣

ふかえ―深江

㊸ながき夜

長き夜すがら寢られぬまゝに、過ぎし事のみつくゞくひとり、枕ばかりに物こそ思へ、心つくしよ、よしなやいつそ思ひみだれて物ぐるしきも、つらや此身のまゝならぬ世に、引く手あまたのつとめの憂きに、ありし逢瀬の睦言も、うそのかずくゝ空恐しく、くゆる心は今さらなれど、せめてのがるゝ身にしもあらば、心すみぞめすぐよのさとに、いとまなくくゝ只ひとりのみ、きのふは今日の昔とだにも、思ひ暮らしてあしやのすまひ、心なきともあはれを問ひて、人の袂もわが袖も、しばし涙に色みえぬ

㊹ねざめ

別れぬる夜のうきねの床に、ふけゆく月のつれなく見えて、ひとり寢ざめにつらさぞま

色をもふかき―色香もふかきの衍か

さる、しんき晴らしの煙草もよそに、せめて夢にと又引きよする、ながき枕のそのかひもなき、契る言の葉わすれもせずは、戀ひん心の色をも深き、袖のけしきは身をしる雨の、ゆかしなつかし、とは思へどもいかでかはせん、此里のみの露と消えなんうきたまのをよ、定めなき身はあゝものの悲し、時しも秋の空ふく風よ、あはれかはゆき鳴くさを鹿の、いづち行くらん、つま戀ひかねし忍ぶ繩手のかよひぢ見れど、をちこち人の音さへたえて、殘るありあけ薄雲外山みゆるあけのゝ頃にもなれば、いとどさびしさまさりて猶も物を思へとわが黑髪の、亂れ心はその人に

若みどり　第三卷

端歌目錄

一　わか水　　二　はるの花　　三　松は豐のかはり
四　ふか草　　五　たまくら　　六　ほとんどぶし
七　かよひ車　　八　しがらみ　　九　もろこし
十　しほや　　十一　どうでのかはり　　十二　うらわかみ
十三　あふ夜　　十四　あさがほ　　十五　さかひ
十六　にしきぎ　　十七　伊勢の櫛田かはり　　十八　あさづま舟
十九　江戸ぶし　　二十　あさ草　　廿一　玉のさかづき
廿二　春のやま〳〵　　廿三　ちぐさ　　廿四　あさがへり
廿五　せうし　　廿六　茶のみ時かはり　　廿七　もちろん

廿八　松原かはり　　廿九　小柴　　卅　はんぢよ
卅一　ありまぶし　　卅二　さんさぶし　　卅三　むこがは
卅四　加賀ぶし　　卅五　くどき

端歌

㊀わか水

春はいつしもよい若水のながれ汲みそめ、たえずめでたい屠蘇の酒、たれもしづけきあの顔つき、大は正月きさらぎ、彌生は小のはじめ、丁月は大よ、さつきみな月小でもとをす螢火やさし、七八月は大こそよけれ、月のながめに咲く菊月や、そのきくの花小でも色のめづらしや、さてかみなし月〳〵、霜月師走みな大の、かずもめでたい年のくれ

とをすーともすの誤か

㊁はるのはな

はるは花さき名も高橋の、かけし情はかよひくるわの道すがら、たれも目につくあの花桐、月は三五やながめに飽かぬは、だてな道中ながとの君や、色もふぢべの亂れて靡く姿をよそに、見てのみ戀ふる高間の山の、峯の白雲葛城山と、その柏木の衣紋のしなはしほらしや、さて上著の袖や袂の風に、散らすな花のきりしまを、君が庭木といつまでも

ふぢべー藤枝の誤なるべし、遊女の名なり